
学園まろんズ

風上都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園まろんズ

【Nコード】

N8659F

【作者名】

風上都

【あらすじ】

街で発生する怪しい噂。それらの噂を蒐集する怪しい連中のおはなし。今回はどうやら学校で怪しい噂が、またひとつ・・・。

第一回 「学校の噂」

最近、下級生の女の子たちの間で、小さなちいさなおまじないが流行しているという話。

それを聞いたのは、本当について最近のこと。

平たく言ってしまうえば、実は今朝のことだったりするのだが。

義務であるとは判っていないながら、そのことを敬愛する部長どのに報告するかどうかは、正直なところ、俺こと奈雅座由^{ながくらゆうた}有多にとつて、洒落にならないほどに差し迫った懸案事項であつたりするのでした。

ナゼって、・・・そりゃあ、またぞろ変な出来事に巻き込まれるのは、善良にして平凡なる男子学生でしかない我が身には、正直荷が勝ち過ぎて勘弁してもらいたいからである。

「・・・あー。マジでどうしょっかー、なあー・・・」

自分の机に突っ伏して、頭を抱えて考え込んでいても、結局のところ問題の解決にはならないのが判っている。

けれど、ちよつとぐらい天に甘えたりするぐらい、俺にはきつと許されるハズである。

なにしろ、あの部長どののお守りを一身に引き受けている我が身である。

少しぐらいのワガママが許されないハズもない。

・・・だが、結局のところ。

俺がささやかなる抵抗として、今日のところは報告しないでおいでも。

結局、まず間違いなくその翌日には、我が敬愛する部長どのが、同じ情報を鷲掴みにして引きずってくるハズである。

同じ巻き込まれるでも、能動的に行動し情報を部長どのに提供し満足を得てから臨むか、受動的に行動し部長どのへの情報を故意に隠蔽し不興を買ってから臨むか、どちらがマシな結果になるのかは、もはや考えるまでもない。

・・・結論はいつだって同じである。

ただ、その判りきった結論が悔しいから、俺はこうしてウジウジと、一人惨めにみつともなく、悩んでいたワケなのだが。

いずれにせよ、敬愛する部長どのの役に立てるのならば、俺も嬉しくないハズがない。

そうと心を決めてしまえば話は簡単で、俺は今日の放課後にでもその情報を、愛すべき我らが暴君、無駄に無意味に行動派の部長どのに提供する心構えを決め――

「・・・・・・。うわ、やっべえ、俺ってもしかして、タイミング最悪ですか」

決めかけた刹那、俺の口からこぼれ出たその台詞に、俺の席周辺の

クラスメイトが実に嫌いな目付きで、俺を生暖かく見守ってくる。

その理由は明白で。

廊下を駆ける、軽快にして爽快な足音が、生徒たちの話し声で騒然としているハズのこの教室の中にまで、きっちりしっかり届いていたからである。

軽やかな足音はこの教室の前でぴたりと止まり、俺は自分の悪い予感が的中していることを確信する。

——甘かった。あの部長どの相手に、明日はおろか、放課後まですら猶予があるものと思っっているなんて。

扉が元気よく軽快に、全開にされる。

「ユータぁー！おんもしろい情報をキャッチしたのだ！すぐさま部室に集合するのだ！——！」

教室中に響き渡る、大きいけれど不快ではない、爽やかにして快活な、笑いを含んだ可愛い声。

なにを隠そう、彼女こそ、俺が敬愛して止まない、我が部の部長のである。

見た目はちょっと可愛い女子高生。いや、中学生と高校生の境目辺りがホントのところ。

セーラー服にボブカット、ただし珍妙な耳（髪の毛の一部がネコミミみたいにハネている）つき。

やや吊り眼で、その癖愛嬌を感じさせて已まない不思議な眼。

801やおい好き。レズではないけれど両刀。

実は結構性欲を持て余してるんじゃないかと心配になる。

発言はいつもいつでも奇妙奇天烈、一言で括ってしまえば不思議ちゃん。

妙な口調、妙な性格、妙な人格。

語尾が少なくとも俺の知る限りいつだって「ゝなのだ」とか話すやつ。

麻七菜まななこまへ鉦真子。

それが、彼女の名前。

そして彼女こそ、俺も所属している、我が学園で一番ナゾの多い活動内容を誇る、名前からして如何わしい、はつきり言って健全さの欠片もない、青春とは悲しくなるほど縁遠い部活、“クラブ まろん倶楽部”の部長でもあるの、だが。

「・・・え、あの、その、鉦真子さん？すぐさまて、もうすぐ次の授業が始まっちゃうんですけど・・・？」

ぽつりと蚊の鳴くような声で、無駄と判りきった抵抗をする俺の声を、なんと我らが部長どのは教室の入り口から察知した様子で一（俺の席は窓際。しかも最後尾、鉦真子は教壇側の入り口に仁王立ち）

、薄ぺったんなその胸を、いっそ恥ずかしいぐらいに誇らしげに張って、大声で宣言する。

「情報とは生き物なのだ！すぐにでも手を付けないと、どんどん劣化して最後の最後にはどうしようもなく腐敗しちゃって大変なのだ！学校の授業は、とりあえず留年の恐れがない程度にできる鈷真子には、はっきし言って優先順位がヒクヒクでボトムもいいところなのだ！」

「きゃー！学生の本分を鎧袖一触ですか、鈷真子さん！ソコに痺れるけれど懂れたりとかぜってえ有り得ねえー！ー！」

「つべこべ言わずにさっさと来る！でないと、鈷真子の怒りのローリングソバットが炸裂しちゃって人事不省になったユータを、鈷真子が運ぶ羽目になるのだ！」

「きゃー！またしても物騒な台詞を吐きやがりましたねこの女狐！俺の人権をなんと心得るのかなホントに！」

言いつつ、俺はじりじりと腰を座っていた席から浮かしていく。

ナゼって？そりゃあもちろん。

あの女は、自分で言ったことは間違いなく実行するのだ、これが。

正直な話、俺は敬愛する部長どのと違って、成績や出席日数の方に、あんまり余裕らしい余裕があるワケではないのだ。

おまけに、鈷真子ときやがったら、あの性格の癖して、教師たちにはそれなりに評判がいいのである、ナゼか。

その点、俺は素行に関しても鉦真子のような奇人変人に劣る始末で、ぶっちゃけあとが怖い。

なにがなんでも、こうした真面目に過ごせる時間ぐらいは、まっとうな学生として過ごしておきたいのである。

いいじゃん、放課後までくらい。

今昼休みだぜ？

・・・で。結局あの敬愛する部長どのと相對するには、座ったままなんて問題外。

腰を浮かす程度じゃ、あの無闇矢鱈と腕の立つ、今どき珍しい変態女子高生の蹴撃を躲すなんてとてもとても――

――などということを考えている間に、頭部にいいのをもらってしまったみたいで。

痛む頭をフリフリ、目覚めた俺は既に部室の人だった。

「・・・あー。マジ信じらんねー。鉦真子、おまえさあ、幾らなんでもこりゃ酷すぎじゃねえか？」

体を起こして、俺はどうやら部室のテーブルに載せられていたことに気付く。

・・・まな板の上のマグロかなにかか？俺。

「あー、やー！ーっとな気が付いたのだ、ユータ。あんまり眼が覚めないから、鈷真子はとっても暇しちやっただのだ」

実に可愛く、小悪魔的に笑って、鈷真子は俺のまん前の椅子から立ち上がる。

「・・・・・・・・！？」

椅子。俺の、まん前？

慌てて全身を探る。

着衣に乱れ。

「おのれなにをしやがったッ！逆セクハラはなし！なしっ！！アブないから！ね！？」

取り乱す俺に向けて、鈷真子はくふふ、と――（やな感じに）笑って曰く、

「ユータの・・・中々元気で興味深かったのだ」

「きゃー！痴女です痴女！おまわりさあー！ーん！！」

やべえ、俺死にたいかも。

憧れの鈷真子さんに見られちゃった！

しかもだらしく気絶しているときにシゲシゲマジマジ全身を!?

おまけになにか、就寝時でなく失神時でさえ、男子の生理現象たるもの時と場合を選ばぬと申すか!?

「ウソウソ、冗談なのだ、じょーだん」

あまりのことに蒼白になった俺を執り成すように、茶目っ気たっぷりに鈦真子ちゃんはそう仰いました。

「・・・・・・・・・・」

「・・・あ、あんまり怖い眼で見ないで欲しいのだ、ユータ。そんな眼で見られると、鈦真子、鈦真子・・・貞操の危機を感じちゃうのだ・・・☆」

☆じゃねえ。

頭の中ではそう叫んだけれど、あまりの可愛らしさにそんなことは決して口にはできないのでした。

「・・・ユータ、いやらしいのだ・・・鼻血が出てるのだ・・・」

「男の子だものッ!!」

言わないで、それ以上言わないで鈦真子さん。

羞恥プレイはもう嫌ッス。

そんな俺の想いが通じたのか（有り得ないと判っているのだが）、
鉦真子が早速話題を切り上げ本題に入る。

「さて、今日ユータを召集したのは他でもない、面白い情報を耳にしたからなのだ」

召集ではなく拉致だった辺りをつつ込みたかったけれど、これ以上
話題を蒸し返すのは間違いなくバカのやることである。

なので、俺は真面目に答えることにする。

「・・・なあ、それってもしかして。最近下級生の女子の間で流行
している、小さなちいさなおまじないの話か・・・？」

「おや。ユータも知っているなら話は早いのだ。・・・でもお、ユ
ータあ？その情報、一体いつ手に入れたのだ？」

ねつとりと、背筋を這い回るような甘い声。

甘くて甘くて酔いそうになるけれど、油断してはいけない。

返答次第でその声は、甘くて怖い毒へと変貌するのが常なのだから。

「け、今朝知ったばかり。本当は今日の放課後にでも話すつもり
だったんだけどさ・・・」

正直に話すと、鉦真子はふうむ、と唸って、俺の言葉に偽りがない
ことを理解したのだろう。

「ちょっと遅いのが気になるのだ・・・でもまあ、ユータはそれが

いつものことなのだ」

そう言って笑いかける鈺真子は、本当にもう、なんて評したらいいのか判らないほどに、あまりにあまりに愛らしい。

惚れた男の鼻眉目もあるのだろうか、それにしたって鈺真子の可愛らしさは異常だろう。

愛らしい笑顔をそのままに、鈺真子は漸く今日のテーマを発表する。

「それでは、今日の議題を発表するのだ――」

学園まろんズ 第一回

「学校の噂」

「――セフィロト
“樹紋”？」

発表された議題を聞いた俺は、その耳慣れぬ響きに首を傾げる。

「そう、“樹紋”なのだ。」

何故か誇らしげに、胸を張って答える我が愛しの部長どの。

ちょっと会話に齟齬そごがあるようなような。

「・・・あのさ、鈺真子。俺、単なるおまじないまじないとしか聞いてない

んだけど」

「うん、おまじないで間違いないのだ。ただ、女の子たちの間では、そのおまじないを“樹紋”なんていう名前と呼んでいる、と鈷真子は聞いたのだ」

そう言いながら、鈷真子は生徒手帳を制服のポケットから取り出して、その中から一枚の紙を取り出した。

「・・・で、これがおまじないに使われている“樹紋”の現物」

丁寧に折り畳んだ紙をはらりと開くと、中から奇妙な図形が現れる。

「・・・なんだこりゃ？丸と・・・直線で構成された、何処かで見たとような・・・」

その紙に描かれた図形は、なんと表現したらいいのか・・・見たこととはある、多分。

丸が十個と、それを近い丸同士で繋ぎ合うみたいに、直線が複雑に伸びている。

全体に縦長で、結晶のような、そうでなければ樹木のような、奇妙な形。

首を傾げる俺の横で、鈷真子が楽しそうな顔でその紙を指でなぞる。

「ふん、文字通りセフィロトの樹をモチーフにした図形みたいなのだ。セフィラが十個と小径が二十二・・・ダアトが見当たらないみたいなのだ」

「・・・すまん鈷真子。俺にも判る言葉で言って欲しい」

我らが誉れの部長どのに対して俺はあまりに浅学だった。

ぶっちゃけ、この質問も毎度のことではあるのだけれど。

答える鈷真子もいつものように、淀みない仕草で説明してくれる。

「えーっと、この図形にはなにも書いてないのだが、この図形の元になったのは恐らく、カバラで言うところの生命の樹・・・元はエデンの園に生えていた樹を図形にしたもの、だと思うのだ。」

「・・・そもそもカバラってなんだ？」

「平たく言って神秘主義。詳しい説明は省くのだ」

「・・・OK」

どのみち、俺が聞いても理解できないと判断したのだろう。

そういう場合の判断は、鈷真子の場合、実に的確すぎるほどに的確なので、少し寂しくはあるけれど間違いではないのだろう。

「まあ、セフィロトの樹というのは、簡単に言って、天地創造の基礎ずえとなった十の力、それを図式化したようなものなのだ」

「・・・ってことは、やっぱりまた魔法絡みか」

「まあ、おまじないという辺りで、推測して然るべき事柄ではある

のだ」

無然とした俺の言葉に、人を小馬鹿にしたような声音で、鉦真子が応える。

「説明を続けると、・・・えーと、この図形、丸が大まかに三列あるのが判ると思うのだ」

「ああ、うん。左と真ん中、それと右・・・だよな」

鉦真子が頷く。

紙に描かれた図形には、左側に丸が三つ、真ん中に丸が四つ、右側に丸が三つと並んで表記されている。

真ん中は四つもあるから当然と言うべきか、両側の三つよりも頭と足が飛び出ている。

「この図形の一番上・・・真ん中のコレ。これが、第一のセフィラ、^{ケテル}王冠。右の一番上のこれが、第二のセフィラ、^{コクマー}知恵。左の一番上のこれが、第三のセフィラ、^{ビナー}理解。右の真ん中のこれが、第四のセフィラ、^{ケセド}慈悲。左の真ん中のこれが、第五のセフィラ、^{ゲブラー}峻厳。真ん中の上から二番目のこれが、第六のセフィラ、^{ティファレト}美。右の一番下のこれが、第七のセフィラ、^{ネツアク}勝利。左の一番下のこれが、第八のセフィラ、^{ホド}栄光。真ん中の下から二番目のこれが、第九のセフィラ、^{イエソド}基礎。・・・で、一番下のこれが、第十のセフィラ、^{マルクト}王国なのだ。」

言いながら、紙に描かれた図形の丸の部分に、数字とアルファベットの次々と走らせていく。

先の細いペンで書かれたそれは、酷く流暢で、まるで日本人が書いたものとは思えない。

「まあ、この図にはないのだけれど・・・図によっては、第十一のセフィラ、知識^{ダクト}が表記されることもあるのだ。」

そう言って、鈆真子は第三、第四のセフィラの間、中央の部分に、もうひとつ丸を書き加える。

此処までの説明で、俺は既にチンプンカンプンだったりする。

「で、あとはこの線の部分——まあ、二十二の小径^{パス}。これら全てで、セフィロトの樹と呼ばれる図形なのだ」

そう言いつつ、丸同士を結ぶ線にも、ひよいひよいと数字を入れていく鈆真子さん。

やべえ、知識量が半端ねえ。

「まあ、詳しくはもっと複雑で、セフィラひとつ、小径ひとつにも意味があるのだ。ユータはもう、今だけでチンプンカンプンな顔してるから、これ以上は省略するのだけれど」

「・・・さんきゅ、鈆真子。ぶっちゃけ頭痛いわ、俺」

「それは鈆真子が蹴りつけた所為なのだ」

何故か胸を張ってそう言われて、俺は今更ながらに顔を顰める。

とはいえ、実のところ、鈆真子に蹴られるのは嫌なことばかりでは

なかったりするのだ。

なにしろ彼女はいつ、何処で、誰を蹴りつける場合でも、自分の格好を気にしない。

そして、休日も含め、ほとんど制服を着ていることが多い麻七菜鉦真子という少女は、セーラー服を翻しながらキックを放つ。

スカートは当然、校則からそんなに長いワケもなく。

蹴られる瞬間、大抵脚の付け根（平たく言って下着）が丸見えになったりする。

「・・・・・・・・。」

眼福。

「どうしてか、ユータがとてもいやらしい顔をしているのだ……。もしかしてユータ、マゾっ気があったりなかったりするのかも……？」

「ねえよ。ざけんな」

要らぬ誤解を招きそうになってしまったので、俺はこんな学生らしくないふしだらな想像を必死に追い払う。

第一、好きな人の目の前で、その人をダシにしたいやらしい妄想など、男ならすべきではない。

「……まあ、とにかくそのせふいろとの樹とかいうやつのは、

まあ概ね理解した・・・つもり。要は、今はやり流行のおまじないには、もと原典があるってことだろう？」

「あんまりにも単純かつ短絡的な思考ではあるけれど、その通りなのだ」

なんというか、鈷真子さんの評価はすごく厳しかったのだけれど、うん、いいよね。

面罵されるよかマシだ。

「・・・で、やっぱり調べるの？」

「当然なのだ。まろん倶楽部は、そういう不思議を解明するために発足した部活なのだ」

やはり胸を張ってそう言い切る鈷真子の姿は、ひいきめ鼻屑目に見てもやっぱり、堪らなく愛らしく、そして格好よかった。

・・・でも、不思議、ねえ。

毎度思うことだが、よくもまあ、そんな珍妙な部活動が成立するものだと、そう思う。

まあ、鈷真子と付き合いだしてから、俺は自分の住むこの街、かみつち紙津町がどれほど珍妙奇妙にして怪奇なる事件が多発する街なのか、それをよく知ってしまったているのだけだ。

鈷真子と出会ってからの一年、そう。

たったの一年で、霧の怪物、勝手に動き回る人形、迷いの森、溺れ池、そして壁に刻まれた詩を読んだ人が昏睡するという、様々な怪奇に出会ってきた。

もしかしたら、今までは気付かなかっただけで、もっと多くの怪奇がこの街にはあったのかもしれないのである。

今まで見てきた怪異はどれも恐ろしく、・・・下手をすれば、死んでいたかもしれないような怪奇ばかり、だった。

知っていて近付いた俺たちでも危ないのに、知らずにそれに近付いていたらと思うと・・・

「・・・怖いよな、怪奇って」

ぽつりとこぼした本音に、鈷真子がにっこりと優しげに微笑んで、俺の手を取る。

「ユータは偉いのだ。不思議を受け止めて、それが日常になってきても、それを怖いと感じられるのは偉いことなのだ。」

「・・・日常ってほどじゃねえし。・・・自分から進んで関わってる分、そりゃ普通の人よか遭遇頻度は高いけどさ」

どんなに関わろうが、怖いものは怖いだろう。

特に、・・・詩を読んで、鈷真子が倒れてしまったときには、本当に心臓が止まるかと思うほどに、怖くて怖くて仕様がなかった。

あのときも、鈷真子がメモを残しておいてくれなかったら、結局俺

にはどうしようもなかったワケだし。

それを考えると、本当にぞっとする。

この街では日常の中に、他の街よりも純度の高い危険が偏在しているなんて。

しかも、誰もがそれを意識せず、ただただ行き遭うまでは知りもしないままだなんて。

鈷真子に会ってから、俺はそういう恐ろしいことを、幾つも教わった。

・・・鈷真子がどうして、そんなにも偏在する不思議に関心を持っているのかは判らない。
けれど、多分。

俺の推測でしかないのだけれど、鈷真子はきつと、誰かのために、危険を少しでも取り除く努力をしているのではないだろうか。

「・・・よし、それじゃあいっちょ、不思議探索に乗り出しますか」

「お、今日のユータはノリがいいのだ。いつもこうだと、鈷真子はどうしても嬉しいのだ」

可愛らしく笑いながらそう言って、鈷真子が俺の腕に飛びついてくる。

きゅっと、腕に抱きつく鈷真子ちゃん。

初めてではないけれど、うん、あれですね。コーフンしますね？

「物分りのいいユータにごほうびなのだ。なにか有力な情報を掴んできたなら、もっとすごいコトをしてあげるのだ」

今の俺の気分はあれだね、目の前にニンジンぶら下げられた馬。

ジェット燃料で飛び立つね！ってぐらいの気分だね。

「・・・任せろよ、鈷真子。本気^{マジ}になった俺にかかれば、この程度。児童にも等しいぜ？」

「わあ、ユータ・・・また鼻血が出てるのだ・・・いやらしいのだ・・・」

「・・・」（鼻血を拭いながら）とにかく待ってるよ。それだけ手がかり足がかりが多いなら、俺にとっては十二分。詳細を持ち帰るから、一人で無理せず突っ走らずに、おとなしくしてろ、鈷真子」

鼻血を拭いながらの言葉は、いまいち頼りなかったような気がする。

けれど鈷真子は、本当に嬉しそうに笑って。

「うん、ユータに任せておけば安心なのだ。・・・頑張ってるね、ユータ」

鈷真子の声援に送られて、俺は部室を後にする。

幸い、そろそろ五時間目の授業が終わる時間で、もう数分も待っていれば行動は可能だ。

まず最初に行くべきは、やはり下級生の教室だろう。

「・・・授業終わるまで待ちますか」

とりあえず。授業をサボった我が身としては、あまり人には見られたくないのです。

部室の横に座り込んで、廊下の窓の外を眺め遣る。

窓の外には青々と繁る緑の葉っぱ。

命よ燃えよと言わんばかりの、虫たちの大合唱。

・・・夏である。

俺は比較的気温の変化に鈍い性質タチのようで、夏の気温の中でもほとんど変わりなく過ごせるのだけれど、なんというか。

季節の移り変わりを五感で感じられないというのは、存外寂しいものである。

や、まあ、気温が高くなった、低くなったっていうのは判るのだけれど、寒くなったとか暑くなったというのがイマイチ判らないというか。

我が敬愛すべき部長どの、麻七菜鉆真子も俺と似たような性質らし

く、二人でいる分にはそういう部分に違和感を覚えたりもしないのだけれど。

——そんな風に遊んだままの耳に届く、チャイムの音。

授業終了の合図を耳にすると同時に、俺は立ち上がって、下級生の教室めがけて猫まっしぐら。

下級生の女の子にお話聞けどー。

張り切って張り切って張り切って、階段を三段ぐらい飛ばしに上っていく。

・・・ちなみに我が愛すべき学び舎、私立聖マリア学院は三階建てで、一階が三年教室と職員室、二階が二年教室と文化系部室等、三階が一年教室と特別教室等。

体育館は別館です。

初等部中等部と共有だったりするのです。

プール有り、礼拝堂有りの豪華絢爛アメフラシ。

下級生の教室行くには階段を駆け上がってトップを狙わないときついで、上級生はあんまり立ち寄りたくありません。

・・・で、下級生の教室を目指すべく、現在二年生の俺は階段を上っていく、と。

とりあえず虱潰ししらみに色々な人を当たるしかないだろうが・・・。

階段を上がると、もう既に授業を終えたのか、廊下にはちらほらと下級生の姿が見える。

で、その中の手近な一人を捕まえて、早速尋問開始。

「あー、キミキミイ、ちょーっと悪いんだけどさ、最近流行のおまじないについて教えてくれないか？」

できるだけ爽やかに、下級生を怯えさせないようにそう訊ねる。

下級生の女の子、どうしてなのだか泣きそうだった。

「・・・・・・・・き、」

「叫ぶな。叫んだらノド咽喉潰す」

いきなり叫ばれそうだったので、とくいのきょうかつでネゴシエーション。

女の子は蒼白になって、こくこくと頷いた。

・・・なんでか知らないけど、俺って後輩からかなり怖れられてるんだよなあ。

女の子は多分もう逆らわないので、最初の質問をもう一度繰り返すことにする。

「というワケで、できれば最近流行のおまじないについて、教えて欲しいんだけど」

女の子は小動物のように震えながら、涙交じりのか細い声で、ぼそぼそと言葉を紡ぐ。

「・・・あつ、・・・・・・・・あのつ、・・・わ、わたつ、わたしつ、・・・その・・・」

「うん、ドウシタンダイ？」

「・・・そ、その・・・そ、そういうのっ・・・くわ、詳しくないん・・・っ」

「そっかー。そりゃ仕方ないな。・・・じゃあさ、誰か詳しい子、知んない？」

「あ・・・え・・・っ、Fクラスの・・・さ、さきがみ・・・さきがみさんっ・・・」

ガクガクと震えながら其処まで言い切って、女の子は、その場にぺたんと尻餅を突いてしまった。

・・・ちよつとショックだったのは内緒だ。

「・・・・・・・・。うん、ありがとう。助かったわ、さんきゅ」

「は、は・・・はいっ・・・！」

今度は本当にぼろぼろと泣き出して、女の子はその場でガクガクと震えている。

どうして其処まで怯えるのか、ちつとぐらいは理由が気になって仕様がなくなってきた。

「・・・なあ、君。どうしてそんなに怯えてるんだ？俺、君を取って食うつもりはないんだけど」

できるだけ柔らかく聞いたつもりだったが、それでも女の子はヒツと息を呑んでただ一言、

「う・・・っ、噂っ・・・！」

とだけ。

「――噂、ね」

確かに色々噂はあるんだけど、そんなに怯えられるようなやつってあったっけ・・・？

・・・今度調べようと思った。

今度こそ女の子に礼を言ってその場を去り、今度はFクラスとやらにお邪魔することにする。

俺が歩く先の人々が、蜘蛛の子を散らすように逃げていく理由はとりあえず後回しで。

Fクラスのサキガミさん・・・っと。

Fクラスは階段から奥の方にあるので、結構離れている。

Fクラスの扉の前に立って、中の様子を窺ってみれば、少なくとも授業は既に終わっていた様子。

なので、とりあえず躊躇しないでオープンザゲート。

がらりと扉を開けた瞬間、教室中の音が、まるで波が引いていくような勢いで鎮まっていく。

かなり居心地が悪かったけれど、これも敬愛する部長どののためだ。

「・・・えと、Fクラスのサキガミさんって——いる？」

恐る恐る訊ねた俺の声に、窓際で固まっていた女性グループの中の一人が振り向いた。

「わたし、ですけど」

そんな、普通ならごく当然の自然な態度に、その場にいた誰もが驚愕の眼差しを、我知らずその小柄な少女に向ける。

小柄な少女は何事もなかったかのように、グループの仲間に会釈すると、俺の方に小走りにやってきた。

「はい、わたしがサキガミですけど。」

「・・・あ、ああ、うん、君がサキガミさん」

「はい、そうです。このクラス、わたししかサキガミさんはいません」

ぽーっとした口調でそう答えるサキガミさん。

なんていうか・・・あれだけ怯えられた後だと、物凄く気分がよかった。

普通の会話してるよ俺。

「・・・うん、それじゃあちょっと、君に聞きたいことがあるんだけどさ。少し、いいかな？」

「あ、はい、構いませんが・・・授業には間に合いますよね？」

「そりゃあもう。俺だって授業に出ねえとトンデモナイことになっちまう身なので」

連続二時間サボりは流石に御免だった。

ていうか鈷真子、マジで恨む。つーか怨む。

とりあえず鈷真子への恨みつらみも後回し、今はとにかく時間がないので、ちゃっちゃと用件を話してしまおう。

「というワケでれっつらごー。何処か話すのにいい場所はありませんかマドモアゼル」

「えと、それって内緒話ですか？」

「内緒話ではないけれど、正直如何わしいお話」

おまじない教えてっ、なんて上級生でかつ男の子の俺が言おうもの

なら、間違いなく引かれる。心の距離が大変なことになる。

そういう意味を踏まえての発言だったのだが――

「……い……かがわしい、お話？」

目の前のぼーっとした女の子は、かなり露骨に眉を顰めて俺を見返す。

「……あの、それってもしかして……いやらしいお話ですか？」

「断じてNO」

「いやらしい話向きという意味では、保健室とか体育用具室とかがありますけど……」

「話聞いて？ねえ」

「冗談ですので安心してください、先輩」

「OK、下級生のしかも可愛い女の子をブン殴りたくなっちゃったのは初めてだぜ」

俺のぼろりとこぼした本音に、教室中がまたざわめく。

けれど、目の前の女の子は、まるで何事もなかったかのように顎に人差し指を当てて、なにか思案している風な様子である。

「……ああ、あそこはどうでしょう。隣の視聴覚室」

普段はほとんど使わないので密談にはぴったりです、とか言いながら、早くも移動を開始している小柄な少女。

・・・参った、完璧あの子のペースじゃねえか。

まあでも、移動や尋問に費やした時間を思えば、早ければ早いほどいいというのも間違いのない、厳然たる事実であるのも確かである。

啞然とする教室勢に軽く会釈して、俺は小柄な女の子を追いかける形で教室を後にする。

どの学年もFクラスが最後のクラスというのは知っていたが、実のところ俺は今までFクラスに用事など一度もなく、そしてまた視聴覚室を利用したこともなかったため、この場所に足を運ぶのは全くの初めてなワケなのだが。

「・・・汚え部屋、だな・・・掃除してねえだろ、これ」

入ってみればアラ不思議、曲がりなりにも特別教室の括りで呼ばれる部屋とも思えないほどに、この部屋の中は荒れていた。

足を踏み入れる生徒は当然の如く皆無に等しいのだろう、先に入った女の子の小さな足跡と、今入ったばかりも入ったばかりの、俺の大きめの足跡の他、地面に新しい靴跡は一切見当たらなかった。

素晴らしいことに、うってつけすぎるほどに、この部屋は密談にうってつけである。

汚すぎていやらしいことにも使えないし、もちろん曲がりなりにも

ミッション系のスクールであるこの学校に、不良やヤンキーといった類の生徒もほばいない。

少なくとも、物陰に隠れてコソコソケソケソとタバコやシンナーをカッ喰らうような判りやすい連中を、俺は見たことがない。

もちろん鎖遣いとか剃刀遣いも見たことねえし。
チェーン カミソリ

そんなワケで、学校という閉鎖空間には珍しいほどに、誰の侵犯も受けないクリーンな（汚れという意味ではかなりヤバイ）領域が形成されていた。

「・・・それで、わたしに聞きたいことってなんですか、先輩？」

蜘蛛の巣に引っかからないように、おっかなびっくり足を運ぶ俺に向けて、小柄な女の子がそう訊ねる。

「ああ、その・・・とりあえず、自己紹介しとく。君はもう判ってるみたいだけど、俺は一応二年の、奈雅座由有多」

「ご丁寧にも。わたしは一年の幸守さきかみみらのです」

みらのと呼んでください、とか言いながら、小柄な女の子は右手をスッと差し出した。

「・・・えっと、」

「握手ですよ、あくしゅ。人間関係は握手から。」

「・・・まだ友人になる予定はないんですけど」

「友人でないと握手もできないんですか・・・？先輩がそういうポリシーなら仕様がないうんですけど、そういうのって・・・」

呆氣に取られる俺に対して、少し困ったような顔をするみらのちゃん。

・・・握手は人間関係の基礎ですね、うん。

「よろしくみらのさん！色々レクチャー頼んでプリーズ！」

「あ、いえ、泣くほど嫌でしたら、別に無理に握手しろとは・・・」

嫌なんじゃあなくて、自分と幸守みらのさんとの器の違いを感じて切なくなっただけなのだが、それを言ったらますます切なくなりそうだったので、言わないことにする。

「いいんだ、時間も無い。とにかく本題に入ろう」

「そうですか？・・・では、聞きたいことというのは？」

くりんと小首を傾げるその姿は、なんというか小動物っぽくて、非常に愛玩意欲をそそられたりするのだが、この際それは全く関係ないことなので、おとなしく質問することにする俺。

「・・・最近、下級生——つまり一年生の女子の間で、妙な——そう。小さなちいさなおまじないが流行っているって聞いたんだけど」

「はい？・・・、ああ。“樹紋”のことですか」

なんということもなくそう呟くみらの。

ビンゴ、と言いたところだが、詳細を聞くまでは安心していいものやら。

「そう、その“樹紋”のこと。それについて、君が詳しく知ってるって、別の子から聞いてさ。放課後詳しく教えて欲しいんだけど、・・・時間、あるかな？」

慎重なつもりでそう切り出すと、みらのはほとんど考え込むこともなく、ほとんど反射的じゃないのかと疑いたくなるほどあっさりと、首を縦に振った。

「はい、わたしは構いませんけど。放課後、授業が終わってから、またこの視聴覚室でいいんですか、先輩？」

「あ、いや。放課後だったら・・・ウチの部室に来て欲しいんだけど。二階の――」

「まろん倶楽部、でしたよね？」

ぽやーとした表情で、俺の台詞をさりげなく横取りする幸守みらの。

中々どうして、やるものである。

「・・・ああ、まろん倶楽部。予想はしてたけど・・・やっぱ知ってるのかよ・・・」

はああ、という重いおもーい溜息を胸の底から吐き出すと、みらのちゃんがクスクスと実に全く少女らしい笑い声を立てた。

「それはもう。この学校で、まろん倶楽部を知らない生徒はまずいませんよ？なにしろ、有名ですから」

「・・・有名、ね。どうせ碌な噂じゃねえだろうな・・・」

正直なところ、本当に本当に、気が重くて滅入ってくるのはそういうワケで。

俺が知っている限りでも、事実を交えた噂は結構生徒の間では有名になっているのを確認している。

例えば。

曰く、学校で起きた小火騒ぎの犯人。

曰く、斧で体育館の壁をずたずたにブチ壊して、おまけにマネキンを校舎の屋上から投げ落とした。

曰く、敷地の溜め池の水を残らず掻き出した犯人。

曰く、校舎を含む、街のあちこちの落書きを三日がかりで清掃した変人。

どれもこれも、実のところかなり核心に近い噂話。

普通に考えて、最後のひとつ以外はかなり性質の悪い犯罪行為。

最後のひとつとて、わざわざ学校を無断で休んでまで、落書きの清掃をしたということで、あまりの奇行っぷりに正直評判は果てしく悪い。

まろん倶楽部のメンバーが、犯罪者、或いは奇人変人、という評価を受けていることは、生徒の間では既に公然の秘密のようなものになっているのである。

・・・とはいえ、あそこまで怯えられるような噂じゃないハズなんだけどなあ・・・。

ちよっぴり落ち込む俺をよそに、幸守みらのさんはなんだか少し楽しそうだった。

「碌な噂じゃないなんて、そんなことないですよ？どれも荒唐無稽で、根も葉もない噂ばかりですし。」

曇りのない笑顔でそんなことを言うぽやぽや娘さん。

だがしかしごめんなさい、実はその噂の数々、荒唐無稽だけれど根も葉もきっちり揃ってある噂なのでございます。

根と葉が茎を育て、花を咲かせて実を結んだ、文字通り行動の結果というヤツなのであります。

とはいえ、それを自分から喧伝して回るのはまさしく馬鹿のやることなので、一応は賢明であるつもり俺としては、ほのかな罪悪感を押し殺して沈黙を保つしかないのでした。

「・・・とりあえず、放課後、よろしく。君が話の判る子でよかつ

たよ、ホント」

心の底からの本音を、とりあえず協力してくれることへの感謝の念と共に口にする、

「無理矢理でしたら反抗しますけど、先輩はきっちり頼みに来てくれませんでしたからね。理由もなく目上の人の頼みを断るほど、わたし意地悪じゃありません。」

実にすっきりした口調と表情でそう言い切って、みらのさんはぽやっとした微笑を浮かべた。

・・・やべえ、俺としたことが、癒されてる！？

なんだか胸の内側が軽くなったような気がするね、実際。

みらのちゃんありがとう、俺の女神様は他にいるけれど、今日から君を天使ぐらいに格上げして記憶に留めておくことにするよ！

「・・・そういうワケで、それじゃ放課後、また。」

「はい。・・・あ、そういえば先輩、わたし今日掃除当番なので、もしかしたら少し遅れるかもしれないんですけど、」

「ああ、その程度なら全然おっけー。俺が部長どのに言うておくから、その辺は今日中であれば、君の都合に任せるよ」

その返答を聞いた、小柄で小柄なぽや娘さんは、軽く頭をぺこりと下げて、小走りに視聴覚室を出て行った。

これで、あとは放課後になってから、部室の方へ行っておけばいいワケだ。

なんとか五時間目の休み時間で話は着いたことだし、俺も自分の教室に戻って六時間目は真面目に勉強に励むとしよう。

鉛真子とはクラスが違うし（俺はAクラス、鉛真子はCクラス）、約束も放課後、邪魔される恐れはたぶんない。

そろそろ休み時間もヤバイ頃合いだし、俺も自分の教室にさっさと戻ろう。

で、五時間目のサボりが原因で、色々精神的に悪いことがいっぱいいっぱいデラいっぱいだったワケなのだが。

六時間目をなんとか邪魔されずに無事終えて、俺は部室へと向かっていた。

「教師の課す罰ってヤツでバケツを持たされるの、いっぺんやってみたいねえ、うん。ああいうベタなのは大好きだぜ・・・っと」

誰が聞こうが不審としか思わないような独り言を洩らしつつ、俺は部室の前へと辿り着く。

いきなり扉を開けたら中で鉛真子が着替えていて、きゃーえっちなーいい、とかいうイベントがあったりしたら、それもそれでベタベタなのがステキなエンカウントなんだが。

生憎今の今までそんな現象には出会ったこともないし、たぶんこれから先ずっと出会うことなど有り得ないのだろうが、健全な男子として、そういうイベントを夢想するぐらいは許されるだろう。

そんな愚にもつかないことを考えながら扉を開く。

「おいーす、鈷真子ちゃん。情報提供者呼んどいたから、もう少し時間欲しい・・・」

俺の言葉は途中で尻すばみになって消えてしまう。

・・・突然だが我が部室には、パイプ椅子が四脚に、会議用の長いテーブルが二台、そして鈷真子が無処から調達してきた、重厚にして高級感溢れ、積み上げ重ねてきた歴史の洩みが魂の底まで灼熱^{ヒート}させ鼓動^{ビート}させてくれるような、とってもステキなマホガニー製のデスクが一台、そして重厚なデスクに全く釣り合わない安物の回転椅子が一脚、ある。

デスクは窓際、しかも何故か窓の方向を向くような形で設置していて（超まぶしいよ！）、その上には最新鋭のパソコンが一台鎮座しているワケなのです。

何処から調達したのかは、やっぱり知らない俺なのでした。

学校のLANに接続しているから、インターネットもやり放題。

設定次第では、エロサイトにもアクセスできる^{エル・ドラド}黄金郷なのである！

・・・まあ、エロサイトに接続しているのは俺ではなく、専ら鈷真

子の仕業なのであるのが悲しいといえば悲しいのだが。

で、何故そんなことを急にぺちゃくちゃ言い訳がましく解説し始めたのかというと。

我らが愛しの鈷真子ちゃんは、パソコンの前に回転椅子を寄せて、その上に何故か胡坐をかいて座り込みながら、なにかしらのゲームに夢中になっている御様子だったのである。

「・・・またナニしてんだよ、鈷真子」

「ん？ ああ、ユータか。遅かったにゃ、ちよつとそこで待っていて欲しいのだ。もうすぐ終わるから」

そう言いながら、鈷真子は部のパソコンの回転椅子に胡坐をかいて座り込み、どうやらアクションゲームのようなものを必死にやり込んでいる。

片耳にはイヤフォン、視線は画面に釘付けのままなので、ちよつと寂しい。

「・・・別にいいけどさ。部のパソコン、あんまり調子に乗って弄くると、後で先公にナニ言われるか判んないぜ」

「うん、それはそうなのだ。けれど仕様が無いのだ。これも鈷真子の趣味なのだ。趣味を邪魔するモノはすべからく地獄に落ちるべし、なのだ」

そう言いつつも、やはり視線は画面から離さない。

手元のコントローラーがカチャカチャと忙しく動いてはいるのだが、どうも見ている限り、鈷真子はゲームとか、やっぱり下手である。

無駄な動きがかなり多く、画面上のドットで描かれたキャラに向かって、似たような姿の敵がどんどん押し寄せているのが見える。

「んで、今回はどんなのやってんの？」

「ん？ 鈷真子のもっとも欲しかった同人のゲームなのだ。『怪奇！十二宮の黄金聖闘士大決戦』というタイトルなのだが」

言われて画面をよく見てみる。

「・・・やべえ、黄金伝説の丸パクリかよ・・・」

某迷作ゲームの筆頭であるあのゲームのパクリらしく、画面の中では少年達が所狭しと暴れまわっている。

かなりアレだった。

「・・・なあ、ところでこれ・・・」

一つ気になる。敵キャラはどう見ても一種類で、このアリみたいにわらわらと湧き出る金ピカは・・・

「うん、そうなのだ。このゲームの主役はなんと、あのデス様なのだ。今はラストステージでや、このステージをクリアすれば、念願のデス様とアフロ様の絡みが見れるのだ」

鉛真子が酷いヤツだというのは判りきった事実なので、あくまで思うだけに留めておく俺も俺なのだが。

「う、うう・・・酷いのだ・・・ヒドいのだユータ・・・。鉛真子はとっても悲しい気持ちになってしまったのだ・・・夢と希望を奪われてしまったのだ・・・。」

「いきなり電源ブチ抜いたのは悪かったけれど、それならせめてもう少しマトモなのやろうよ！ね！？せめて男女のお付き合ラブゲームい！頼むから！！！」

「うるさいのだ！どうせユータにはBLの素晴らしさが理解できないのだ！！！」

「理解なんぞしたくねえから丁度いいんだよ！」

「ウホッ、いい男！とか言っときめかないのは人類として欠陥だと確信するのだ！」

「それにときめく鉛真子さんのが異常なんですそうなんです！！！」

鉛真子さん、お願いだからもうちょっと恥じらって。

女の子は恥じらってくれた方が、恋する男としては嬉しいのです。

恥じらうどころかBLなんて、はっきり言って最悪の部類に入るじゃねえかコンチクショ！。

「・・・ッ！ユータのばっかっ！ばかばっかっ！ばかばかばかばかばかばかーっ！！！」

怒りが心頭に達してしまったらしい鉦真子さん、いつもの如く冴えまくる体術で攻撃開始。

ただの男子学生たる俺としては、逃げの一手でファイナルアンサー。というワケで逃げ出そうとした俺の腕を鉦真子さんは強引に掴み、くるりと、

「キャー！いきなりチキンウィングアームロックでおまえうわいたたたいていたあああああぎぎいいいいいいおとおおおとおお」

みちみちと腕が大変な音を立てちゃってます鉦真子さん！

人体そんなに柔^{ヤワ}っこくないです、折れちゃうから！折れちゃうからッ！！

腕の筋肉と靱帯が切れていく音を聞きながら、俺の口角からは自動的に泡がブクブクとナイスシャボンし始めたそのとき、

「・・・あの、仲がよろしいんですね、先輩」

救いの天使が、いつの間にやら扉の前に立っていた。

「・・・ッ！た、助けて助けてッ！！腕がこわれちゃううううううううう」

「・・・お？何処の誰だか知らないが、いいところに来たのだ！ちよっと聞いて欲しいのだホントに！この男はとってもとってもヒド

「いのだ!!」

そう言いつつ腕をギリギリ捻り上げる鈦真子さん。やべえプロだよこの女。

「この男、鈦真子のもっとも大切なものを奪い取って踏み躪って蹂躪して陵辱しておきながら、平然とした顔で鈦真子をキチガイ扱いするのだ! ヒドいのだっ!!」

「きゃー! 大切なものって夢や希望じゃねえかその発言だと色んなところで誤解が発生あが、あががががあああああ」

情けない悲鳴を上げる俺と、その腕を捻り上げる部長どのを交互に見て、みらのさんが困ったような顔で発言する。

「あの・・・もしかして先輩、いやらしいことを・・・?」

「いやらしい!! いやらしいのだ! 男女のお付き合いとか言ったのだユータはッ!!」

「きゃー! そりゃあBLとかアブノーマルよか普通の方に傾いてくられて意味うううわわわぎゃぎゃぎゃぎゃ」

やべえ、誤解が深みに嵌りそう。

もしかして俺、この場で断罪決定ですか?

涙がぼろぼろ溢れて、今までの人生が走馬灯のように流れては消え、流れては消え行く中、俺の意識がとうとうするっと現実から抜け出そうとして――

「・・・っと、そういえば其処の可愛いこちゃん。ホントに誰なの
だ？」

——抜け出す直前、地獄の鈦真子さん固めから解放されたのであ
ります。

きよとんとした顔で、鈦真子は幸守みらのさんを見つめている。

その様子だと、俺が部屋に入ったときの言葉は全く耳に入っていな
かったと見える。

息も絶え絶えの俺は、それでもなんとか自分の義務を果たすべく、
声を必死に絞り出す。

「・・・だ、だからさっき言ったら、情報提供者を呼んだって・・・

「・・・？なんのことなのだ？」

「てめえがBLなんぞやってて聞いてなかったんじゃないかねえかよ・・・

泣きたくなった俺。きっと間違っただけだね？

そうしてさめざめと俺が泣いている中、みらのさんは自分で対処し
なくてとは決意したらしく、鈦真子よりもずっとずっと遙かに遠
くふくよかで理想的な自分の胸に手を当てて、ぽやっとした声で名
乗りを上げる。

「あの、わたし、先輩に——奈雅座先輩に頼まれて、“樹紋”のことを教えに来た、一年の幸守みらのです」

それを聞いた憎むべき我が仇敵、麻七菜鈷真子さんは可愛らしくにゅふふ、と笑った。

・・・ああもう、マジで可愛いなあ、腕をヘシ折られかけたことなんて忘れちゃうぐらい可愛いなあ。

「そうだったのか。それは見苦しいところを見せたのだ、かわいいちゃん。鈷真子のまろん倶楽部によろこそなのだ」

そう言いながら、鈷真子さんは何故かどうしてか、扉の前に立っているみらのちゃんへと音もなく近寄っていく。

・・・やべえ、なんか嫌な予感が。

「・・・えっへへー！みらのちゃんはかわいいのだ！かわいくてぐらまーなのだ！思わず搾乳したくなっちゃうえっちなおっぱいなのだー！！」

普通の人が聞いたら絶叫しながら逃げ去りそうな台詞を吐きつつ、みらのさんへ抱きつきながらおっぱいものにゅん。鈷真子さんすげえ。

無茶苦茶エッチだった。

「・・・あ、ユータがまた鼻血たらしてるのだ。いやらしいのだー」

大慌てでゴシゴシ拭う。

極められていた腕が大激痛で絶叫がノドの奥でドリームダンスを踊っているのだけれど、これ以上みつともない姿を後輩に見せるのは流石にアレなので、気合と根性で悲鳴の類は呑み込んでおく。

で、そんなことより幸守みらのさん。

みらのさんは、当然にして当然のことだが・・・固まっていた。

それもただの硬直とはワケが違う、あのぼやんとした表情のまま、しかしぼやんとした雰囲気など微塵もなく、なんかスゴい具合に固まっている。

・・・あー、そりゃあそうだよなあ、女の子同士だからっていきなり胸タッチ、ていうか胸グランプはまずいよなあ。

もしかしたら、女の子同士だというのがかえって厳しかったのかもしれない。

あまりの惨状に嘆く俺のしている前で、急速に精神の均衡を図っているのがよく判るのが、なんというか悲惨というか悲劇というか。

とりあえず、俺の予想よりも相当早く精神の安定を取り戻したのか、漸くみらのさんは無言のまま、鉦真子をぎゅーっと押し退ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの、先輩。わたし、そっちの趣味は、ちょっと」

心なしか顔を青褪めさせてそんなことを言うみらのちゃん。マジ可^か哀相^{あいそ}。

それに対して鈷真子ちゃん、俺の予想ではかなりやべえこと口にするんじゃないかねえだろな、

「あっはっは！鈷真子は女の子でも可愛ければ全然おっけーなのだ！その点みらのちゃんは可愛いので、もう食べちゃいたいぐらいなのだ！」

・・・とか思っている隙にやっぱりとんでもねえこと口走りやがりましたよ部長さん。

一層に青褪めるみらのちゃん。

やべえ、すっげえ罪悪感を感じるのはどうしてだろー？

・・・判ってますよ？俺の所為ですわねそうですね。現実逃避も大概にしましょう俺。

しかしながら自虐ばかりしていても、もっと悲惨なことになるのは目に見えていたので、俺は敢えて全然まったく今の状況に不釣合いな、のーてんきなことを考えることにする。

・・・うーん、鈷真子が可愛いとベタ褒めするあたり、確かにみらののは可愛いよね。

髪は栗色さらさらで、肩口ぐらいの髪の毛を後ろでキュートなゴムを用いて一本にまとめてる辺り、素朴な可愛らしさがばっちりグッドでキューティーラヴ。

顔自体の造りもばやばやばやーんで、なんというか癒される。ヒーリング。

身長は俺と鈺真子の間ぐらい、まあつまりは平均的な女子生徒の大きさよりもやや小柄な程度、マーヴェラス。

胸の方は鈺真子が言ってる通り、細身の体と童顔に釣り合わないほどにグラマラス。

オー。日本人男子学生が誰しも憧れるんじゃないかと思うようなステキ女性が其処にいる。

現実逃避はそろそろ終了、つまり俺の役割は土下座リアン。コレ、まろん倶楽部の真実。

というワケで、ちょっと風変わりな部長さんに代わって俺が土下座するのでね、コレが。

「ごめんなさいっ!! マジごめんなさいっ!! 鈺真子さんは悪い子じゃないんです、ちょっと脳が腐乱してるだけなんですっ!! 責任は俺が引っ被りますんで、どーか麻七菜鈺真子さんだけは!!」

土下座して謝る。

鈺真子は当然きよんとしてたし、みらのはなんだか呆然としてるし。

そういう反応されると、俺ひとりが道化みたいなンスけどっ!!

「な、奈雅座せんぱいっ! 先輩が其処までする必要はないんです、頭を上げてください!」

「いいえみらのさま、どうかこの身を犬とお呼びください！ 鈷真子さんの代わりに謝るのが俺の役目なんです！ っだって！ チクショー報われねえ！！」

泣き叫ぶ俺に、やさしいみらのさんは駆け寄ってきて、頭をなでなでしてくれた。

気持ちE！

「あ、あの、ビックリしましたが、わたし大丈夫ですからっ！ ですから頭を上げてください奈雅座先輩！」

「う、うう・・・ならばせめて奈雅座、いや由有多と呼び捨てに。パシリだってやります」

「わあ。ユータが久しぶりに犬モードになってるのだ。珍しいのだ」

「麻七菜先輩の所為じゃないですかっ！」

ぽやんとした彼女とは思えないような鋭さで、我が愛しの鈷真子さんを叱り付けるみらのさん。

やべえ、叱られるのは俺の役目だってのに。

「みらのさん、みらのさん！ 叱るならこの屑めを叱ってください、死ねと言われりゃ死にます」

「・・・ッ！ ま、まななせんぱいっ！ 奈雅座先輩をどうにかしてくださいっ！！」

「んー・・・ユータはしょうがないのだ、手のかかる部員なのだ・・・」

やれやれという風に鈦真子さんは俺の傍に寄ってきて、這い蹲る俺の横に跪き、俺の顎の下に軽く手を添えて、

ゴキ　　リ

・・・で、眼が覚めればいつの間にやら茜空。

夕焼け小焼けで帰りましょうという時間帯になっていたというのはコレ如何に。

「・・・なんか首痛え」

呟きながら身を起こすと、やっぱりテーブルに載せられていた。

「あ、起きたのだ。ユータ、おはろー」

「んんん・・・おはろー、鈦真子」

寝ぼけ眼で鈦真子に挨拶を返すと、ガタリと椅子を鳴らして、もう一人の誰かが俺の前に駆け寄ってくる。

「な、奈雅座せんぱいっ！だ、大丈夫ですか!？」

「え、あ。・・・幸守、みらのさん？」

どうして彼女がいるのだらう、とか考えるのよりも、どっちかというと彼女が酷く安心した風である理由の方が気になって仕様がな
今日この頃。

「よかった・・・奈雅座先輩元に戻ってる・・・」

「だから言ったのだ。ユータは肉体的にも精神的にも頑丈だから、
ちよっと眠ればこの通りなのだ」

何故か偉そうに鈦真子がそう言っているところを見ると、俺が眠っ
ていたのは鈦真子になにかされた所為らしいが・・・なにかあった
っけ？

「・・・なあ、俺、さっぱり覚えてないんだけど」

「ああ、いいのだ思い出さなくて。ユータの所為で遅くなったから、
さっさと“樹紋”の説明聞いて帰るのだ」

簡潔すぎて寂しいほどの説明だったけれど、とりあえず状況は把握
した俺。

そっか、俺が眠ってた御蔭で待たせてしまったのか、そりゃマズい。

「うん。悪い悪い。俺が迷惑かけちゃったみたいで、悪いねみらの
さん。」

「い、いえっ、全然全く構いませんよ？・・・で、ですから自分を

そんなに責めないでください・・・！」

何故か微妙に怯えながらそう言うみらのさん。何故だ。

「はあ、ありがとう。・・・それじゃよろしくお願いできるかな？」

「は、はい。任せてください、奈雅座先輩」

自分の怯えと迷いを吹っ切るように、軽く咳払いするみらのさん。
だからどうして怯える。

「えーっと、最近一年生の女子の間で流行っているおまじない、“樹紋” っていうのは知ってるんですね、先輩方」

「うん、知ってるのだ。鈷真子もユータもきっちり名前ぐらいは調べてきたのだ」

ごめん鈷真子、俺“樹紋” の名前は調べてこなかった。

「その“樹紋” なんですけど、・・・実はわたしも、そんなに深く知っているわけじゃあないんです、残念ながら」

「あれ、そうだったのか？俺はてっきり・・・」

言いかけて、その言葉を途中で切る俺。

そりゃ言えませんが、言えませんが。黒幕だと思ってたとか、そういう話。

「・・・・・・。誰かから伝わって、一年の女の子に浸透したおまじ

ないらしいんです、“樹紋”は。わたしはその伝わってきたおまじないについて、学年では一番よく理解しているというか・・・」

言い難そうに言うみらのさん。なんだか視線が痛いのは気の所為でしょうか。

「ふうん、なるほど判ったのだ。・・・で、問題は実際のところ、その“樹紋”がどういう遣われ方をしているのか、ということなのだ」

不意に真面目な声を上げる鈺真子。

先ほどの様子とのギャップに一瞬戸惑う様子のみらのだったが、其処はやっぱりぽやん少女、あんまり気にせず答を継いだ。

「遣われ方というか、・・・そうですね、この“樹紋”、わたしが知る限りでは、これを前にしてお祈りするのが普通ですけど」

そう言いながら、自分の鞆の中から、先ほど鈺真子に見せて貰ったのと同じような紙を取り出して広げる。

それに対して鈺真子はいえ、なんだか拍子抜けしたような顔で、広げられた紙を見つめている。

「・・・お祈り？この生命の樹に対してお祈りするのか？・・・無駄で妙な真似をするものなのだ、最近の若い子は」

やれやれ、という風に息を吐いて、鈺真子は広げられた紙をひよいと取り上げる。

「で、お祈りする意味はなんなのだ。それが問題なのだ」

「あー・・・その、なんでもずっと綺麗なままでいられるようになるとか、」

「馬鹿馬鹿しいのだ。実に全く嘆かわしいのだ。こんな図形如きに祈りを幾ら捧げても、願いなんて叶わないのだ」

全く真剣味の無いだらけた声で、鉦真子はそう断言する。

みらのも戸惑った様子で、言葉を継ぐことなく黙りこくる。

「・・・ふん、セフィロトの樹が、そんな単純な魔術なぞに向いているとは到底思わなかったのだが、やっぱり思ったとおりなのだ。どうせやるならこの程度——」

言いつつ、取り上げた紙に、なにか文字をすらすらと書き込んでいく鉦真子。

やがて文字を書き込んだ紙の上に、自分の筆箱から取り出した消しゴムを置いて、鉦真子が軽くテーブルをこつん、と指先で叩く。

すると。

「——やってみせろと言うのだ」

一瞬、なにが起こったのか判らなかったが。

紙の上に置かれていたハズの消しゴムは、なにやら妙な形のゴム人形へと形を変えていた。

「な、なにが起こったんですか・・・？」

恐る恐るといった風に、何故か俺に向かって問いかけるみらのさん。俺も詳しく判らないけど、まあ、この程度なら、前にも見たことあるし。

「・・・鈷真子、今回はナニしたんだ？」

「ちょっと式を組み替えただけなのだ。外界に影響を及ぼすような強い魔術は、こんな形だけの式じゃあ不可能なのだ」

答になってないような気がしないでもないのだけれど、要するに鈷真子さんは魔法使いなんですな。

どうやらみらのさんもその事実を呑み込んだようで、呆然と出来上がった消しゴムの残骸を手にとって、マジマジと眺めている。

「祈るだけじゃあ、この図形は役に立たないのだ。今のは第一セフイラに少し手を加えて、創造の属性を活かしたワケなのだが――この程度もしてないなんて、この図形を伝えた誰かも、よっぽど腕の悪い術者だったに違いないのだ」

憤慨するように、かつ鼻息荒く、見たことも会ったこともない誰かさんを扱き下ろす鈷真子さん。

なんだか妙にイラついてる辺り、とぼっちりの危険が加速度的に上昇気流で被害が怖い俺。

「そもそも、この図形は本来、世界の在り様を紐解く教本のようなものであるべきなのだ。それを物質界に干渉する式と成そうなどと――愚劣もいいとこなのだ」

軽蔑するように、テーブルの上に置かれた“樹紋”の紙片に眼を遣って、鈷真子は大きな溜息をこれ見よがしに吐いてみせる。

「・・・ユータ。もういいのだ、“樹紋”についてはもうおしまいなのだ」

「え。今回はなにもなくていいのかよ、鈷真子」

当然なにかしら対処に追われることを覚悟していた俺は、正直な話かなり驚いた。

しかし鈷真子は、先ほどまでの上機嫌も何処へやら、非常に無関心な様子で手をひらひらさせるだけ。

「いいのだ、別に。こんなちゃちなモノ、放置しておいても問題になんてならないのだ」

「で、でもさ・・・」

言いかける俺を制するように、鈷真子が珍しく険悪な瞳で、ぎょろりと睨め付ける。

常の無邪気な瞳とあまりにもギャップが大きいその視線に、俺は怯まずにはいられない。

しかし、その視線にも怯まなかった人がいた。

「・・・放置するんですか、麻七菜先輩」

ゴム人形を掌に握り込んだまま、今まで沈黙していたみらのが呟いた。

「・・・放置しても構わないのだ。こんな粗悪なモノをまっとうな知識もなく遣おうとしたって――」

「知識がある者が遣えば、先輩みたいなことや、もっと別なこともできるんじゃないですか？」

真っ直ぐ鉛真子を見据えて、なんだかとても真剣な声で、みらのさんはそう問うた。

鉛真子は一瞬だけ言葉に詰まってから――

「・・・できるのだ。まっとうな知識に正式な手順、術式を束ねる才能があれば、誰にでも」

そう、答えた。

「わたし、ですね。実のところ、コレがどんなものかを理解してはいたんです。・・・でも本気にはしていなかった。だからこそ、今まで問われればコレを教えることにも躊躇いはなかった」

けれど、と呟き、幸守みらののは掌に握り込んでいたゴム人形をテーブルに戻す。

その手が微かに震えているように見えたのは、多分気の所為などで

はないだろう。

「・・・こんな真似ができるなら。もっと凄いことができるなら。・
・これが誰の手にも渡するようなモノであるということは、とても
恐ろしいことなんじゃないでしょうか、先輩」

ああ、と思う。

俺と同じように、こ・う・い・う・も・の・も・あ・る・と・い・う・こ・と・を・知・っ・て・し・ま・っ・た
彼女は、恐ろしくなったのだ。

今は遊びで済んでいることだけれど、誰かが本気でこれを信じ、学
び、そして悪用しようと考えてしまったら。

モノを作れるというだけでも、それは結構危ないことである。

それより上を目指せるというのなら、なお。

「・・・どれだけ広まっていると思っているのだ、みらのちゃん？」

「・・・・・・・・」

今度はみらのが沈黙する番だった。

俺にだって判る、だって今のは――

「君が広めたのだ、幸守みらの」

――酷く冷たい、鉦真子の弾効。

それに全身を強張らせて、みらのがなんとか声を絞り出す。

「……………判って……………います。信じていなかったからといって……………それを広めてしまったのは、間違いなくわたし」

「教える者がいなければ、こんな曖昧なモノ、すぐさま忘れ去られていたハズなのだ。それなのにみらのちゃんは、忘れ去られるハズのソレを、別の学年に噂が流れてくるほどにまで、浸透させてしまった」

言葉もなく、ひたすらに鈷真子の弾効を受け続けるみらの。

その様子があまりにも不憫で、俺が思わず口を挟んだ。

「ま、待てよ鈷真子。なにも其処まで責めてなくたっていいだろ？みらの一人を責めたって——」

「彼女を責めずに誰を責めるつもりなのだ、ユータ。そもそもみらのちゃんがこんな真似をしなければ、こんな不出来なモノが蔓延することなんて、なかったのだ」

「……………え。それって、どういう」

とても引っかかる一言を言われたような気がして、俺はぴたりと静止する。

小さな溜息ひとつ、鈷真子はテーブルを軽く指先で叩いて、俺を睨み付けた。

「……………情報収集が甘いのだ、ユータ。この“樹紋”という不出来

な式を持ち込んだのは、他でもない幸守みらの。・・・その人なのだ」

まるで冗談みたいな鈷真子の言葉に、みらのはただ顔を青褪めさせるのみ。

その姿を見て、俺は何故か納得してしまった。

ああ、本当なんだ、と。

「みらのちゃんは大体本当のことを話してくれたみたいなのだが、ひとつだけ嘘を吐いていたのだ。広めた誰かというのは、みらのちゃん自身だったのだ」

「・・・いつ調べたんだよ」

「そりゃあ、鈷真子がこの情報セフィロトを知ったのは、ユータよりも後なのだ。必然、ユータがみらのちゃんと話している隙に収集した情報ということになるのだ」

抜け抜けと言う鈷真子。俺に任せとけば安心とか言ってたのに。

今まで何度も共に死線を潜り抜けてきた仲だ、今更俺を信用していないなんて言わせはしないのだが、そうだとすると情報を隠蔽した理由が判らない。

悔しかった。実に全く悔しくて堪らなかった。

「・・・なんで黙ってた」

「そりゃあ簡単なのだ。なにしろユータは隠し事のできない性格だから、話しておいたらみらのちゃんを言葉でじんわりといたぶるなんて、夢のまた夢なのだ」

「隠し事できねえのは事実だし鉛真子のご立腹なのはなんとなく理解したけど、言葉でじんわりいたぶろうなんざ性格悪いぞ部長どの！」

「判ってるのだ。単純にゲームしてたら時間なくなったっていうのも理由のひとつなのだ、許して欲しいのだ」

そんな理由だったらなおさら許せねえっての。

・・・いや、まあ、許すんですけどね？

「・・・ていうかおまえ、よくそんな情報聞き出せたな」

俺では引き出せなかったその情報、やはり鉛真子の手腕には敵わないという感心を含めてそう言ったのだが、鉛真子はなんとなく難しい顔をして、ぽつりと呟いた。

「ユータ・・・鉛真子は一人目でこの情報を手に入れたのだ。“樹紋”のことを教えている人物のことを訊ねたら、みらのちゃんだけだと聞いたのだ」

「・・・」

自分が哀しくてどうしようもない気持ちになってしまった！

「ついでに言うと、最初に“樹紋”のことを伝えたのもみらのちゃ

んだと、同じ子から聞いたのだ。」

「俺はひたすら怖がられてたんですけど！」

「人徳の違いなのだ。哀れなのだ」

自慢げに薄ぺったんな胸を張る鈦真子ちゃん。やべえすっげえ可愛い。

「——というワケなのだ、みらのちゃん。反論いいわけがあったら、一応聞いておくのだ」

一応は、という形式以上の素振りは見せず、鈦真子は項垂れるみらのに声をかける。

「……反論は、ありません。できるはずないじゃないですか、麻七菜先輩」

「当たり前なのだ。こんな手間をかけさせて、みらのちゃんのような悪い子にはおしおきが必要なようなのだ」

やけに偉そうな我が部長どのの言葉に、みらのは少しだけ疲れたような笑みを浮かべた。

「……先輩方は、正義の味方なんですネ」

「違うのだ。別にみらのちゃんは悪いことしたワケじゃなく、ただおぞましいことをしただけなのだ。それにまだ“樹紋”の実害は出ていないし、みらのちゃんに悪気があったワケでもない。別に目くじら立てることなんて、本来ならひとつもないのだ」

コレは正義の味方の領分などではなく、よりよい日々を守りたい学徒の領分である、と。

「だけどもらのちゃん。必要セフィロトのない害悪未満を持ち込んだ『罰』として、“樹紋”の根絶に働きかけて欲しいのだ」

聖マリア学院まろん倶楽部の部長さまとして、そう告げた。

「・・・はい、そのつもりです」

少々拍子抜けしたような表情で、鈷真子の言葉に頷くみらの。

「先輩、偉そうですね、噂通り」

「偉いのだ。なにしろこの街は奇怪なのだ、奇怪な癖に護りが薄いのだ。鈷真子やユータが護ってあげないと、色々被害が出ちゃって困るのだ」

自分の身も含めて護っているから偉いのだ、と嘯うそぶいて、鈷真子は薄ぺったんな胸を張る。

「じゃあ、俺も偉いのか？鈷真子」

「ユータは偉くないのだ。むしろエロいのだ」

「うまいこと言ってんじゃねえよ」

事実なだけに反論難しいし。ていうか別にうまくもねえぞコノヤロウ。

でも俺、鈷真子のエロっぷりには負けるぞ、間違いない。

そんな俺たちを見ていたみらのさんが、ほんのちょっぴり遠慮気味に、くすつと笑った。

「——本当に、仲がいいんですね、先輩方」

で、それから一週間で、

一度広まった“樹紋”は、当然のことだがそう簡単に収まったりはしなかったのだけれど、それでもなんとかこれ以上の拡大は防いでいるみたいで、一年の女子から“樹紋”の噂が広がることはなかった。

鈷真子も色々と、みらのと一緒に暗躍していた様子だったので、その辺抜かりはないのだろう、たぶん。

強いて言うなら、なんか最近アンチ“樹紋”の噂が聞こえてきたりする程度で、概ね鈷真子の狙い通りといったところだろうか。

後で鈷真子に聞いた話によると、みらのが持ち込んだ“樹紋”は、そもそもみらの自身も知り合いから教えられただけの代物だったそうで、その知り合いが熱狂的に熱中していたその“樹紋”を、単純に気まぐれでこちらの学生に教えてしまったのが始まりなのだとか。

そういう理由もあってか、まっとうに“樹紋”の図形を描けるのは

みらのだけだったそうで、彼女が教えなければ、じきに図形そのものが忘却されるだろうとのこと。

そもそも“樹紋”の紙は使い捨てだそうだし。

コピーとかは大丈夫なのか聞いてみたが、それに関してはどうにもならないのだそうで。

なんともいい加減な話だが、自然と消滅を待つ以外、どうしようもなさそうなのは事実だった。

鈷真子曰く、おまじないなんていうのは一時の狂騒、咽喉元過ぎれば熱さを忘れる、とのこと。

如何にも本物くさい贋物にせものが生まれ続けていることを考えれば、こういう地味めの本物なぞ、すぐに忘れ去られるものだ、そう言っていた。

噂を聞いてから僅か一日で解決した今回の一件、俺としては働く機会が少なくて非常にらくちんだったのだが、ひとつだけ心残りがあったのである。

「・・・鈷真子！」

大声で、愛しの部長どこの名前を呼びながら部室へと侵入する。

もちろん部長どのが着替えていきやーえっちー、などという事態もなく、いつものようにパソコンに向き合っていた鈷真子が振り返った。

「ん、ユータ。鈷真子の名前を叫びながら入ってくるのは珍しいのだ」

「最近忙しそうで、俺としちゃ話しかけ辛かったからな。久しぶりにおまえの声聞いた気がするぜ」

まあ、二日前に話したのが最後だったんだけど。

「うん、まあ今はそんなに忙しくなくなったのだ。大体悪い噂も流し終わった頃合いだったのだ」

「そうだろうそうだろう、それを見計らってやって来たんだよ俺は」
フンフンと鼻息荒く、回転椅子に胡坐をかいて座っている鈷真子に近付いていく俺。

「・・・ユータ？なんだか顔がすっごく緩んでいるみたいに見えるのだが・・・」

「ええと鈷真子さん、あの、そのですね？俺、“樹紋”の一件で、有力情報とまではいかなかったんですケド——容疑者さんみらの確保しましたよね？」

「ああ、そうなのだ。あれはユータのお手柄なのだ。鈷真子は次の日辺りに働きかけようと思っていたのだが、あれで一氣に解決したと言っても過言ではないのだ」

満足そうな鈷真子の言葉に俺ガッツポーズ。もちろん内心。

「それですな鈷真子さん。・・・あの、なんていうか、その、ユ

「タはごほうびが欲しいのですよ？」

さりげないフリを装って、ずばり自分の要求を突きつける俺。

脳内で鈷真子の衝撃発言をリフレイン。

『物分りのいいユータにごほうびなのだ。なにか有力な情報を掴んできたなら、もっとすごいコトをしてあげるのだ』

すごいコト。

腕にきゅっと抱きつくやつより激しくすごいコトといったら、可能性はもうそんなにないですよ？

アレですか、○○とか××とか、△△とか、もしかしたらあんなことまで！？

「……ユータの顔が欲望に歪んで大変な有様なのだ……キモいのだ……」

キモがられた。

「だ、だってごほうび欲しいですよ！？」

「まあ、活躍したけど結局有力な情報を掴んでないと突っぱねてもいいのだが……頑張ったことには違いないので、ごほうびぐらいはあげるのだ、仕方ない」

むふー、と面倒くさそうに息を吐いて、鈷真子は自分の鞆の中から

プリッツの箱を取り出した。

・・・え、まさかそれ？

お菓子がごほうびで、確かにそりゃあある意味すんごいけど。

そんな俺の不安な思いが表情に出ていたのだろう、鮎真子は可愛らしく笑って、

「そんな泣きそうな顔しなくていいのだ。ちゃんとすんごいコトをやったげるのだ」

そう言いつつ、プリッツの箱を開けて、中の袋をぺりっと開けて、

「・・・はい、ユータ。あーん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

にこにこ笑った顔の鮎真子さん、なにやらプリッツを摘んで、俺の口元に持ってきている。

ナニを意図したものかは明白だったのだけれど、なんというか、その。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぬ、ぬう」

すげえ恥ずかしい。

こういうシチュエーションも、ある意味男の憧れだという話は聞いたことがあるのだが。

やべえ恥ずかしい。

なんか子供扱いされてるみたいで、酷い恥ずかしい。

「どうしたのだユータ。あーん、するのだ」

にやにやと、微妙に意地の悪そうな顔で笑いながら、俺の口元でプリッツを揺らす鉦真子さん。

やべえ魔性の女だ、麻七菜鉦真子！

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、・・・・・・・・あーん・・・

」

とりあえず、恥ずかしさに耐えながら口を開いてみる。

「えいっ☆」

すかさずプリッツを俺の口に持ってくる鉦真子ちゃん無茶苦茶可愛くて俺死にそう。

にっこにっこ、実に幸せそうに笑っている辺り、なんていうか鉦真子はサディストだ。

判ってたけどね？

「はい、ユータ。・・・あーん」

「あ、あーん」

躊躇いがちに口を開く俺。そして優しくプリッツをくれる鈷真子ちゃん。

なんだかんだと幸せな気分でいっぱいだった。

空気が甘いぜ・・・今の俺たちはまさしく恋人同士。誰が見たってそう思う。

「ユータ、あーん」

「あーん♪」

すげえ楽しい気分になんてきたんですが。

ああそうか理解した、あの酷い羞恥心は、この境地に辿り着くための布石だったワケだ。

「うんうん、こうしてユータにプリッツ食べさせてると、昔飼ってたインコの湯太郎ユタローを思い出すのだ」

「・・・・・・・・」

台無しだった。

俺の純情はあっさり汚されてしまった。

ていうか鳥扱いトリ扱いか、俺。

「おや？ユータがどうしてか泣きそうなのだ。もしかして、鈷真子

からプリッツもらえるのがそんなに嬉しかったのかにゃ？」

嬉しかったのが台無しになったのが哀しいんです鈷真子さん！

そんな心の叫びは当然のように鈷真子には届かなかったようで、鈷真子はこのこしながらプリッツをまたひよいと口元に持ってくる。

「はい、ユータ。・・・あーん♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、あーん♪」

哀しかったけれどそれを上回る欲望に負けちゃった俺！情けねー！

何故か塩っ辛いプリッツ（ロースト味）を頬張っていると、不意に部室の扉が開かれる。

「ういーっす久しぶりー。ちょっと由有多に用があって・・・」

言いつつ現れたるは我がクラスメイトの物見努理流くん^{ものみどりる}。

俺と鈷真子の仲睦まじい姿を目視するや否や、最初の元氣は何処へやら、スゴい表情で硬直して微動だにしなくなる。

いやまあ、その気持ちはよく判る、痛いほど。

俺も恥ずかしさのあまり、全身が硬直して動けねえ。

「・・・・・・・・ごめん、お邪魔しました」

たっぷり十秒は停止していた努理流くん、凍りついた空気に気付い

たのか、そそくさと部室から退出していった。

「・・・変なヒトなのだ。用があるなら連れて行けばよかったのに」
不思議そうに呟く鉦真子さん。ひでえ。

「ま、いいのだ。ユータ、あーん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、あーん♪」

葛藤したけどやっぱり欲望に勝てない奈雅座由有多！情けねー！

そんなこんなでプリッツをぽりぽりいただいて、結局完食してしまふ俺がいました。

ちなみに突然現れ突然退出したドリルくん、彼の用事がなんだったかと言いますと。

「・・・なんだ、みらのちゃんか」

食べ終わって努理流くんの用事を済まそうと部屋から出ると、努理流くんは部屋の外で律儀に正座して待っていた。

そしてその隣には、同じく正座した幸守みらのの姿があったのである。

どうもドリル、先輩の癖に後輩に媚を売っていたらしい。なんて野

郎だ。

「すみません、奈雅座先輩。勝手に訪ねていいのか迷ってしまって、物見先輩にお願いしたんです」

「そういうコト。可愛い子猫ちゃんの頼みは聞かないとなあ。」

今どき子猫ちゃんはどうかと思ったのだが、ダサくて幻滅されるのは所詮ドリルである。

言ってやる義理もねえ。この覗き魔^{ビーベンガー}が。

「どうしたんだ、みらのさん。君も忙しいんじゃないのか？」

とりあえず俺は、こうして訪問される理由が判らなかったの、まずは外堀を埋めていく感覚で、そう訊ねてみる。

するとみらのちゃん、ぽやんとした笑顔を浮かべ、ほんのりぼかした表現で答えて曰く、

「それは麻七菜先輩が色々手を回してくれたので、わたしもあらかた終わったところなんですよ」

これから毎日が大変になるんですけどね、と言って、くすくすと声を立てて笑う。

その様子には別段暗い影は見られないし、落ち込んだ様子もない。

鉦真子に言われたことを気にしているかと思っていたが、存外そうでもないらしい。

「終わったことを報告しに来たのか？」

「いいえ、違います。麻七菜先輩でしたら、あらかた終わっていることはとづくに知っていますし、今日は・・・ちよつとソレとは別の用件で・・・」

「・・・？」

少し口ごもる。

そんな、なんというか幸守みらのという後輩らしくない態度に、俺は少しばかり訝しむ。

はて、他の用件？

「・・・・・・・・悪い、ちよつと用件の想像がつかないんだけど」

「あ、はい・・・・・・・・ええと、実はその、ですね。ちよつと奈雅座先輩にお願いがあつて・・・」

「俺に？・・・はて？」

首を傾げる。なにしろますます判らなくなった。

俺にでも役立てるようなことつて、なにかあったつけ・・・？

訝しむ俺の苦悩を察したのか、今度は齒切れのよい口調で、自分の用件を簡潔に述べるみらのちゃん。

「実は、まろん倶楽部に入部したいんですけど、麻七菜先輩に取り次いで欲しいんです」

「……………なんで俺？直接言えればいいよな」

「奈雅座先輩から薦めて貰えば、間違いなく入部できると思うんです。わたしひとりだと、ちょっと断られるような気がして」

少し困ったような顔で答えるみらのさん。

よく判らないけど、みらのさんは随分俺のことを買ってくれているみたいですね…………？

「ちょっと待ってみらのちゃん。まろん倶楽部に入ろうなんて、正気かよ?!」

やや遅れて反応したのは、俺たちの会話を鼻クソほじりながら聞いているドリルくん。

正気か、とはひどい言われようだったが、俺も似たようなことは思わなくもないので、それに関しては沈黙を保つことにする。

「いいのか、まろん倶楽部っていうのは変態の巣窟なんだぞ。唯一の部員である由有多はハッキリ言ってマゾの変態だ。麻七菜にシバかれて悦んでいるようなやべえヤツなんだぞ。麻七菜にしたって、あいつは可愛い男子生徒女子生徒を問わずに手を出すような、性に放埒な痴女一步手前の危険人物だ。おまけに——」

なおも言い募ろうとするドリルの頭をとりあえず蹴っ飛ばす。

頭を両手で抱えて転げ回るドリル。いい気味だ。

「言いたい放題言ってくれちゃまって、俺とってもゴキゲンな気分になっちゃったじゃねえかよ、物見ドリル。」

何回かゲシゲシと踏み付けていると、ぐったりとして動かなくなる
努理流くん。

放っておけば誰かが拾ってくれるだろう、きっと。

用を済ませた俺がみらのに向き直ると、あはは、と乾いた苦笑を浮かべている様子の彼女。

「・・・まあ、とにかく取り次ぐくらいならオッケーだけど。後悔しない？」

「しません。ホントにまろん倶楽部に入りたいんです、わたし」

キラキラと輝く、期待に満ち溢れた眼差しで見られてしまったのは、俺も返す言葉はない。

仕方ないので、俺は努理流くんを放置したまま、部室の扉を開いてみらのを招き入れる。

「鉦真子、入部希望者」

またパソコンの前に戻っていた、我らが傲慢なる部長どのが、くると振り返ってニツカリと笑顔を浮かべる。

「・・・ふっふっふ。待っていたのだみらのちゃん！まろん倶楽部

「ようこそ、なのだ！」

あっけらかんとしたその言葉に、何故か呆然とするみらのちゃん。

「・・・ほら、別に俺が取り次がなくても大丈夫じゃん」

「そ——そう、ですね。驚いちゃいました・・・」

なんで驚いているのかはよく判らないが、要は鈷真子の器を読み違えただけのことだろう。

戸惑い気味に鈷真子の前に進み出て、鞆の中から入部希望届を取り出した。

「・・・えっと、一応もう許可は下りてるんですけど」

「うん、用意周到ごちそうさまなのだ。それでこそみらのちゃん。部員として迎え入れる準備は万端だったのだ」

えへへ、と嬉しそうに笑って、鈷真子は入部希望届を受け取った。

これで今この瞬間、幸守みらのは正式に我らがまろん倶楽部の正式メンバーになったワケである。

「・・・えっへへー！みらのちゃんのようなかわいい子が入部してくれて嬉しいのだ！今までユータひとりでちよつと貞操の危機を感じていたのだ！かわいくてぐらまーなみらのちゃんが入部したからには、鈷真子も一層安心なのだ！しかし本当に思わず搾乳したくなっちゃうようなえっちなおっぱいなのだー！！うりゃーっ！！」

豪^{エラ}く高いテンションでみらのさんに抱きつきながらおっぱいもにゅん。鈷真子さんすげえ。

むにゅんむにゅんと揉んで揉んで揉みしだいて、立派なおっぱいを蹂躪する鈷真子さん。

すげえ、以前の十倍以上は揉んでいる。

「おー、ステキな感触なのだー……やあらかくて温かくて、思わず顔を埋めたくなくなっちゃうのだー……」

そう言いながら本当に顔を埋める鈷真子さん。やっべ、羨ましくて涙が出そうだ。

みらのちゃんは当然のように硬直していて、胸を蹂躪されるがままになっている。

悲劇かもしれない。

「きっ……きゃあああああああああああああああああああああああああっ！！！」

漸く自失から返ったみらのちゃん、それはもうヒドい取り乱しでしょうで。

悲鳴を聞いて部屋に飛び込んできたドリルが鼻血流しながら呆然と立ち尽くし、俺は俺で前かがみになりながら部屋の隅っこで震えていることしかできなくて。

鈷真子は妙に嬉しそうだった。

それはいいことなのかもしれないが、結局最後ははしやぎすぎて、あまりのことにみらのさんは失神してしまい、俺たちふたり揃って保健の先生に怒られる羽目になった。

なんで俺まで。

というワケで、とりあえず俺と鈦真子は、みらのさんを先生に任せて保健室を出て（ていうか追い出された）、さて帰ろうかとしているところ。

鈦真子と一緒に鞆を部室からとってきて、部室で待ち構えていたドリルをなだめて帰し、俺たちも下駄箱にやって来て。

「・・・さて、俺は帰ろうと思うが」

「鈦真子も帰ろうと思うのだ」

「・・・一緒に帰る？」

「道、途中までしか一緒じゃないのだ」

「送ろうか？」

「送り狼になれちゃイヤなのだ」

「・・・そっか。それじゃあ、また明日」

「また明日なのだ」

俺たちはそう言い合って、それぞれの下駄箱に向かう。

上履きから靴に履き替え外に出ようとして、玄関のところで鈷真子とバツタリ顔を合わせる。構造上当たり前なんだけどね。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・途中まで、一緒に帰るのだ、ユータ」

「ういー、喜んで」

誘われて嬉しかった俺は、鈷真子と一緒に学校を出て帰宅する。

たぶん明日からは、またぞろ奇妙な噂を探すため忙しくなるのだろう。

それを思えば憂鬱な気がしないでもなかったのだけれど、とりあえず。

今はささやかだけど幸せで。

こういう気持ちがあれば、辛いのだって楽しくなるだろう、と。

そんな幸せなことを考えて、俺と鈷真子は下校した。

第二回 「夜の護り手」 前編（前書き）

樹紋の拡大を阻止したまろん倶楽部。

しかし彼らに休む暇もなく、新たな噂が、またひとつ・・・。

第二回 「夜の護り手」 前編

最近、夜の街を歩いていると、槍を掲げて鎧を着込んだ人影に追い回されるという話。

つい先日“樹紋”セフィロトの一件を片付けたばかりだった俺の耳に、そんな噂が流れてきたのは、幸運なのか不運なのか。

こうして連続で奇妙な噂が流れてくるという事態は今までの経験がなく、正直なところ前回の一件が楽すぎた反動ではないかと訝しむぐらい。

報告の義務はもちろんあるのだけれど、この一件を我らが敬愛すべき部長ながくらどのに報告するかどうかは、いつものように、俺こと奈雅座ながくら由有多ゆうたにとっては洒落にならないほど、あまりに差し迫った懸案事項であると言えるのである。間違いない。

なにしろ、こちらら善良にして平凡なる男子学生的身であれば、正直荷が重いというか、そもそも命の遣り取りが発生するような事態には巻き込まれたくないというか。

・・・だがしかし。しかし、である。

前回も隠そうか隠すまいか悩んだ挙句、結局報告することに心を決めて事なきを得た俺には、どちらの道を選ぶが正解なのかは、もはや一目瞭然などという言葉でもあまあまなほどに判り切った事実なのである。

つまり報告。

なにしろ我らが賢明なる部長どのは、俺が報告しようとしまいと、結局同じ情報（しかも俺よりも緻密で詳細にして正確なもの）を引っ捕まえて連行してくるハズだからである。

反抗して得るものは不興のみ、なんていう状況、冗談じゃねえのである。

だからこそ俺は報告する気マンマンで、仕入れてきた情報を意気揚々と掲げつつ、我らが敬愛すべき部長どのが待っているであろう部屋の扉を元氣よく開け放ち、さあ報告するぞと息を吸い込んで、

「——というのが、今日仕入れてきた夜の襲撃者の情報なんですけど」

「ふむ、いきなり襲われた——と。それでその子、何処の病院に入院しているのだ？」

「折紙記念病院だそうです」

一連の会話を聞いて。

俺の吸い込んだ息は声になることなく、その役割を終えてしまったのだと理解する。

「……ん？ やや、ユータがいつの間にか現れてるのだ。なんにも言わずに入ってくるのは驚天動地に珍しいのだ」

部屋に備え付けのパソコンの前に陣取ったまま、驚いたような声音でそう呟いた彼女こそ、俺が敬愛して止まない、我らが部の部長ど

のである。

見た目はちょっと可愛い女子高生。いや、中学生と高校生の境目辺りがホントのところ。

セーラー服にボブカット、ただし珍妙な耳（髪の毛の一部がネコミミみたいにハネている）つき。

やや吊り眼で、その癖愛嬌を感じさせて已まない不思議な眼。

801好き。やおい レズではないけれど両刀。

実は結構性欲を持て余してるんじゃないかと心配になる。

発言はいつもいつでも奇妙奇天烈、一言で括ってしまえば不思議ちゃん。

妙な口調、妙な性格、妙な人格。

語尾が少なくとも俺の知る限りいつだって「ゝなのだ」とか話すやつ。

麻七菜^{まなな}銈^{こまじ}真子。

それが、彼女の名前。

そして彼女こそ、俺も所属している、我が学園で一番ナゾの多い活動内容を誇る、名前からして如何わしい、はつきり言って健全さの欠片もない、青春とは悲しくなるほど縁遠い部活、^{クラブ}“ まろん倶楽部 ”の部長どの。

「あ、奈雅座先輩。いらしてたんですか？」

そして、ぽにゃっと笑顔で振り向いて、軽く頭を下げて挨拶してくる可愛い少女。

髪は栗色さらさらで、肩口ぐらいの髪の毛を後ろでカラフルなゴムを用いて一本にまとめてる辺り、素朴な可愛らしさが嫌でもにじみ出てる。

顔自体の造りもぽやぽやぱやーんで、なんというかすっごく癒される。

身長は俺と鈦真子の間ぐらい、まあつまりは平均的な女子生徒の大きさよりもやや小柄な程度。

胸の方も、服に隠れて判りにくいですが実は細身の体と童顔に釣り合わないほどにグラマラス。

日本人男子学生が誰しも憧れずにはいられないと思うような女性が其処にいる。

さきがみ
幸守みらの。

それが彼女の名前であり、つい先日新たに我が部、まろん倶楽部に入部したばかりのぴちぴち可愛い新入部員、なの、だが。

「・・・ちわー、三河屋です。皆さんどーもコンニチワ・・・」

「な、奈雅座せんぱい？」

「ユータ、ユータ！新しい情報をみらのちゃんが持ってきてくれたのだ！優秀すぎて、鈷真子はもう涙が出ちゃいそうなのだ！」

鈷真子が嬉しそうに、回転椅子ごとぴょんぴょん飛び跳ねながらそう言った。

・・・そう、そうなのである。

みらのちゃんは新入部員の癖に、俺よりも鈷真子の役に立っているのである、コレが。

しかも夜の襲撃者。俺と同じ情報じゃん。

俺の集めた情報は、まるごとバナナさんというぐらいに無意味なものになっちゃった！

嫉妬で胸が焼けそうである。頑張れ俺。

「・・・もっかい、話してくれる？俺の（名誉の）ために」

俺の情報が活きる機会があればいいのになあ。たぶん無駄だけど。

とりあえずは前向きに考えることにして、先の話の詳細を説明してくれるよう求める俺。

諒解したように頷いて、みらのちゃんが軽い咳払いのあと、鈷真子にしたのと同じ説明を俺に対して繰り返す。優しいじゃねえか。

「えっとですね、わたしが今回聞き集めてきた情報は――」

学園まろんズ 第二回

「夜の護り手」 一 前編

「――夜の襲撃者、ね」

やっぱりというかなんというか、愛すべき後輩のみらのちゃんが蒐集してきた情報は、俺の蒐集した情報と寸分違わぬ同じもの。

しかも、詳細を聞く限り、俺の情報よりも明らかに質がいいというか、これが困ってしまうぐらい詳細な情報だったりするのである。

要約すると、次のような噂。

先日来、どうも深夜、主に街外れの方面で、槍を掲げて鎧を着込んだ、如何にも時代を取り違えてしまったかのような格好の人影に、学校の生徒に限らず様々な人間が襲われているという情報なのである。

此処までは俺も蒐集した情報なのだが、みらのさんのもたらした情報にはまだ続きがある。

まず、この学校の生徒で深夜街中を歩いている際に襲われて、以来三日間欠席したままの生徒の名前と、実は入院していた彼の入院先。そしてもうひとつ。

こちらが重要なのかどうかはよく判らないのだが、どうも槍らしきモノで突かれた獣の屍骸が、街外れの森付近に多く転がっているという噂。

重要なのかどうかはさておき、噂に聞いた人影が、まさしく槍を掲げた旧い時代の兵士らしき格好で出没するという話であるからして、なんらかの関係があるのではないかと疑ってしまうのは当然といえるかなんというか。

今回は碌な情報を得られなかったからと、今回は奮発して情報収集に努めた俺だったのではあるが、あっさり敗北ファツキネス（意味不明）。

なんていうか、あれだよね。

俺って別に要らなくね・・・？

「・・・ぐっ、うつ・・・ふっ、う、う・・・っ!!」

「わあ、ユータが突然泣き出したのだ・・・キモいのだ・・・」

あまりのことに涙する俺に対してのその言葉酷くないですか鉦真子さん！

俺ってばちょっぴり、そうちょっぴりだけ、深く深あーく傷付いてしまいましたよ？

「・・・あの、もしかして奈雅座先輩、・・・・・・・・ごめんなさい、余計な真似を」

俺^{ナニカ}の傷心を察したのか、気まずそうに顔を伏せて謝ってきたみらのちゃん。

やっべ、その心遣いに惚れてしまいそうだ。

「い、いいんだ。俺も頑張ったけど、みらのちゃんの素晴らしい情報能力に敗北しただけ」

あんまり気にしないで、というような意味のことを言ってやると、ほにゃつとした柔らかい笑みを浮かべて、

「はい。・・・その、ありがとうございます、奈雅座先輩」

控えめな口調でお礼を言ってきちゃったりするよい子ちゃん。やべえマジ惚れそう。

・・・いやまあ、俺には鈷真子がいるんですけどね？

そんなことを思いながら、鈷真子を見る。

「・・・ん？どうしたのだ、ユータ。そんな生暖かい眼で見られるとキモいのだ」

「・・・」

報われねえ！ほんっとーに報われねえ！！

頑張れ俺、とばかりに自身を鼓舞して、とりあえず消沈しかける意気を立て直す。

「とりあえず諒解したので、俺はどうすればいいのか指示が欲しいです、部長どの」

「うん、それじゃあユータには早速病院に行ってきて欲しいのだ。今日にでも、すぐ」

「・・・行動早いっすね」

呆れた俺が思わず洩らした呟きに、鈷真子は薄ぺったんな胸を偉そうに張って、

「いつも言っているのだ。情報は生命体だから放置プレイは健康に悪い、と」

「そんな奇天烈なことを言ってたんですか鈷真子さん！」

やべえ俺気付いてなかったよ！

よもやそんな各方面に危険な台詞だったとは・・・それを知っていれば何としてでも止めていたものを。

そんな俺たちの遣り取りを見ていたみらのちゃんが、そんな現在の状況とは全く関係のないじゃれ合いを見兼ねたのか、おずおずと鈷真子に向かって話しかける。

「あの――麻七菜先輩。わたしは・・・その、奈雅座先輩と一緒にいいんでしょうか？」

そんな言葉を聞いて、俺も少しだけなるほどと納得する。

彼女にしてみれば、今回の“夜の襲撃者”が初の仕事になるワケだから、勝手が判らずに戸惑っている状態なのだろう。

俺と同じようにそのことを察したらしい鈷真子は、軽く頷いて指示を出す。

「うん、みらのちゃんはユータと一緒に病院へ行って、円滑な交渉の手助けをしてあげて欲しいのだ」

「……………。それは、その、鈷真子さん？」

暗に俺だけじゃ心配だと言っているのわ…………？

「あの、鈷真子さん？」

「病院の方は任せるから、鈷真子は森の方の噂を確かめさせてもらうのだ」

「聞いて。ねえ聞いて？」

鈷真子はすっかり俺を無視すると、おもむろに回転椅子からひよいっと飛び降りる。

そのままつかつかと部室の扉の前まで歩いていくと、スカートを翻し振り向いて、一言。

「みらのちゃん、ユータに乱暴されそうになったら警察に電話すること。あと逃げる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鈷真子さんひでえ。

俺がショックを受けて硬直する横で、みらのちゃんが真剣な顔で言
った。

「・・・・・・・・えと、大丈夫ですよ、麻七菜先輩。奈雅座先輩はそ
んな酷いことしないと思いますから・・・」

「ユータは男の子なのだ。女の子と二人きりになった途端、獣とし
ての本性が露呈するに決まっているのだ」

やべえ、俺ってそんなに信用されてなかったんだ？なかったんだー・
。。。

「で、でもでも、奈雅座先輩と麻七菜先輩、今まで二人っきりでも
なにもなかったんですよね？」

「――――」

急に黙りこくる鈷真子さん。やべえ誤解されそう。

ていうか鈷真子黙んな！

「・・・えっと、まななせんぱ、」

「女としての忠告よ。奈雅座ユータには気を付けなさい」

やけに無性にクールな声でそれだけ言い残して、鈷真子はさっさと

出ていってしまった。

出て行って、しまった。

・・・いやあの、本当になにもなかったんですよ？

あっはっは、鈷真子ちゃんたらやだなあ。

わざわざ語尾までまともっぽくして、ナニ奇態なコトを言ってやがりますのでしょうか。

「・・・み、みらのちゃ——」

「ひ、ひっ」

怯えられた。

話しかけた途端、すんごく後退りされた。

心の距離が大変なことに！！

「・・・おのれ鈷真子」

今回の一件、俺は間違いなくなにもしていないし悪くない。

俺がナニをした・・・？

いやまあ確かに鈷真子と二人っきりのとき、何度も危ない一線を越えかけた俺ではあるが、未だなにひとつ疚やましい行為には及んでないぞ俺！

とりあえず誤解を誘ったことは事実なので、帰ってきたら有無を言わずとつちめる。

たぶん返り討ちだけどとつちめる。

心に決めた俺が、ナゼか溢れる涙を拭おうとハンカティーフを取り出したその瞬間。

ドバンと部室の扉が開かれて、鉦真子が顔だけひよいと覗かせる。

「今の、軽い冗談なのだ」

それだけ申し上げると、鉦真子さまは顔を引っ込めて、今度こそ本当に去った様子でした。

開けた勢いで開かれたままの、部室の扉の向こう側から軽快な足音が響く中。

「・・・みらのちゃん。今の、聞いてたヨネ？」

「・・・・・・・・ご、・・・・・・・・ごめんなさい、奈雅座先輩・・・」

真っ赤になって、心の距離を定位置に戻した様子のみらのちゃん。

俺の心の傷は、元には戻らない様子だった。

「鉦真子、あとでとつちめような」

「そうですね、奈雅座せんぱい」

とりあえず俺たちの意見は一致した。いやまあ当たり前なんだけど。鉛真子をあとでとつちめるのは既に決定事項とはいえ、我らが部長どのが帰還するまでの間に、こちらでも行動を起こさなくてはマズイマズイ。

なにしろ部長どのは怠慢を許さない。

貴重な時間を浪費してなにも収穫がなかったと知れたら、俺はきつと縛られる。縛られて鞭で叩かれる。

いや、鞭で済めば僥倖である。下手をすれば屋上から全裸で吊るされるかもしれない。

「というワケで行こうかみらのちゃん」

「どういうワケかはよく判りませんが、時間を無駄にしちゃいけませんよね」

みらのちゃんは頷いて、自分の鞆を手にとって、それから振り向いて俺に問いかける。

「ところで奈雅座先輩。何処に行くかは判ってますよね？」

何気ない口調で発された、そのあまりにも俺をおちよくってると思えない台詞に、俺は少しだけムツとする。少しだけ。だって後輩相手にムキになるなんて大人気ないよ？

「馬鹿にしてもらっちゃあ困るな、みらのさん。こう見えても俺は

麻七菜鈷真子という暴君の下で働いてきた、言うなれば歴戦の古強者なのである。その程度のこと判らなくて、どうしてあの部長どのに付いていけようか」

そんな頼もしい俺の言葉を聞いて、安心したようににっこりと笑うみらのちゃん。

でも、少し待って。

「・・・そんな大口叩いておいて悪いんだけど、俺ホントはその折紙記念病院って何処にあるのか知らないのです。・・・です。」

なんとも情けない事実をカミングアウトする俺を見て、みらのちゃんはあるもう奈雅座せんぱいしたら仕様がないなー、みたいな表情で曖昧に苦笑して、俺の手元にナニカの本を押し付ける。

それはどうやら紙津町しのみちの地図のようだった。

「はい、せんぱい。ちゃんと印は付けておきましたので、それで確認してください」

「・・・さんきゅ、みらのちゃん」

シヨボンと小さくなって震える俺。だって敵いませんよ？

用意がいいというか、周到すぎて眼からトウガラシが溢れそうだというか、慣れてて怖いというか。

俺先輩なのにー。学生としてもまろん倶楽部の部員としても先輩なのにー。

人間としてだって先輩のハズなのにー！

がつくりと項垂れる俺を励ますように、みらのちゃんは魔法の言葉を紡ぎだした。

「頼りにしますよ、せんぱい」

「まっかせてくれたまへ、後輩ちゃん！」

咄嗟にそう返してしまった俺なのですが、サテ一体ナニを頼りにされているのか？

一瞬よぎった怪訝な思いが顔に出ていたのだろう、少し恥ずかしそうな顔で、みらのちゃんは告白する。

「あの、ですね・・・実は、わたしも折紙記念病院には行ったことないんです。行きつけの小さな診療所があるもので・・・それで、ですね。実はわたし、方向音痴で」

先導よろしくお願いします、と言って、ぴよこんと頭を下げるみらのさん。

やっべえよ・・・？可愛いよこの子・・・？なにそれ、俺に喧嘩売ってんの・・・？

「・・・任せてよ？俺ときたら、方向感覚に関しては鉦真子のお墨付きがあるぐらいなんだぜ？」

「そうなんですか・・・・・・ところで奈雅座先輩、鼻血出てます

よ」

慌てて袖で鼻の下をごしごし拭う。

拭いきれずに広がってヒドいことに！

「・・・あの、先輩？スプラッタなんですけど」

「うん、判ってる、みらのちゃん」

とりあえず、手近なところに落ちている謎に満ち溢れたティッシュを鼻に詰めておく。

どんな謎が溢れているのか想像するのは怖いので、詳しい描写はしたくないのだが。

出血を抑えひとまず体裁を繕った俺は、胸に紙津町MAPを掻き抱き、鼻に丸めたティッシュを詰め込んだ漢気溢れる姿で気合を入れる。

「よし！それじゃあ出発するぜ！！」

「はい、出発です、先輩！任せましたっ」

なんとも嬉しいことにみらのちゃんも俺に合わせてくれたっぽい。やべえ惚れそう。

鉛真子にはない優しい気遣いに俺はもうメロメロだぜ！ヒヤッホウ！！

可愛い後輩と出かけるという事実の前に、俺のテンションは無意味なほどに急上昇！

OK、俺はとりあえず無様を晒さないように気を付けて行動することにしよう。

だって後輩可愛いもん。

「・・・で、病院なワケですが」

誰に聞かせるでもなく呟いた俺の目の前には、そびえるというよりはそそり立つ、という表現の方がしっくりきそうな建物が、どでんと腰を据えて待ち構えていたのだった。

これぞ我らが紙津町の誇る超巨大医療施設、折紙記念病院！

ナニが折紙の記念なのかはよく覚えてない（確か創設者の名前だったけ？）んだけど、それでもこの病院がこの町で一番大きくて、一番確かな設備と、一番正確な腕を誇る医師たちの揃ったステキ空間なのは、紙津町に住むモノなら誰であろうと知っていることである。

ただし値段はかなり割高。

ぶっちゃけ庶民の俺たちには、なんと通常の四割程度も高い金額を払ってまで、いい設備といい医者にかかる余裕なんぞないのである。

「はぁ・・・おっきいですね、先輩」

みらのちゃんも感嘆したように、急なスロープを描いて天を衝く、人間の^{ヒト}手になる巨大な建造物を眺めている。

俺は正直なところ、感心感嘆感激する以前に、そもそもこれだけの施設を見せ付けられて、もうすっかり萎縮してしまっているといっても過言ではない。

貧乏人は近寄るなオーラがムンムンと立ち込めているのが判っちゃうのである、コレが。

やべえ場違いだわ、俺たち。

「・・・うーん、どうしようか、みらのちゃん」

「えっと・・・やっぱり入るしかないんじゃないでしょうか、せんばい」

ですよねえ。

ぶっちゃけこのまま帰りたい気分が無茶苦茶あったのではあるけれど、それを実行しようものなら、俺は縛られて鞭で打たれて裸で吊るされるだけでは済むまい。

きつとそのまま俺は、男としての尊厳まで掘られてしまうに相違ない。

なにしろ、最近聞いた鈷真子の怖い台詞のベスト一位に輝くあの言葉。

『・・・うーん。どうか本物の絡みを見てみたいのだ。誰かいな
いかにゃー、絡みOKな男』

明らかにポーツとした様子だったし、おまけに空を見ながらの発言
でありました。

ぶっちゃけ本気^{マジ}だろ、アレ。

・・・というワケで、必要以上に鈷真子の気に障るようなことをし
てしまえば、俺がその生贄^{スケープゴート}の山羊になることは疑いようもないこと
なのでありました。

まあ、今のところ俺の周囲にホモという恐ろしい存在は見当たらな
いことだし、すぐに、という心配だけはなさそうだったのだが。

とはいえ、執念深い鈷真子を怒らせて、好条件が揃った瞬間掘られ
てしまったては堪らない。

「・・・、・・・ッ、・・・・ッッッ!!!」

「ど、どうしたんですか奈雅座せんばいっ!?! いきなり身悶えし始
めてっ・・・!?!」

血相を変えて俺を揺さぶるみらのちゃん。やべえ想像したら死にた
くなったよ俺。

「・・・あ、ああ・・・な、なんでもないんだ・・・なんでも・・・
・・・」

みらのちゃんに答えつつ、別にまだ掘られると決まったワケじゃな

い、と心の中で言い聞かせる。

鉛真子マジ怖え。^{こえ}

「大丈夫そうには見えませんが、先輩？それにナニを掘られるんですか？」

「……………」

なんか、その。みらのちゃんが、

「…………エスパー？みらのちゃん超絶エスパー？」

「いえ、あの、先輩？さっきから掘られる、掘られない、って繰り返してたんですけど」

「……………わーお」

呟いて、頭を抱えてしゃがみこむ。後輩にすっげえ無様を晒しちゃったよ俺！

「…………逝こうか、みらのちゃん」

とりあえず地獄へ。

「はい、行きましょう奈雅座せんぱい。…………でも本当に大丈夫ですか？」

「OK OK僕元氣。だってもうナニが起こっても恥ずかしくないぞ、俺」

自嘲するようなクロい笑顔を浮かべて、俺は死人のように歩き出す。
とりあえず病室行ったら入院してるヤツに一言文句を言ってやらね
ーと気が済まねー。

なんでアンタ金持ち病院に入院してんだよ！この富裕階級め！！
ブルジョワジイ

死人のように歩く。歩く。歩く。

病院のナカには死のニオイが溢れており、其処はさながら、生きた
まま腐敗する緩やかな死の苗床。

何処の病院でも変わらない。何処の病院でも、常に溢れた瘴気が大^エ
ア気を汚して混濁する。

病院の外とて清浄とはほど遠く、それよりもなお昏いこの空間は、
既に何処かの地獄ではあるまいか。
イズコ

・・・などとワケの判らん躁言を呟きながら、いつか誰かが朽ちて
いったのを思い出す。

それは確か、祖母の見舞いに訪れたとき、幼かった俺が何処かの病
室で聞いた言葉だった。

今の俺と同じくらいの年頃だった癖に、妙に重苦しい響きを漂わせ
る、その口調を覚えている。

「……幼子よ、覚えておけ。わたしたち人間はこんなにも、簡単に生存競争を
終すてえられる——。」

それだけ言って、その誰かさんは動かなくなった。

あんまり彼が動かないから、俺は祖母の枕元にあったのと同じ、救おいし
いやさんを呼ぶためのナースコールを押したのだった。

ナースコールを押して。怖くなった俺が祖母の病室に戻ったとき、

でいた。

祖母はもう死ん

「……せんぱい？大丈夫ですか……？」

不安そうな声が、不意に背後からかった。

「ん、あ——うん、平気、だいじょぶ」

なるだけ軽い口調で返してから、俺は心の中で溜息を吐いた。

あー……みらのちゃんに心配されるぐらい、元気ないように見えるのか、俺。

これだから病院は嫌いなんだ。

病院のニオイを嗅ぐと、どうしてもあのときのことを思い出す。

どうしようもなくブルーになる、初めてヒトの死に触れたときのこと。

「・・・っと、着いたみたいだ」

一階受付のおねーさん（美人だった）から聞いた、目的の彼の病室である。

ちらりと後ろを振り返ると、みらのちゃんはどうも、まだ俺の心配をしているらしい。

かなり心細そうな眼で、俺のことを見つめている。

「・・・悪い、みらのちゃん。俺、実は病院が苦手なんだよね」

特にこういう病室棟。だって思い出しちゃうから。

「そんな・・・どうして麻七菜先輩は、」

俺の言葉が足りなかったらしく、少し険しい表情になったみらのちゃんに、軽く笑いかける。

「いや、実はこのこと、鮎真子も知らない。ネタばらししたのは、みらのちゃんが初」

それを聞いて、みらのちゃんはきょとんとして、不思議そうに首を

傾げる。

「・・・どうして言わないんですか？ 苦手だっていうこと知っているなら、麻七菜先輩だって無理には・・・」

「そりゃ無理は言わねえでしょうが。・・・あんま、あいつにそういう情けないところ、見せたくないんだよな」

まあ、惚れた男なりの見栄というもので。

とつくに情けない部分なぞ見尽くされているのだろうけれど、それでもやっぱり見栄は見栄。

それに、あんまり俺が情けなすぎると、鈷真子も俺に愛想尽かしちまうかもしれないし。

そんな俺のことを、みらのちゃんは複雑そうな表情で眺めたあと、

「・・・それじゃあ、さっさと用事を済ませて帰りましょう、せんぱい」

そう言って、ぽにゃつと柔らかな笑顔を浮かべた。

「おっけー、それじゃあ突撃取材でGOだな」

ぽにゃにゃんスマイルでめっさ癒された俺は、躊躇うことなく病室のドアをノックする。

こうなりや俺だってさっさと帰りたいのである。癒されただけに余計。

ノックした扉の向こうから、ほとんど間を置かずに返答があった。

「うむ、入りたまえ」

・・・・・・・・。なんというか、鉛真子より偉そうな声だった。

しかもよく見てみれば、生意気にも個室だった。このぶるじょわめい。

まあ、そんな俺の個人的な感情はさておき、許可は出たので入室することにする。

みらのちゃんに頷いてみせてから、俺は深呼吸して、病室の扉を開いた。

「ちーっす、まろん倶楽部でーっす。今日は突撃☆取材を敢行しに来ましたイエーイ」

病室に入ると、ソコには二人の人間が無言で（つまり俺の挨拶はスルー）居座っていた。

一人はベッドの上、右腕を包帯でぐるぐる巻きにして、首から吊っているという如何にも見た目からして判りやすい怪我人ルックの、エライ威厳のありそうなお兄さん。

もう一人はその隣、ベッドの脇にパイプ椅子を寄せて座っていたらしい、エラく高圧的な面持ちのお兄さん。

「・・・・来たか、まろん倶楽部」

そのうちの一人、ベッドに半身を起こしてどっしりと構えた、怪我人ルックのお兄さんが重々しい声でそう呟いた。

「あー、来ましたまろん倶楽部。というワケで、アンタが蘇芳竜胆すおうりんじ？」

相手が年上の男だったこともあって、ちよいぞんざいになってしまった俺の態度が気に障ったのだろう、パイプ椅子のお兄さんが血相を変えて立ち上がる。

「貴様！ 会長に向かってその態度は……！」

「いい。君は下がっていたまえ、とろい瀬居君」

軽く腕を上げて怪我人ルックのお兄さんが制すると、怒ったパイプ
お兄さんは軽く頷いて椅子に戻った。

なんだこれ・・・主従関係築いてねえ？

そんなことを考えていると、後ろからみらのちゃんがか必死にツンツンと背中をつついてくる。くすぐりたい。すぐく。

「うは、
うははははははははははは」

思わず笑ってしまった。ピンチ。俺睨まれてる。

(ていうかどうしたのかなみらのさん?)

少しだけ顔を後ろに振り向けて、小声で訊ねる俺。

ソレに対して、みらのさんは珍しく慌てた様子で、なんだか真剣な表情で訴えかけてきた。

（あのですね奈雅座先輩？あの二人、聖^{うち}マリア学院の生徒会長と副会長なんですけどっ）

（げ。そうだっけ、ごめんねみらのちゃん。すっかりすっかり忘れてた）

（駄目じゃないですかっ！先輩なんですからそのぐらい覚えててくださいっ）

そういうお叱りはとりあえずあとでじっくり聞かせてもらうとして、今はとりあえずこの険悪なムードをどうにかしなきゃ。いそいそ。

「あー、えーと。すんげえ失礼しました、かいちよー」

呼び捨てはいけないッスよねえあははは、とか笑っていると、パイお兄さんがかなりキてる表情を閃かせる。やべえ謝ったつもりが墓穴だよ俺。

「呼び捨ては構わん。それが君の流儀^{スタイル}だろう。だが・・・どうして突然笑ったのだね？」

「あー。それは・・・」

本当のことを言いかけて、俺は少し迷う。

後ろから後輩にエライ勢いでつつかれたからです、などと答えて、

本当によいものか？

だって後輩に罪を着せるみたいじゃん、それ。

可愛い後輩に罪を着せるなど以ての外の俺は、とりあえず適当な理由をでっち上げることにする。

「えーと、うーと、その・・・ああ、其処のパイプ兄さんの顔が面白かったんで、つい」

言った瞬間後悔する俺。だってパイプお兄さん、殺気出てる殺気。

「いえごめんなさい今の嘘です。実はツスね、俺の後ろに憑いている背後霊のアンドレイさんが、急に『まんじゅうこわい』を朗読し始めまして」

「ふむ、今度はお茶が一杯怖い、と？」

「そうです。いやあ怪我人ルックのお兄さんは話が判る」

あっはっは、などと一人で呵呵大笑していると、パイプお兄さんがいきなりキレた。

「いい加減にしろ、この害虫がッ！！我々を愚弄するために来たのか貴様！」

それに対して慌てて言い返そうとした俺の前に、俺の脇を擦り抜けるようにみらのちゃんが現れる。

「申し訳ありません蘇芳竜胆会長に瀨居木馬副会長！うちの先輩は

ちょっと会話が苦手なんです！悪気はなかったんです、どうか許してあげてくださいっ」

早口にそう叫ぶなり、頭をバツと下げるみらのちゃん。

やべえ、後輩にばかりこういう真似をさせちまったら先輩失格じやん。

慌てて俺も深々と頭を下げて、とりあえずの謝罪を示してみせる。

「・・・うむ、話は判った。とりあえず二人とも、頭を上げたまえ」

重々しい声でそう言われて、俺とみらのちゃんは同時に頭を上げる。

パイプお兄さんはまだ腹の虫を据え兼ねている様子だったが、怪我人ルックのお兄さんはどうやら平静らしかった。・・・なんか本気で大物っぽいなー、とか思っただのは内緒。

「さて、先ほどの質問に対する答えをまだ聞かせていなかったな。・・・如何にも、私が蘇芳竜胆だ」

俺の眼をじつくりと見据えて、きっぱりと、怪我人ルックのお兄さんはそう言った。

「そしてこちらが、私のよき補佐である、瀬居木馬だ」

傍らのパイプお兄さんを示して、蘇芳会長はそう紹介する。

「君たちは部員の奈雅座由有多と、幸守みらののご両人で間違いないかね？」

「間違いないッス。・・・あー。すげえ、俺ちょっと感心しちゃいました、マジで」

会長の態度もそうだけれど、どちらかというと副会長の名前で。

トロイの木馬じゃん、その名前。

「ふむ、何に対して感心したのかね」

「え、いやそりゃ名前・・・じゃなくて、蘇芳会長の堂々とした実に立派な態度というか」

「そうか、君の意見は参考にしておこう」

重々しくそう呟き頷いて、それから蘇芳会長はぎらりと鋭い眼光を閃かせ、俺を見る。

「・・・それで。まろん倶楽部のご両人が、私になにを聞きに来たのかね？」

「えーと、ちょっと聞きたいんですけど、その腕――どうしたんですか？」

軽く牽制のつもりでそう言うと、蘇芳会長は愉快そうに少しだけ口元を緩めた。

「・・・腹の探り合いは性分ではないようだな、奈雅座君」

そりゃまあ、手っ取り早く済むならそれに越したことはないってい

うのは確かですが。

声には出さないその言葉を、蘇芳会長は理解した様子で、真面目な顔で頷いた。

「・・・いいだろう。これは私にとっても渡りに船。ありのまま起こったことを、話そう」

「それじゃあ、その腕はやっぱり——？」

俺のその言葉に、蘇芳会長は僅かに自嘲するような笑顔を浮かべ、

「つい最近までは——正直なところ、君たちまろん倶楽部が、どうしてクラブ活動として成立していたのか、疑問に思っていたのだが」

其処で一旦言葉を切り、自分の包帯に包まれた腕に視線を落とすと、重々しい声で呟く。

「・・・なるほど判ったのだ。あれは、只事ではないと。ただの間などに、起こせる類ではなかったということが」

腕の、傷。噂話の中に出てくる、現実かどうかとも判らないあやふやな襲撃者。

「アレと対峙すれば否応もなく理解する。形は確かに人間だったが、アレを人間だなどと。そんな性質の悪い冗談は、夢の中だけで沢山だ」

「・・・襲われたんスね、蘇芳会長」

「如何にも。まさしく噂通り、槍を掲げて鎧を着込んだナニカに襲われ、私はこの腕を貫かれた」

そう言いながら、蘇芳会長は包帯を巻いた右腕を、軽く自分の掌で摩さすっている。

「小石に脚を取られたことが却って良かったのだろうか。・・・幸い、槍は筋肉で止まって、骨や神経には影響がないそうだ」

それは本当に幸いなことだと、俺も素直にそう思ったので、心の底から、よかったですね、と言ってみる。

蘇芳会長は厳しかった表情を僅かに和らげて、ありがとう、と返してきた。

あー、なんていうのかなあ、こういうの・・・

「・・・君たちに頼みたい。まろん倶楽部がこういった不思議を探求しその実害を防ぐためのクラブなら。また誰か被害者が出る前に、アレを」

どうか解決して欲しい。そう言って、蘇芳会長は頭を下げた。

あー、もう。なんていうのかなあ、ホントに。

珍しく俺も、やる気になっちまってるじゃねえかよ。

「・・・いいツスよ。俺たちが、なんとかします」

そんな俺の言葉を受けて、蘇芳会長は満足そうに頷いた。

其処で、俺はふと気になったことを訊ねてみる。

「えーっと会長。ちょい聞きたいんですけど、まろん倶楽部が不思議を探求しその実害を防ぐためのクラブならって・・・誰から聞いたんスか？」

確か俺の記憶では、まろん倶楽部の公式活動内容って、不思議なことを調査する、だけだったような。

確かに実害を防ぐため今まで色々してきたけど、何処からそんな情報が出たのやら。

「・・・誰から、とはまた奇妙なことを聞く。まろん倶楽部の部長である麻七菜君から、公式にそういう活動をするものと提出されている」

「・・・うわ、マジですか」

俺知らなかったんですけど。

俺知らなかったんですけどー！

「しかしながら・・・確かに妙なことなのだが、生徒の方にはどうしてか、不思議なものを探すというだけの活動内容として認識されている節があるのも事実だ。部員であるとはいえ、君も一般の生徒である以上、知らないとしても無理はないと思うが」

「・・・やー、なんか隠し事されてたみたいでちょいショックです

よ正直？」

ちょっと悄然。頑張れ俺。

「あー、とりあえずもうひとつ。蘇芳会長は、何処で襲われたんスか」

「街外れの近衛橋このえの辺りだ。橋付近に住んでいる生徒から、生徒会にいくつかの情報が寄せられてな。・・・愚かにもそれを自分でどうにかしようと、出向いていった」

だが、と言葉を切って、蘇芳会長は僅かに目を伏せ自分の右腕をギョツと握り締めた。

「・・・考えが、甘かったということだ。私は最初、噂話など尾ひれのついた与太話の類だと、そう思っていた。恐らく本当は変質者かナニカではないかと、な」

そう思っ行ってみれば、噂話と全く違わぬ槍ストレインジャーに襲われたということですかそうですか。

まあ、そんな恐ろしい目に遭ったのなら、そりゃあまろん倶楽部ウチにすがりたくなっても仕様がないうかなんというか。

「・・・アレを見たとき、私は自分がおかしくなったのかと思った。人間のカタチをしていたにも関わらず、私の目には、・・・アレが人間ヒトには、どうしても見えなかったのだから」

うーん、正直そう言われてもあんまりよく判んないけれど。

あれか？前に退治したあの、薄気味悪い動く人形を見たときのよう
な気分なんだろうか。

「私は逃げ出したよ、振り返りもせず。もしもあのとき振り返って
いたなら、私は怪我だけで済んだかどうか、自信がないほどに・・・
本当に恐ろしかったのだ」

その気持ちに関しては理解できる。怪異とはそういうモノだ。

俺だって鈷真子と一緒に色々してきて、どれだけ怖かったか。

「・・・話は判りました、蘇芳会長。その危険ブツを、なんとかす
りゃいいんでしょう？」

「そう、だな。そういうことに――なる」

何故か歯切れ悪く、蘇芳会長は目を伏せがちにして、肯定の意を俺
たちに示した。

一瞬ナンデダロ、とか思いかけて、ああなるほど、と納得する。

どうもこのヒトは、本当に真面目な人らしいから、きっと。

自分の代わりに危険な目に遭う俺たちのことを、案じているのだ。

申し訳なくも思っているのかもしれない。まあそれはいいんだけど。

どの道、誰かがやらなければいけないコト。

あんまり気にしたって始まらないし、気にされたからって俺たちの

危険がなくなるワケでもなければ、鈷真子が行動の理由を失うワケでもない。

「まあ安心してください、生徒会長。ウチの部長^{……}どのは、無敵ツスから」

とりあえず営業スマイルスマイル。だって安心させとかなないと健康に悪いからね。

「・・・任せる、まろん倶楽部。君たちも充分に気を付けたまえ・・・」

「あいよ了解、それじゃあ俺たちこれにてお暇しますんで、あとはお二人でごゆっくり」

軽くひょいっと一礼して、さっさとこの不愉快な病院から脱出しようと振り向きかけて、

「あにゃうんっ」

後ろに立っていたみらのちゃんの可愛いお鼻に俺の肘がノックノック！

みらのちゃん鼻血ブー。焦る俺、そして固まる会長ズ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・みらのちゃん。今のは不可抗力だったと、最初に言っておく。でもあれだね、やってしまったのはマジ俺だし。・・・えっと、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げる俺。

それに気付かないみたいに、たらたらとこぼれる鼻血を掌で受けて、呆然と立ち尽くすみらのさん。

あー。こりゃ嫌われたなあ、間違いなく。

まあ嫌われるのは仕様がないうらいのことをしてしまった自覚はあったので、俺はとりあえず動かないみらのさんに代わって応急処置を施すことにする。

ティツシュ、掴む。丸める。鼻突っ込む。

ティツシュ、掴む。丸める。鼻突っ込む。

これでOK完璧さ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

みらのちゃんは無言だった。

無言のまま、血まみれになった手を拭いて、病室の扉を開き、すたすたと去っていった。

睨まれることぐらい覚悟してたけど、睨むどころか存在自体を無視されたんですけど。

予定外。オー、予想外。

「・・・・・・・・蘇芳かいちょー。今のってやっぱり――」

「うむ、君が悪い」

「・・・そッスよねえ」

とりあえずアレだな。病院出たら少し寄り道して、なにかお詫びの品でも買っていこう。

「ええと、蘇芳会長。女の子はナニをもらったら喜びますか」

「残念ながら、私に助言できることはなにもない。君がどうにかしたまえ。」

「それじゃあトロイの木馬副会長。なんかないスカ」

とりあえず話しかけてみたけれど、なんか殺気の籠った眼で恨めしく睨まれただけだった。

ていうか正式名称なんだっけ？このトロイの木馬副会長。

そんなこんなで戻ってきました部室の前。

ちなみにみらのちゃんへのお詫びの品は、とりあえずファンシーな飾りの付いたくまちゃん人形であります。税込み3150円也。超^{たけ}高え。

「ハロー戻りました！みらのさんごめんなさい、これはお詫びの印ですっ！」

叫びながらまたんを目の前に突き出す俺。

「ハロー戻りました！みらのさんごめんなさい、これはお詫びの印ですっ！」

もう一度叫びながらまたんを目の前に突き出す俺。

予行演習だった。

だってぶっつけ本番でこんな怖いことできないって、マジ本^{ホント}当。

でもまあ二回も予行演習したら少し気分も落ち着いたし、とりあえず当たって碎けてデストロイ！

俺は躊躇もなにもないような勢いで、部室の扉を盛大に開く。

そして間髪いれずに本番開始！！

「ハロー戻りました！みらのさんごめんなさい、これはお詫びの印ですっ！」

叫びながらまたんを目の前に突き出す俺。

「はにゅわぷっ！？」

そして目の前のナニカに激突してタイヘンなコトになるくまたん。やべえくまたん絶賛頭蓋骨陥没中だよ。

そんな埒のないことを考えている俺の目の前で、頭蓋骨陥没で重態

のくまたんに濃厚なディープキスを交わされていた麻七菜^{……}鉛真子^{……}さんがぼったりと仰向けにぶっ倒れる。

・・・鉛真子さんだったんだそうだったんだ。くまたん羨ましィー。
ンな馬鹿なことを考えている余裕があったらさっさと逃げるべきだったんだけど、其処はこの俺奈雅座由有多。

わあお鉛真子さんスカートの中見えちゃっつて、

・・・あたまいたい。ナニがあつたのか明確に覚えているだけに余計痛い。

今回特別痛いのは顎なので、きっと下から掬^{すく}い上げるような綺麗な半月形で意識を刈り取られてノックアウト。

俺はとりあえず載せられていたテーブルの上にむっくりと起き上がる。

と、なにかがズウルリと頭から垂れ下がってきて、目の前にぶら下がる。正直ホラー。

「・・・タオル、かな？」

気付けばそれは濡れタオル。どうやら頭を冷却するために載せられていたっばい。

「・・・大丈夫でしたか、奈雅座せんぱい」

未だぼんにやりした俺に、横合いからかけられるぽにゃにゃんヴォイス。

「あれ・・・みらのちゃ・・・、」

現時点を以て漸く覚醒する俺の脳細胞。もちろん同時にフル回転。

「・・・みらのちゃん、さっきはマジごめん。悪かった。本当に悪かった」

なにはなくともまず謝罪。それから漸く彼女の顔を確認する。

少し鼻が赤くなっていて、まだ拗ねたような表情はしていたけれど。

幸守みらのは、無言で絞ったタオルを渡してくれた。

「・・・ありがと、みらのちゃん」

「とりあえず、ですけど。さっきのことは許してあげちゃいます」
ちゃんと謝ってくれましたし、と呟いて、みらのちゃんは笑った。

「それに、あのお人形さん、わたしに買ってくれたんですよね？せんぱい。」

「う、うん。みらのさんに大統領^{プレゼント}。大事にしてね」

「そうですね、こんな可愛いお人形さんをもらっておいて、許さな

いワケにはいきませんよ、せんぱい。・・・ちやあんと大事にしますので、その辺りは安心してください」

ぽにゃんと笑って、そんな可愛いことを言ってくれちゃう、可愛すぎる後輩ちゃん。

其処でふと気付く。そういやくまちゃん頭蓋骨陥没でタイヘンだった。

頭蓋骨を陥没させちゃった原因といたら・・・？

其処まで考えたとき、パソコンの方から声かけられた。

「さて、ユータ？気が付いてみらのちゃんと仲直りするのはいいのだ。ユータが悪いのは一目瞭然。・・・でもお、ユータ？仲直りするために、鈷真子の顔を張り倒したコト、まさか忘れていたりは——しないのだ、ね？」

耳から脳髄を残さず余さず蕩かしてしまいそうに、甘くて甘い毒の声。

その声だけでバッチリ理解。うん、鈷真子はすっげえ根に持ってる。

「いやあのですね、鈷真子さん？あれは不可抗力というかなんというか・・・」

慌ててしどろもどろの言い訳を始めた俺に向けて、蕩けそうな甘い笑みを浮かべる鈷真子ちゃん。やべえ怖いんですけど。

「うん、確かにあれは不可抗力なのだ。部室の外で怪しげな発声練

習をしていたから、と、不用意に近付いていった鉦真子も悪いのだ。
「……でもお、ユータ？それでも、女の子の顔を攻撃したりしていいと、本当に……思ってる？」

にこやかに笑いながら、鉦真子がもう一度、念を押すようにそう訊ねてくる。

救いを求めるようにみらのちゃんを見たけれど、みらのちゃんは既に俺のプレゼントしたくまちゃんと戯れながらニコニコしていた。
やべえみらのちゃんまだ怒ってる。

救いを得られないことだけは本当の本当に確実に確定したので、俺は伝家の宝刀、ひたすら謝るのスキルを発動した！

「ごめんなさいマジごめんなさい。マジでホントにごめんなさい。死ぬほどごめんなさい。ていうかほんツとオオオオオオにすんませんツしたアアアアアアアアアア！」

へこへこ頭を下げながらごめんなさい、ごめんなさい、生きててすみません、生まれてきてすみませんと繰り返す。

鉦真子と言えば、ニコニコ笑いながら、そんな俺の無様な姿を眺めている。

「……それじゃあユータ、今度鉦真子にもお詫びの品をプレゼントトして欲しいのだ。今回のことは、それで帳消しにしてあげるのだ」
につこり笑って判決保留。とりあえず今のところの命はつなぎました俺。

「はい、今度なんか買ってきます。だから許してください鉛真子さん！」

悲鳴のような声でそう泣くと、鉛真子は今までの恐ろしい態度をころっと急変させて、

「うんっ、それじゃあお互いの成果を発表しあうことにするのだ！それじゃあまずはユータとみらのちゃんの方から！」

いつも通りの、暴君モードの鉛真子に戻っていた。

・・・暴君モードで安らぎを覚える瞬間ってイヤだなあ。

そんなことをつらつらと考えつつ、また機嫌を損ねないうちに報告報告。

「ふむ、噂は全くの事実、と」

俺とみらのちゃんの説明を聞き終えた鉛真子が、少しばかり楽しそうな顔で呟いた。

「おまけに場所も特定できたのだ。近衛橋といったら、ほとんど街外れ——つまり、森に近いということになるのだ」

満足そうに頷いて、鉛真子はほんのりと微笑んだ。

可愛いなあ鉛真子、もう抱きしめちゃいたいぐらい。やんないけどね？蹴られるから。

まあ、それはさておき、鈷真子が笑ったのは、つまり——森の方でも収穫があったということか。

考えてみれば、確かに近衛橋というのは森に近いのである。

なにしろ紙津町の東を流れる機織川はたおりに架かる七つの橋の一番北側、山と平地の境目ギリギリに架かっている橋なのである。

距離に換算すると僅か100m程度しか山と離れていない辺り、なんか設計ミスなんじゃねえのかよとか言いたくなる。どうでもいいけど。

「鈷真子、そっちでなにか収穫あったのか？随分と嬉しそうだけどさ」

判り切ったことを俺が確認のために訊ねると、鈷真子は一層嬉しそうににんまりと笑って、

「うん、収穫はあったと思うのだ。まずひとつに——こちらも噂は真実。山と平地の境目近くに、獣の屍骸がゴロゴロ転がっているのを確認してきたのだ」

そう言いながら、超小型デジタルカメラ“まめつぶメモリアル”（商品名）をパソコンへと接続する鈷真子。

「はい、現場の写真」

言いつつ、画像を展開する鈷真子。食い入るように覗き込む俺とみらのちゃん。すし詰め。

「・・・うわあ」

当たり前といったらこの上なく当たり前なのだけれど。

写真に収められていたのは、割と結構眼を覆いたくなるような無残な屍骸のオンパレードだった。

獣だから幾分かはマシとはいえ、正直見ている気分がいいものではないことは間違いない。

「きゃ。こんなにたくさん——」

俺の隣で画面を覗き込んでいたみらのちゃんも、少しばかり顔色が悪かった。

そりゃあ無理もない。なにしろ鉛真子ときたら——質も量も半端じゃない。

手抜きは一切ナシのグロ画像を、デジカメいっぱいに取り込んできてやがったのだから。

「わお、こいつなんて槍で刺されてんのに首グラグラじゃん。どんだけ突けばこうなるんだ、コレ」

「それですけど、こっちの犬はどうなんでしょう。内臓が飛び出してますよ・・・」

薄気味悪そうに呟くみらのちゃん。顔色が白いのは気の所為じゃないよね。

そうして屍骸の画像をしげしげと俺たちが眺める中、鈷真子が軽く咳払いして、新たに言葉を紡ぐ。

「もうひとつの発見というか収穫は、正直なところかなりのバッドニュースなのだ。特にユータにとっては、もう洒落にならないレベルのバッドニュースなのだ」

「・・・鈷真子さん鈷真子さん。脅さないで、お願いだから脅さないで。マジ怖え」

当然というか当たり前というか鈷真子はガン無視。俺って一体。

「噂の“夜の襲撃者”なのだが——どうもひとりだけではないみたいなのだ」

少し難しそうな顔で呟く鈷真子。

それも無理もないことで、みらのちゃんは少し呆然とする程度だったのではあるが——

俺は。そうもいかないのだ。

「・・・マジか、鈷真子」

「大マジなのだ。鈷真子が見て回ってきたのは主に北側と東側の山なのだが——多すぎるのだ、あまりにも。あまりにも屍骸が多いのだ」

「いや、幾ら多いって言ってもさ。何日分もあるんじゃないかあねえのかよ？」

一枚の写真に写っている屍骸が平均三体ほどだから、数が多いというのは納得なのだが、流石に一日でコレということは無いのではないだろうか？という――

本当に儚い望みを込めてそう訊ねたが、鈷真子は黙って首を振る。

「屍骸の具合から考えて、死後三日程度までの屍骸を写真に収めてきたのだ。写真に納まっていない屍骸は、実はもつとたくさんあったのだ」

「・・・マジか」

「こんなつまらない嘘を吐いても意味がないのだ。ユータはそのぐらい、判っていると思っていたのだが？」

少し失望したような目付き。

・・・判っているとも。確かに俺は判っているとも、その程度。

だけどさ、それが事実なら――俺が何体も同時に相手取らないといけない可能性があるってコトじゃねえかよ。

少しぐらい現実逃避してもいいじゃん。

不貞腐れたように鈷真子を睨むと、鈷真子はくすつと笑って、

「うん、判ってるのだ、ユータ。あんまり積極的に認めたくない現実だというのも、また事実なのだ。確かにコレは――分が悪い」

笑顔の中に僅かな苦々しさを含めて、鈷真子はみらのちゃんを見る。

「さて、みらのちゃん。今の会話、ピンときたのだ？」

くりんと首をかしげて訊ねると、みらのちゃんは気まずそうな表情で応える。

「ええと・・・少し、ですけど」

自信のなさそうなその表情から察するに、実はほとんど理解していないとみた。

しかしながら鈷真子はニッコリきゅん！と笑って、みらのちゃんに話しかける。

「うん、少しで充分なのだ。・・・今回のみらのちゃんは、ユータのバックアップとして行動してもらいたいのだが、そのときの注意をひとつ」

「注意、ですか・・・？」

「そう、注意なのだ。もしもユータやみらのちゃんに危ないことがあったら、迷わず撤退して欲しいのだ」

ニッコリ笑いながら妙なことを言う鈷真子。

俺の怪訝な思いがよっぽど顔に出ていたのか、意地の悪そうなにんまり顔で、鈷真子が俺を見返した。

「ふふ、ユータがナニを考えているのかは判るのだ。・・・でも、

「今回は違^{ちが}うのだ」

「違う・・・って、それじゃ今回俺はナニすりゃいいんだよ？」

「んーと、平たく言^いって囃^{エサ}役^{やく}なのだ。今回はいつもと違^{ちが}って、討^うち滅^めぼす必要^{ひつよう}は、たぶん必ずしもないのではないかと思うのだ」

「その根拠^{こんきょ}を聞^きかせてください鉛^{えん}真^ま子^こさん。もし鉛^{えん}真^ま子^こさんがミス^{ミス}ってたら俺^{おれ}たち死^しぬので」

しかも速攻^{そくこう}。神風特攻^{しんふうとくこう}もビク^{ビク}リな勢^{せい}いで死^しぬこと請^こけ合^あい。

怯^{おそ}える俺^{おれ}がよほど滑稽^{こげき}だったのか、鉛^{えん}真^ま子^こは声^{こゑ}を立ててキャッキャツと笑^{わら}う。ムカつくけど可愛^{かわい}いから許^{ゆる}してしま^{しま}う自分^{自分}が哀^{かな}しい。

「だーいじょうぶなのだ、ユータ。鉛^{えん}真^ま子^この言^いうことに間違^{まちが}いはほとんどないのだ、たぶん。氣^きにしてたらそれこそ負^まけなのだ」

「いや鉛^{えん}真^ま子^こさん？あのですね、不安^{ふあん}を煽^{おこ}るなんて鬼^{おに}かアクマかこの女狐^{メノキツ}！俺^{おれ}は怖^{こわ}いのできちんとした説^{せつ}明^{めい}プリーズと言^いっているんですコノヤロウ！」

「きゃん。怒^{いか}っちゃあーなのだ、ユータ。ちゃんと根拠^{こんきょ}はあるのだから」

可愛^{かわい}い声^{こゑ}できゃらきゃらと笑^{わら}いながら、鉛^{えん}真^ま子^こは俺^{おれ}の鎖^さ骨^{こつ}の上^{うへ}に指^さを這^はわせる。

モノ凄^{すご}くエロチックな動^{うご}きに、俺^{おれ}もみらのちゃんも迷^{まよ}わず赤面^{せつめん}レッツらゴー。

ていうか指這わせんな鈦真子！気持ちいいじゃねえかよ、かなり。

「は、あう・・・っ、エロいぞ鈦真子、く、うッ——」

「な、奈雅座せんぱい・・・なんてコト・・・!?!」

俺の喘ぎ顔を見てショックを受けた様子のみらのちゃん。ていうか見ないで。マジ恥ずい。

俺たち二人のそんな様子さえも楽しい様子で、鈦真子はうっとりと眼を細めて笑う。

「んっふっふ。ユータの顔がえっちなのだー。見ているだけで欲情しちゃうそうなのだ」

「バ、カ・・・ふざけんな、もう勘弁してください鈦真子さま、ブン殴るぞ・・・?!」

「おや。殴られちゃ困るから、もう止めとくのだ。にゅふふ」

笑いながら唐突に指を離す鈦真子。

あ、と思った瞬間にはもう遅い。

俺の表情を見た鈦真子が、再びいやらしく笑った。

「おやあ？ユータ、どうしてかモノ欲しそうな顔しちゃってるのだ。もしかして、もっとして欲しかったのかにゃ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そ、そんなこと、ないですよ？」

語尾がかすむ。かすんで消えないだけまだマシだけど。

そんな俺のことを、みらのちゃんがさっきから汚いモノを見る眼で見ているのはどうしてだろうとか考えてみる。

・・・理由は明白ですね、ハイ。

とりあえずこれ以上軽蔑されても敵わないので、俺は慌てて鈺真子に切り返す。

「そ、それはそうと鈺真子！根拠とやらを聞かせてもらおうか？おうおう！」

「わたしも聞かせて欲しいです、麻七菜せんぱい。奈雅座先輩のバックアップと言いましたけど、具体的にどうすればいいのかも聞きたいですね」

少し冷たい目付きで麻七菜鈺真子を睨みながら、みらのちゃんが言う。やべえ怖い。

いつものぼにゃにゃんはドコへ消えたのかと聞きたくなるほど怖かった。

みらのちゃんも怒らせないほうがよさそうです、ハイ。ていうか先輩なのに頭上がりそうにないんですけどコレ如何に。

鈺真子は一瞬だけ面倒くさそうな顔をして、観念したように根拠と

やらを話し始める。

「・・・根拠は、時機と位置、なのだ」

「時機と・・・位置イ？悪い鉦真子、正直判んない」

「・・・つまり、“夜の襲撃者”には、恐らく善悪の概念がそもそもないのではないか、ということなのだ。アレが護っているのは——境界だと、思うのだ」

後半の言葉は、俺たちに向けて言ったというよりは、自分で確認のために呟いたような言葉だった。

——その言葉。聞き逃せない点が、ふたつある。

「善悪の概念がなく・・・境界を護っている、だと？それって、どいう意味だ、鉦真子」

自分の中に生じた戸惑いを隠すこともなく、俺がそう訊ねると、鉦真子はさもそれが当然であるかのように、おかしなことを平然と言い放った。

「どいう意味って、そりゃあもちろんそのまんまの意味なのだ。——今噂になっている“夜の襲撃者”、アレは恐らく無差別にヒトを襲っているのではなく、もっと単純に、境界に近付くモノを撃退しているだけ、なのだ」

言っている意味はよく判らないのが正直なところ。

でも——、

鈦真子が確信を持っている以上、その結論はほぼ間違いないと考え
てもいいのだろう。

「・・・なに、もしかしてその結論の理由が、さっき言ってた時機
と位置ってヤツ？」

俺のその言葉を聞いた鈦真子が、久々になんの含みもなく純粹に嬉
しそうに、笑った。

「んふ。ユータはやっぱり呑み込みが早くて助かるのだ。――み
らのちゃんは知ってる？最近、工業地帯の拡張工事が行われていた
こと」

突然話を振られて、一瞬戸惑う様子のみらのちゃん。

だがしかし、流石は頼もしき期待のニューフェイス、戸惑いも一瞬、
すぐに平静を取り戻して鈦真子の問いかけに応える。

「あ、はい。工業地帯の敷地が狭くなってきたので、いっぱいにな
る前に山林を切り崩して、幾らか広げておこうっていう――」

「そう、その通りなのだ、みらのちゃん。・・・ちなみにユータは
知っていたのかにゃ？」

「・・・」

ごめんなさいね！どうせ俺バカだから知りませんでしたよ！！

俺の無言の意味を汲み取ったのだろう、鈦真子にはゆふふといやら

しく笑って、

「まあ最初から期待してないのだ。とにかくそういうものがあったということだけ、知っておいて欲しいのだ」

「・・・はい、ごめんなさい」

ちょっと沈んでレイニーブルー。俺の心は雨模様。

鈷真子さんに呆れられちゃった！かなりダメージでかいよー。

沈み込む俺の様子を見兼ねたのか、みらのちゃんが慌てて鈷真子に質問を投げかける。

「そ、その拡張工事ですか？それが今の話と、どんな関係が・・・？」

「・・・。蟻がフェロモンを辿って行進するって話、聞いたことあるかじゃ？」

また話が飛んだらしく、みらのちゃんは困ったような顔をして俺を見る。

「・・・いや、其処で見られても。俺だって判りませんよ？聞いたことないし。」

俺がてんで頼りにならないことを嫌でも悟ってしまったのだろう、諦めムードのみらのちゃんは、困惑した表情のまま、とりあえず鈷真子の質問に対する答えを返す。

「ええと……知ってます、けど。それが一体どういう——」

言いかけて。

幸守みらのは、なにかを悟ったように硬直した。

「……あれ？もしかして麻七菜先輩——そういう意味、ですか？」

拍子抜けしたようなその表情と台詞から察するに、それは酷く直截的なことだったらしい。

鉛真子もにんまり笑って、唐突にみらのちゃんに抱きついた。何故だ。

流石に三度目ともなると、みらのちゃんは咄嗟に自分の胸を両手でしっかりとガードして、わきわきとやらしく動く鮎真子の魔手から辛くも逃れることができた。

代わりにわき腹とか、うなじとか、おへその辺りとか、色々いぢられてゐるけれど、全身を強張らせて耐えるしかないみらのちゃん。だって手エ離したら絶対胸行くもん、鈷真子。

「うっふっふー。鈦真子はもう嬉しくて堪らないのだ。みらのちゃんとはかしい賢いいいコなのだ。鈦真子の言いたいことをばーっと判ってくれるのだー☆」

「あう、ひい、うひゃあ、わひい。きやふつ、ま、待つて待つて待つてください麻七菜先輩！あふつ、あんつ。そ、そんな触らないで——きやんつ」

・・・まあ、その、なんですか。えろえろですね・・・？

百合なんて滅多に見られる光景じゃないだけに、俺の興奮も結構ポルテージ上がりますのですよ？

そんな俺の視線に気が付いたのか、鈷真子がにたぁりといやらしく笑って、

「いやらしいのだ・・・。また鼻血が出ているのだ・・・ユータが不潔なのだ・・・。」

くっふっふ、とかなり本気で楽しそうに笑って、みらのちゃんを責め続ける鈷真子さん。

ていうか鈷真子にだけはいやらしいとか不潔とか言われたくねえー！

だがしかし、自分の鼻腔から溢れる温かな鮮血は現実なので、みらのちゃんに幻滅される前にふきふきしないとね。ふきふき。

・・・とりあえず俺が鼻血を拭き終わる頃には、みらのちゃんはすっかりぐったりしていて、鈷真子がココアシガレットを啜えてぷはー、とかやってる。中年オヤジかぁんた。

「んむ、堪能したところで、それではユータに質問なのだ。さっきの鈷真子の質問から、みらのちゃんが気付いた事実とは、一体なんでしょう？なのだ」

「・・・そりゃまた、随分と高いハードルで」

聡明なみらのちゃんがちょっと時間差で気付くような事実を、この俺に看破しろだなどと、鈷真子は実際面白いことを言っていると思うぞ正直。

過大評価が過ぎるというかなんというか。

「うーん。工業地帯の拡張工事と、蟻がフェロモンを辿って行進する・・・って、どう繋がるんだ、こりゃ」

思わず一人ごちる俺を、にまにまと笑いながら見つめている我らが部長どの。

やっぱりというかなんというか、その笑顔は本当に魅力的すぎて。

意地でも気付いてやりたくなるじゃねえかよ。

かなり気合が入った俺は、とりあえずもう一度鈷真子の発言を整理してみることにする。

まず鈷真子は、俺にいつもと違う対処法を申し付けた。

なにがあっても必ず殲滅しろ、ではなく、なにがあったら迷わず撤退しろ、と。

なにをすればいいのか聞いてみると、囧になればいいという。

必ずしも殲滅する必要はないのではないか、ということ。

もちろん不安な俺が説明を求めると、鈷真子は煙に巻くようにバカなことを言っ

漸く聞き出した根拠というのが、時機と位置、だそうで。

アレが護っているもの。境界。近づくものを撃退。

近づくものを、撃退？

拡張工事。蟻の臭跡。

其処まで考えて、俺は漸くピンと来た。

ああ、なるほどそう来るか。そう繋がるワケね。あーなるほど納得。

つまり。襲撃が開始されたのは最近のことで、工事が開始されたのも最近のこと。

蟻はフェロモンを辿って行進する。——そのフェロモンを途切れさせたら、どうなる？

そりゃあ当然考えるまでもなく。単純明快に迷うだけだ。

「・・・比喻が判り辛いんだけど、鉛真子」

俺がそう言うと、鉛真子はパァッと大輪の花が咲いたような笑みを浮かべた。

どうやら喜んでくれたらしい。よかったよ実際。無茶苦茶可愛いじゃねえかよ。

「つまりアレだろ？件の通り魔さんは、その蟻とやらと同じような

性質を持^てっている、と。そういうことなんだろ、鈷真子？」

俺の言葉を聞いた鈷真子が、実に全く嬉しそうな表情で、俺の懷に飛び込んでくる。

・・・境界を^{フェロモン}辿って行進しつつ、ソコに近付くものを撃退する。

拡張工事が始まって、その境界が乱されたかなくなったかして、その襲撃者さんは街に出没して迷惑かけるようになったと、そういう話なのだろう。

「んー！ユータも賢いのだー☆いいコいいコなのだ、二人とも合格なのだー！」

賢い俺に抱きついた鈷真子は、細い腕で精一杯俺の体を抱いて、ぎゅーっと切ない力でハグハグしてくる。俺恍惚。もうどうにでもして。

その辺りで漸くみらのちゃんも再起動^{リフト}したみたいで、ふらふらと覚束ない足取りで立ち上がる。

「・・・うー。わたし、汚されちゃいました・・・」

ほんのりと涙を滲ませる後輩ちゃん。ダメだ、フォローできそうにねえ。

「うーん・・・と、とりあえずさ、鈷真子。今回は俺たちが囨してる隙に、鈷真子がなにかやらかすつもりなんだろ？一体どうするつもりなんだよ」

みらのちゃんのこととは残念だったと諦めてもらうとして、とりあえず今の俺たちに必要なのは行動の指針と実際の対処法。

それを鈦真子も承知しているので、我らが部長どのは頼もしくも頷いて、

「とりあえず境界を引き直す必要があるのだ。・・・と、なると――ちょっと必要なものがあるのだ」

「なに、もしかしてアレか？あの白線引くやつ」

俺がそう言うと、一瞬鈦真子は停止して、

まるでバカを見

るような眼で見られた。

「・・・・・・・・あのですね鈦真子さん。俺、今の視線がイタくて仕様がないうですけど」

「だってあんまりバカなこと言うから、ついつい見ちゃったのだ。ユータ、今まで色々と鈦真子のお手伝いをしてきておいて、流石に白線はないと思うのだ・・・」

・・・確かに否定できないのが哀しいですね、ハイ。

俺が心の汗を両眼からぼたぼたとこぼす中、鈦真子は独り言のよう

な口調で呟いた。

「系統が判らないのが不安なのだが・・・最低聖水ぐらいは必要そうなのだ」

そんなこんなでやってきました礼拝堂。

聖水といったらやっぱり神父様ですよー！

聖マリア学院の礼拝堂に勤める唯一無二の神父様。聖水プリーズ！

今日もステンドグラスの下でお祈りしている様子の神父様に、鉛真子が嬉しそうに声をかける。

「やっほーっ、ひっそかちゃーんっ！今日も悩める生徒として相談があつてきたのだー！」

礼拝堂中に反響する、その元気な声を聞いたうら若き神父様――
つこもひそか晦日密氏は、怯えたウサギのようにびびつと全身を震わせた。

「・・・礼拝堂ではお静かに、と、以前も言ったはずなんですが・・・」

苦笑しながら振り向いたのは、何処かお人よしのニオイがプンプンする、未だ年若い青年神父様。

それに対して鉛真子はいえ、眼をうるると潤ませて、可愛く

切なくポーズを取って、いつものように甘くて甘い声で応えて曰く、

「だって・・・ひそかちゃんに会えたと思ったら、どうしても我慢できなかったのだ。鮎真子のせつないキモチを判って欲しいのだ」

なんてことを言いやがりましたよコノヤロウ。ひそっち俺と交代しやがれコノ。

晦日密氏はギョツとして、一瞬ほのかに頬を染めかけた瞬間俺の痛い視線に気付いたのだろう、わざとらしい咳払いひとつ、諭すような口調で言い含める。

「お、おほん！いいですか麻七菜さん。どんな理由があろうとも、主のお膝元で、大声で叫ぶ喜ぶはしゃぎまわる、というのはいけななことなんです。その程度の些事に心煩わされる主ではないでしょうが、こちらが誠意を持たねばですね——」

「ごめんなさいなのだ。次はきつと気を付けるから、許して欲しいのだ」

なおも言い募る晦日密氏の長口上に飽きたのか、鮎真子は急にしょんぼりして、泣きそうな声でそんなことを言った。

演技と判っている俺でさえ、かなりグツと来るモノがあったぐらいなのだから、晦日密氏はというと、当然のように狼狽する。

「い、いえっ、別に其処まで厳しく叱ったワケではないのです麻七菜さん。そういった心がけを持たねばなりませんよ、という神職としての助言というかですね・・・」

慌てる神父様を尻目に、鉛真子は既に演技をやめて暴君モードに戻っている。

一瞬だけ鉛真子が俺たちに目配せを送ってきて、俺はそれに頷いて返す。

只今ヨリ作戦ヲ開始スル。とのこと。

なんだかよく判ってない様子のみらのちゃんに、その旨を伝えようと、彼女はなんだか複雑な表情で頷いた。

「・・・以心伝心ですね、せんぱい」

「まあな、そりゃあ流石に深い付き合いですから」

そんな会話を交わす俺たちのことは忘れたみたいにな、鉛真子はとても自然でナチュラルな笑顔を浮かべて、

「ひそかちゃん。聖水を分けて欲しいのだ」

ズバリ単刀直入に、自分の要求を突きつけた。

先ほどの余韻でまだあわあわと狼狽していた晦日密氏は、その変わり身の早さにぱかんとして、それから漸く怪訝な顔をした。

「聖水・・・ですか？」

「聖水なのだ。ホーリーウォーター」

「・・・麻七菜さん。今度は一体、ナニに使うつもりなんです？」

少し警戒心を浮かべて、晦日密氏は身構える。無理もねえ。

なにしろ晦日密氏、前に大事な大事な純銀の十字架を、鉦真子に貸し出したまま返って来ないという悲劇を体験しているのである。

さもありなん。神父様の十字架は、鉦真子の手によって銀のナイフへと姿を変え、人形と一緒に燃えたのでした。ないものは返せないのです。

そんな事情があるからして、彼の警戒は当たり前前すぎて困ってしまうぐらいなのだが・・・。

・・・いや、でも警戒心薄いな神父さま！やっとう警戒してくれたよってぐらいだぜ？

ひそっちのお人よし加減は、前の一件で判っていたつもりだったが・・・少々見立てが甘かったらしい。

怪訝な顔で問い詰める晦日密氏だが、鉦真子は当たり前のように慌てない。

「やんっ。ひそかちゃんはエッチなのだ！乙女のヒミツを根掘り葉掘り聞き出そうとするなんて、デリカシーがないのだ！」

「えええ、エッチだなんてそんな！神に誓って、私に疚しいところはありませんよ！？」

神父様慌てる慌てる。俺笑う笑う。みらのちゃん呆れる呆れる。

鈷真子は別段変わった風もなく、狼狽する晦日密氏に追い討ちをかけるように演技を続行する。・・・表情ぐらゐ変えようぜ、マジ演技力が怖すぎるから。

「んもう！そんなに知りたいならチラッとだけ公開しちゃうのだ！ヒントは山の中！」

「や、山の中ですか・・・って、話が噛み合ってませんよ麻七菜さん。もう理由は聞きませんから、これぐらゐで勘弁——」

「山の中で鈷真子とユータとみらのちゃんの三人で、はあはあ息を荒げてする行為に必要不可欠なのだ！それがないと色々問題が発生して困りものなのだ！」

「間違ったことは言ってねえけどもう少し言葉を選ぼう鈷真子さん！出るから！鼻血出るから！」

ひそつちを弄るのは構わないけど、こっちの妄想を刺激するような言葉はマジ勘弁。こちとら健康な青少年だぞこのやろう。若者の性欲ナメんなよ。

健全な男子学生として、色々思うところがあるから。ていうか鼻血出るから。

晦日密氏はぶるぶると震えている。あー、懐かしいなこのパターン。怪訝な顔をするみらのちゃん。わくわくした顔をする鈷真子さん。面倒くせえと露骨に顔を顰める俺。誰が正しいのかは、たぶん現状で俺かみらのちゃんの間違いない。

顔を真っ赤にしてぶるぶる震えていた神父様は、新調した十字架をおもむろに握り締め、なんだかよく判らない言葉（きっと聖書の一節）を猛烈な勢いでブツブツと唱えだした。

あー、煩惱退散。聖職といえどもうら若きひそつちには、鉦真子の相手はキツすぎるのでした。

己が欲望に恐れ戦き必死に懺悔をする神父様を、なんだか怯えたような眼で見つめながら、みらのちゃんが俺の袖をくいくいと引っ張った。

「ん、どうしたんだいみらのちゃん？」

「あの、せんぱい？わたし、神父様とは何度かお話したことあったんですけど――ああいうヒトでしたっけ？」

「うーん、難しい質問だけど答えは単純明快だぜ、みらのちゃん。麻七菜鉦真子を相手にするにゃ、神父様程度じゃ荷が勝ちすぎる」

「・・・なるほど」

納得したのか、重苦しい表情で頷くみらのちゃん。

元気出せよ、明日はきっといいことあるさ。俺の保証だから今ひとつ自信がないけど。

ていうかみらのちゃんには元気でいてもらわないと。俺すっげえ困るから。

ぽやんしてないと癒しが欠乏、俺死亡。ぶっちゃけリラックスタ

イムがねえとやってけねー。

そんなワケで、みらのちゃんの元氣が出ることを祈る俺。晦日密氏もそろそろ復活の兆し。そんなエアポケットみたいに空いた刹那の時間、唐突に鈷真子がにゅふふ、といやらしい笑みを浮かべる。

・・・あー、なんか、既視感^{デジャヴ}? きっとヤなこと言うんだろーなあ鈷真子さん!

「ひそかちゃん聖水欲しいのだ。鈷真子やみらのちゃんから搾り取った聖水じゃ役に立たないから、ひそかちゃんに相談してきたのに・・・」

「・・・え? 麻七菜さんたちから搾り取る・・・?」

溜息混じりにそう鸚鵡返^{おうむ}しに呟いた晦日密氏、なんかすっげえキョトンとしてる。

その動作だけで俺には充分だった。

神父様、マジで純朴なんだね・・・。俺はさっきから鼻血がヤバいのだけだ。

エロくない人間はいいですね! 血の節約になるぜコンチクショー!

ああ、でも鈷真子とみらのちゃんから聖水を搾り取る・・・なんて淫靡^{エロス}な響きなのだろう!

鈷真子は一遍豆腐の角に頭をぶつけて死ぬべきである! とか叫びたくなるじゃねえかコンチクショー!

そんな具合に、ステキ時空がひたすらに展開される俺の脳髓を放置プレイしたまま、事態は漸く収束の方向に向かい始めたらしい。いつの間にか。

「——なんのことは判りませんが。とにかくですね、麻七菜さん？残念ながら、私には彼方の手助けをすることはできないんですよ。」

「む。ひそちゃんが珍しく抵抗するのだ。一体どんな理由があれば抵抗しようかとか考えるのが不思議で仕様がなしだ！」

大仰に、それはもう演出過剰に、オーバーアクション 鈷真子は自分の額に掌をぱちんと当てて、礼拝堂の床の上によよと崩れ落ちる。

ていうか鈷真子さん？抵抗しないひそっちが異常なんだけど、その辺判ってる？ねえ。

「どんな理由かは非常に簡単なことでしてね。・・・私は聖水を持つていないというだけの話なんですが」

何故か得意げに胸を張る晦日密氏。

いや、なんとなく判るけど。

鈷真子に抵抗できたらそりゃあ嬉しくもなるよね！だって普段から虐げられ組だしね！

俺も含めてという辺りが正直ゼンゼン笑えナイのデスガ、まあ其処はおまけということに。

「聖水を持ってない！？それでも神父かと問いかけて問いかけて問いかけてッ！ごめんなさいとか言わせたくなくなっちゃうのだ！」

何故か激昂する鈦真子ちゃん。でもまあ鈦真子の情緒不安定はいつものことだし。安心。

でもそんな鈦真子に、まだ全然慣れてない晦日密氏は当然のように慌てる慌てる。

「い、いやその。神父だからと聖水を必ず持ち歩かなければならぬという律はありませ^ルんし、それに第一。この礼拝堂を含む学園周辺が主な活動範囲の私には使い道なんてないんですから！」

ちよつと泣きそうな声でそう力説する晦日密氏。うら若き神父様の苦悩である。

そんなことを考えていると、みらのちゃんがまたしてもくいくいと袖を引っ張ってきた。

「ん、どうしたんだいみらのちゃん？」

「いえ、その。・・・あのですね？せんぱい。あれってイジメじゃないでしょうか？」

「んー。それは難しい問題だけど、まあ多分・・・鈦真子なりの親愛の表現、じゃないかな？とか――」

言ってから後悔する。ありえねー。鈦真子に限ってそれはありえねー。

「・・・いや、やっぱりイジメかも」

半泣きの晦日密氏を見ながらの、しみじみとした俺の述懐。

みらのちゃんは微妙に痛ましい眼で、そんな光景を眺めている。

「わ、判りました麻七菜さん。私は力になれませんが、力になってくれる人を紹介します」

それで許してくれますか、と無言のまま視線で問いかける晦日密氏。なんかすっげえ哀れっぽい……。ていうか女子学生に恐喝される神父様ってどうだろう。

鉦真子はふんぞり返って偉そうに、うむ、とか頷いてるし。

いかん、晦日密氏の方が迷える子羊に見えてきた——！？

「そ、それでは聖マリア教会の——この方に」

ぷるぷると震えながら、鉦真子に今書いたばかりのメモを手渡す神父様。

そのメモを受け取った鉦真子は、目を通すなり怪訝な顔つきで俺たちの方へ振り返る。

「・・・レイニー・ブルー？ 変な名前だと思うひと、手を上げるのだ」

よく判らないけど手を上げる俺。そしてみらのちゃん。

鉦真子、なんだかジトツとした目付きで神父様を見る。同時に震える神父様。哀れ。

「・・・人名でいいのにかにゃ？」

「も、もちろんですとも！聖マリア教会の神父様で、とても寡黙な方ですが、とても頼れる方でもあります」

とても尊敬しています！なんて言わなくてもいいようなことも口にする神父様。相当テンパッてるな。

「ふうん。ユータ、このヒトに言えば聖水もらえるらしいのだ」

「ああ、そうらしいな。・・・ところで鉦真子さん、もしかして、俺たちも一緒？」

あと今から？と視線で訴えかける俺。だってもうそろそろご飯の時間ですよ？

「ナニを当たり前のことを聞いてくるのだ、ユータ。鉦真子一人で行っても始まらないのだ」

ですよねえ。

もう帰りたいか思っている俺としては、ゼヒとも違う答えを聞きたかったのだが。

「ま、・・・仕方ないわな、いつものことだ」

自分を納得させるようにそう呟いて、俺はみらのちゃんを顧みる。

「行こうか、とりあえず」

「行きましょう、とりあえず」

そんな遣り取りを見ていた鉦真子はにゅふふ、と笑って。

「それじゃあお仕事のはじまりはじまり——なのだ」

楽しそうにそんなことを呟いた。

第二回 「夜の護り手」 後編

学園まろんズ 第二回

「夜の護り手」 一 後編

そんなこんなでやってきました、聖マリア教会！

今日はなんだかいつにも増して移動ばかりだね！とか思わなくもないのだが、まあ事情が事情だけに諦めるしかない。晦日密氏のつじもひひそか無能を呪うばかりである。

それはさておき。

実のところこの俺ながくちゆうた奈雅座由有多、折紙記念病院の際と同様に、一度たりとも訪れたことのない場所であつたがため、よもやこんな立派な教会だなどとは思っていなかったのである。

「で、でけえ」

たかが教会である。

しかも、過疎化の進みつつある田舎町の、その俗っぽい名前すらもほとんど知られていないような教会が、である。

・・・その威容をどう表現したものか。俺的には既にでかいぐらいしか言えない。あと豪華。本格的。そんな感じ。

鉛真子（しんまこ）曰く、わあロマネスク建築なのだー、日本国内でこれだけ本格的なのは珍しいのだー、云々だそうで（ちなみに興奮した鉛真子は今現在玄関の写真を撮っている）。

なんというか、こう、無信心な俺ですら、神域センサーがビンビンくるっていうかね？

みらのちゃんも似たり寄ったりの様子で、でかくて立派な教会を見上げながら、ふわぁーっとかはえーっとかおっきいですねーっとか言いながら、微妙に普段と違うテンションで歩き回っている。

「さて鉛真子さん、俺的には正直こんだけでっかい教会だっていうのにビックリしたんですけど、・・・もしかして、やっぱり中に入るの？」

気を取り直して、撮影を続ける鉛真子にそう訊ねてみると、鉛真子は怪訝な顔で振り返る。

「やっぱり、って・・・？ユータは一体全体ナニを言っているのだ？此処まで来ておいて、外側だけ眺めてさあ帰りましょう、なんていう事態になる要素があると言っても言うのかにゃ？」

「いや、その」

だって正直気圧されますよ？

キリストだかマリアだか知らないが、そんな偉大な聖人に対する信仰など欠片ひとつ毛筋一本分すらも持ち合わせのない俺が、こんな立派な信仰装置に入っていくだって？

想像しただけで面白いな、おい。

「・・・ね？わかるでしょ？」

「判らないのだ。ユータはいつも変だけど、此処に来てからより一層挙動不審に磨きがかかっているのだ。・・・正直言えば、鈷真子はちょっぴり心配なのだ・・・」

そんなことを言いながら心配そうに眉根を寄せる鈷真子。俺のトキメキ数値は既に測定不能でボンボヤージュ。いや意味判んねえし。

「オツケー部長どの！ささ、早く入りましょう行きましょう！だって鈷真子に心配させちゃうなんて俺ってば罪なオトコだからー！」

おーいみらのちゃん行つくぞオーウ！とか叫んだらみらのちゃんにまで怪訝な顔をされた。何故だ。

それはさておき、異様にでっかい扉を押し開いたその先は別世界。俺的には異次元MAX。

ステンドグラスで光量を調整された室内に、何列にも連なる長椅子の群れ。

その長椅子の群れから外れた壁の隅には、懺悔を聞き届け恩赦を与える告解室。

煌びやかな装飾の施された十字架が、まるで場違いな俺たちを、罪人を見下ろす絶対者かみさまの視線で見下した。

「・・・・・・・・。あの、鈷真子さ」

「さあーレッツらごーなのだぁー、ユータ！とりあえず様子見にいつちよトツカン呐喊してみるのだー！」

響く大声鈷真子さん！ていうか空気読んで！あと呐喊してるのは鈷真子さんだから！

「呐喊するのはもちろん突貫するのだって遠慮したいです鈷真子さん！ー！」

「わがままなことを言うユータなのだ。・・・でもお、そんなコト言いながらも鈷真子の言うことをちゃんと聞いてくれるユータはやっぱりいいコなのだ♪」

そう言うのにゆふふ、と笑う鈷真子さん。でもあれ、言うことを聞いて・・・・・・・・？

「――はッ！？し、しまったツツコミゲージの上昇に合わせて思わず叫んじゃったー！」

頭を抱える俺。そして木霊しだまする二度目の残響音。もう俺溶けてしまいたい。

うう、長椅子に点在していた純粹無垢なる信仰者たちの視線が痛すぎる・・・・・・・・！

「み、みらのちゃー――」

救いを求めて振り返ってみれば、告解室へと駆け込んでいく後輩ち

やん。

あれえボク見捨てられちゃいましたよ!?

「・・・鉛真子、さっさと済まそうぜ」

無茶苦茶げんなりな気分だけどとりあえず用件ぐらい済まさないと割に合わない。主に俺が。

「うん、とりあえず賛成ではあるのだけど、それはユータの仕事なのだ」

そんな俺に対して笑顔でスゴいことを言う鉛真子ちゃん。

どうしてかなどうしてなのかななんで俺なのかな!とか言いたい気分ではあったのだけど、ある意味予想通りと言えなくもない展開だったので、俺は溜息混じりに頷いた。

「・・・了解。でもさ、鉛真子。ひとつ確認しときたいんだけど、やっぱアレ?相性の問題とか?」

そう問いかける俺の脳裏には、前にアニメとかで見た神父様と魔法使いのガチバトルが浮かんでいるワケなのですけれど、やっぱり魔法使いと教会って相性悪いんじゃないかねえの?とか思ったり。

その辺実際にはどうなのか、鉛真子はちよっぴり珍しくも難しい顔で一瞬だけ思考して、

「・・・相性、というよりは・・・うん、たぶん単純に相容れないだけなのだ」

互いにその存在を認めず、というようなことをこぼして、鉦真子は少し困ったような顔をした。

一瞬ナゼだろうとか考えかけて、俺は自分の意地の悪さを自覚する。

・・・ああ、なるほど。此処って敵陣真っ只中でしたね・・・？

敵陣と表現するのはいささか不穏当なのだけれど、鉦真子の態度を見る限りにおいて、大筋それが間違っているとも思えない。

いずれ軽率な発言ではあったろうから、謝罪の意味も込め、俺は鉦真子にへつらうような笑顔を向けて、教会の奥へと歩みを進める。

一瞬だけ非常にキモそうな顔をされたような気がしたけれど、其処は精神衛生の観点から記憶領域のうすいよりこそぎ落としておく。だって自己保身は大事ですよ？

俺は未だに突き刺さる信仰者たちの視線を掻い潜り、荘厳なステンドグラスの列を抜け、重苦しいまでの圧迫感を放ちながら存在する十字架の下に、どうやら目的の人物と思しき人影がひんまき跪き祈っているのを視認できる距離まで近付いた。

漆黒の衣装を纏ったその人影は、俺の到着するタイミングに合わせてたかのように立ち上がり、ゆるりと体をめぐらせて、はつきりしつかり確実に、俺に視線を合わせてきた。

「――――、」

咄嗟に声が出ない。だって当然だろう？ その人影の双眸そうぼうは――――言

葉などよりもよほど強く、その意思を告げていた。

背中がちりちりする。胸の内側がぞわりとする。心臓がどくどくする。血流が逆流する。魂が震撼する。そして思い知る。

この人影は違う。

尋ね人ではないという意味ではない。そういう意味なら、名前を問うまでもなくこの人物こそが尋ね人。

けれど違う。この人物を、本当に人間と呼んでいいものか――？

なんていうか、こう。別のイキモノが人の皮を被っただけのような気がしてならないような、そんな不安定な気分。

胸の内側をさわさわと撫でられているような不快感が、俺に危険を報せている。

・・・なんのことはない。要はこの神父様、あちら側の人間に相違ないということだ。

それも、どっちかというと化け物寄り。おいおいそんなヤツが神父様やっけるとかありえねーとか言いたい気分ではあったのだが、正直そんな余裕などこれっぽっちも存在しない。

とにかくこういう手合いに油断を見せるのは愚の骨頂。オーケイ、それが判れば十二分。

いつも通りに、進めよう。

「ハロー神父さま！お仕事中悪いツスけど、ちょいウチの学校の神父様から紹介されてやってきた迷える子羊ツス。神父様、レイニー・ブルーさんで間違いない？」

割と適当にそう訊ねると、神父様は無言のまま、ゆるりと一歩踏み出して、俺の瞳を覗き込む。いや、ぶっちゃけ近い。近いよ神父サマン！

其処で漸く気付いた俺もアレなのですが、どうやら神父様はバリバリ全開の外人さんジンガイだった様子で、酷く圧迫感を感じさせる視線を、その碧眼から投射している。

・・・うわ、驚いた。視線だけで相手の言いたいこと理解するなんて初めての経験だぞ？

ついに俺も人の限界を超えてしまったかと錯覚するけれど、もちろんそんなハズもない。

「・・・神父さま。判りました悪かったツスから、どーかもうちよいとばかり離れてはくださいませでしょーか」

観念した俺がそう言うと、神父様はやっぱり無言のままにゆるりと身を引いて、一歩離れた距離から、次なる俺の言葉を待っている。

「俺の名前は奈雅座由有多。で、あっちの超絶ラブリーキューティ―で小悪魔系のネコミミ少女は、麻七菜まなな銚真子。・・・あっちの告解室に引きこもっちゃっているぽにゃにゃん少女が幸守みらの。合わせて三人、聖マリア学院の悪名高き“まろん倶楽部”の面々（メンバー）ツス」

その言葉を聞いた神父様、僅かに頷いて瞑目する。よかった、どうやら許してくれました。

「・・・もう一回確認しますケド。レイニー・ブルー神父様で間違いない？」

そう訊ねると、今度は神父様、如何にも、という風に重々しく頷いた。

よかった、人違いとは思ってなかったけどこうして実際確認するとやっぱり安心。だって人違いとか正直洒落にならないし。

「それじゃあ単刀直入に用件を。・・・聖マリア学院のうら若き神父様であるところの晦日密氏の紹介で、レイニーさんに頼めば聖水の大盤振る舞いでステキ夢気分、と聞いてきたワケなんスけど」

そう言うとき神父様、頷くように目を閉じて、くるりと踵を返して十字架の下まで歩いていく。

そして其処からナニか、ていうかモロにポリタンクっぽいモノを二つ持ち上げて持ってくる。

・・・まさかとは思うけど。いや、でも、ほら、あれです。ちやぷちやぷいってるし。

「・・・神父様。ソレ、聖水？」

俺のその言葉に神父様、何に遣うかは知らんが、量がなくては話になるまい——とでも言いたげな視線を向けて、ポリタンク二つを俺の手に押し付ける。

手渡されたポリタンク二つ、当たり前だけどずっしり重い。18リットル×2といったところかな？

「神父様神父様。量が多いのはヒジョーに結構なんスけど、その、アレです。・・・コレをお持ち帰りしろと？」

当然だとばかりに頷く神父様。このヒト酷いよ鉦真子さん！いやまあ一番酷いのは鉦真子さんなんですけどね？

いずれ貰いに来た立場である我が身には返す言葉もあろうハズもなく、溜息混じりに頷いて、それじゃサンキューバイバイ、と言おうとしてふと気付く。

「・・・神父様。聖水って有料デスカもしかして」

そうだとするなら相場はいくら。リッター辺りの単価は十円以内でお願いします。

しかしそんな俺の懸念は全くの的外れだったようで、神父様は僅かに目を細めて、貴様ら迷える子羊どもから巻き上げる金などない、と言わんばかりの表情で首を振る。横方向に。

それを確認して露骨に安心する俺。だって学生の一円は社会人の千円に匹敵する大金ですよ？ぶっちゃけ鉦真子さん関連で出費激しいサキガミ・ハーヴェストし。おまけに今回はくまたん費用もあるときた。

・・・とりあえず貰えるものは貰ったし、さっさと退散させてもらいましょう。マジな話、そろそろ緊張とか圧迫感とかで心臓がやバミッシェンコンプリートい予感。

「いやはや神父様は懐が広い。ひそつちとは大違いッスよ、大違い。あのおとぼけ神父様にも見習って欲しいモンッスねえ」

そう言いつつポリタンク二つを抱え直す俺。ようし帰る準備は万端さ！

「それじゃ、そういうコトで。まろん倶楽部へのご協力、チョー感謝」

それを聞いた神父様、ほんの少し、気の所為じゃないかと思う程度に微笑んで、何に遣うかは知らんが有効に遣え。縁があつたらまた会おう——と言わんばかりの顔で見送った。

・・・てつきり、止められるかと、思ってたけど。

意外にあっさりとした別れに、俺は肩越しに神父様を振り返る。

・・・黒衣の神父様は、さっさと十字架の下に戻って跪き、俺によって中断させられた祈りの続きをしているみたいだった。

ああ、なるほど。ありゃあ本物の神父様なんだね、やっぱり。

そう納得して、俺はポリタンク二つを戦利品として両手に抱えながら鉦真子の元へと戻っていく。

ああきつと鉦真子さん喜ぶだろうなあ。見事敵陣に討ち入って目標を回収してきた俺に熱いベージュをくれたりしないだろうかマジで。というかあれだ、感心感激のあまりに俺のこと、す、す、好きになっちゃったりとか——。

などと、脳内麻薬でメロメロになった状態の俺が、教会の中であるという現実を忘れて大声を張り上げてしまったりするのはある種仕方のない事態だったのである。多分。

「鈷真子おー。任務成功でござるー！」

再び周囲から集まる白い視線。でもそんなの気になんない。だって鈷真子さんが待ってるからね？

お帰りなのだっユータ！こんな難しいことを一人でやっちゃうなんてスゴいステキ惚れちゃう腫れちゃう障っちゃう！とか言いつつ抱きついてくる鈷真子さんを夢想していた俺なのだが、

「・・・ん？ああ、終わったのかにや、ユータ。それよりスゴいだ、この内装、多分コレ国内産じゃないのだ・・・！」

興奮した顔でそんなことを言う鈷真子さんは、教会内装の写真撮影に夢中だった。

・・・無闇矢鱈むやみやたらと哀しい気持ちになってしまった！

「鈷真子さん鈷真子さん！労ってとは言わないからせめてこっち向いて。でないと俺のこのやり場のない感情が色々大変だから！」

必死の思いでそれだけ言うと、鈷真子は漸く撮影を中断してこちらへと向き直る。

それで漸く、俺も気付く。まめつぶメモリアル（以降マメリア）をスカートのポケットに押し込む鈷真子の、興奮して上気した顔の裏

に見え隠れする緊張に。

「・・・鈷真子？正直言って、俺かなりビックリしているワケなんだけど」

何しろ鈷真子さん、今までどんな化け物相手にするときだって緊張の色など微塵も浮かべたりはしなかったのだ。少なくとも、俺に見えるようには。

そんな鈷真子が緊張する姿など、俺にしてみれば余程も余程、重ねて三つぐらいよっぱどの事態と言っても過言ではないような事態なのである。

そして鈷真子といえば、自分の緊張を俺に悟られたことを察したらしい。珍しく慌てたような表情を一瞬だけ閃かせて、取り繕うように笑う。

「・・・うん、鈷真子もビックリなのだ。この教会想像してた以上に立派で——」

「や、そっちじゃねえから。・・・ていうか今の、わざとやったな」

なんていうか、本当に珍しい。動揺していたのだろうか、鈷真子とは思えないほどに捻りのない誤魔化し方に、俺は思わず突っ込んでしまっていた。

重ね重ねの失態に、鈷真子自身も気付いていたのだろう。微妙に拗ねたような表情を浮かべて、鈷真子は（またしても珍しく）溜息を洩らし、ぽつりと呟いた。

「・・・はあ。ユータには敵わないのだ、ホント。普段はニブチンの癖に、どうしてこう時々鋭いのやら、理解に苦しむのだ。・・・ま、とりあえずはユータの察した通り。正直言って、鈷真子はかなり緊張しているのだ」

「やっぱりそうか。さっきから異常に鈷真子っぽくない行動が目立ち過ぎてるからな。今の状態見られたら、たぶんみらのちゃんだって気付くぞ」

ちなみにみらのちゃんといえば、実は未だに告解室に閉じこもったまま出てこない。うーむ、一体ナニを懺悔しているのやら。予想はつくけどソコは考えない方向で。

「だって仕様がななのだ。鈷真子だって、本物を見るのは初めてなのだから」

相変わらず拗ねたような表情のまま、そんなことを言う鈷真子。で、ちよい待ちとか思う。

「・・・・・・・・。ほん、もの？」

「そうなのだ本物なのだ。——ユータ、アレがユータの想像している通り、まさしくあの神父様こそ、いわゆる戦う神父様、なのだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

わあ、やっぱりそうか。そうじゃないかとは思ったんだ。俺の直感で人外クラスの圧迫感なんぞ、初めて体験したワケだし。道理で無闇矢鱈と怖いワケである。

「あっはっは、なるほど理解納得怒髪天。心臓パンクしそうなほど怖かったぞ、オイ。鈷真子ちゃん、こんな役回りを俺に押し付けるなんて流石に酷いかと思います！」

泣きそうな声でそう叫ぶと、鈷真子が苦笑いを浮かべて、ポリタンクを抱えたままの俺の右腕にするりと抱きついた。俺恍惚。

「・・・正直、それは悪かったと思ってるのだ。でも、人選は絶対間違ってたかったと確信を持って言えるのもまた確かなのだ。ユータ、いつもと全然変わらなくて、鈷真子は実のところかなり深く感心しているのだ」

それこそごほうびをあげてもいいくらいに、と言って。

首筋に触れる、柔らかく湿った感触に、小さく響く――

「て、ウワアアアアアアアアアアオウウウウウウっ!？」

こ、こ、鈷真子のヤツ、背伸びして首筋にキスしやがったよコノヤロウ!なんだ馬鹿! 予告しろよコンチクショウ! さ、さっきの圧迫感なんて比じゃねえぐらい心臓が高鳴っちゃったじゃないか!!

咄嗟のことに、鈷真子をきつく抱きしめようとする体の反射作用を抑えるだけで精一杯ですボク!

「・・・ユータ、声、おっきいのだ」

「あ」

流石に今の絶叫は、鈷真子の毛の生えた心臓にも届いたらしく。

鈷真子は苦笑いしながら、するりと俺の腕から離れていった。もったいねー。

「ど、どうしたんですか奈雅座せんぱいっ!？」

と、そちらもやっぱり聞こえたらしく、告解室の扉がすたーんと開かれて、みらのちゃんが大慌ての様子で飛び出してくる。

もちろん、平然としている（内心ドキドキだけど）俺を確認するとすぐに状況を把握したらしく、なんからしくもなく絶望的な表情を浮かべて、その場にへなへなと崩れ落ちた。

・・・やっちゃった。テへ☆

被害は甚大、周囲の視線がトゲトゲからザクザクレヴェルまで上昇しているので、一刻一秒も早く脱出することを強く要請しまーす！
鈷真子さん！

俺のアイコンタクトで全てを了解した風情の鈷真子さんは、力強く頷くと、普段の鈷真子さんからすると控えめな声音で、鋭く命令する。

「全員、撤収なのだ！」

かくして俺たちまろん倶楽部の三人は、ほうほうの体で教会から逃げ去ることになったのでした、ちゃんちゃん。

で、その後。

俺たち三人は休むこともなく学校前まで戻ってきて、やっぱり休む間もなく今夜の予定を打ち合わせて、今漸く家路に着いたところである。

既に時間は夕食時、ご近所さんのおうちからは食欲をそそる素敵スメルが漏れ出していて、なんていうか食欲との激闘バトルミレニアムという気分だったのだけれども、これからの予定を考えると、腹の中にはあんまりモノを詰め込まないほうが良さそうである。

まあ、いずれもう少しばかり時間があるので、軽く食事ぐらいはしていくんですけどね？

「ただいまー。カナ姉^{ねえ}、メシー」

扉を開くなりご飯を要求する俺。いや待て、順番間違えてる。怒られるってば。

焦る俺。何しろウチの家族は怖いのである。学校で男を相手にする^{ガツコ ヤロウ}ときみたいには振舞っているとバチンコされちゃうんだぜ？

そんなことをつらつらと考えていると、廊下の奥からぺたぺたとスリッパの音が近付いてくる。

「・・・おかえり、ユウ。で、アンタいきなり飯とか言われても困るわよ。準備はしてたところだけど、まだもう少し待ってもらわないと」

妙に気だるげな様子でそんなことを言って、スリッパの音は停止した。

この声の半分はアンニユイでできていますと言っても通じそうなほどの気だるさを持つ、この声の主こそ、俺にとっての唯一無二にして一番大切な家族。

奈雅座何無裏。ながくら かなり一応、俺の实の姉ということになっている、常に気だるげクールビューティー。

職業は不明、どうやら自宅で可能な仕事らしいというのは確かなのだが、詳しく聞いても教えてくれない。

そういう職業にありがちなことだが、時間は割と結構不規則なもので、こうして夕方ごろまで寝込んでいるときもあれば、俺と似たり寄ったりの時間から起き出していることもあり、たまに昼ごろから部屋にこもって出てこなくなったりもする。

度が弱くフチのない眼鏡を掛けており、普段はパリッとした服装をしているものなのだが、今日は起き抜けのためなのだろう、ワイシヤツ一枚にパンツ一枚という、努理流くん辺りならば狂喜乱舞ルナティックのあまりに発狂死するような格好である。

念のために言うっておけば、弟である俺には何の感慨もなく、そしてカナ姉がこのような格好をしているのは割と珍しい部類に入る。普段はきっちりした人なのである。

少し癖のある長い髪を、今日はいくくりもせずにボサボサのまま放置している辺り、まだ眠気は取れていないものとみた。

「・・・うん、それはいいけどさ、カナ姉。まだ眠いならもう少し寝ててもいいんだぜ？」

飯の用意ぐらいならなんとか俺にもできるワケで、眠たいカナ姉をわざわざ引つ張り出してまで頼む用事ではない。

しかしカナ姉は首を振り、

「気遣いはありがたいけどね、ユウ？アンタ、料理下手でしょ」

「う」

ズバリ痛いところを突いてくる。なんてことだ、眠かろうがなんだろうが、やはりカナ姉はカナ姉ということなのか。

「あたしは愛情だけのマズい飯なんて食べたくないから、眠い体を引きずって準備していたというワケ。・・・でもまあ、確かに今刃物を持つのは危険かしらね。まだ視界がぼんやりとしてるのよ、正直」

「・・・えーっと、それじゃあ材料切るのは俺がやるよ。カナ姉は細かいやつ、お願い」

「ん。ありがと、助かるわ。・・・で、ユウ？今日に限ってご飯の催促だなんて、何か出かける用事よていでもあるのかしら？」

台所の方へ引き返す途中、そんな言葉を投げかけるカナ姉。いつもながら鋭いなあ。

それに対して、俺は予め打ち合わせてあった答えを何食わぬ顔で返

す。

「ああ、今夜天体観測しようって話になって。部活のみんなと学校集合」

「ふうん。アンタも毎度毎度大変ねえ。・・・まあ、怪我だけはないように」

振り返ることなくそう言って、カナ姉はさっさと台所に引っ込んでしまう。

俺は玄関先に突っ立ったまま、ぼんやりと反芻^{はんすう}する。

怪我だけはしないように、か。

うーん・・・気の所為だといいんだけど、どうも見透かされている気がする・・・。

カナ姉は俺と違って実に全く聡明な人だからなあ・・・。

案外、俺の素行不良に気付いていながらも黙認しているのやもしれ、とか思わなくもない。

そんなことをつらつらと考えていると、台所の方から声が掛かる。

「ユウー！いつまで玄関に突っ立ってんのよ、早く手を洗って手伝って！」

「あ、わ、悪い！ちょい待って今すぐ高速神速で補助しちゃうからNE！」

怒られるのが怖い俺は、慌てて飛び出て大急ぎで洗面所へと駆け込んで手を洗う。

あー、そういや今日のご飯が何か聞くの忘れてた……。重たいやつじゃなければいいんだけどなあ。

で、結果として。

料理は麻婆茄子^{マーボーナス}だった。

重くはないけど軽くもなかったので、少しいい具合にお腹が膨れてしまった……。

食後にカナ姉は欠伸をひとつ、

「眠いから寝るわ。もう、限界」

とのこと。

やっぱり無理をしていたらしい。

ちなみに俺はと言えば、カナ姉が麻婆茄子を作っていた中華鍋を見ていいことを思い付いた。ので、早速カナ姉に交渉してみたのである。

「カナ姉、中華鍋ちよーだい」

「・・・いいわよ。好きに持って行きなさい」

何故かカナ姉は理由を訊ねることもなく、やけにあっさりと鍋の譲渡を承諾した。

微かに溜息交じりだったあたり、なにか含むところがありそうである。

でも気にしない！気にしては鈷真子の役に立つことなどおおよそ不可能だろうし、それ以上に考えるのが怖いというかなんというか。

俺は洗ったばかりの中華鍋片手に、そっと自分の部屋に忍び込む。いや別に忍び込んでいるワケではないのだが、隣でカナ姉が眠っているので、その配慮というか。

で、今夜の出撃に際しての準備を開始する。

とりあえず、今回は相手が武器を持っているらしいので、ソレに対する護りをひとつ。

「――フ。完璧だ・・・あまりの完璧具合で、俺はもう有頂天だぜ・・・」

背中の紐をキュッと締めて、俺はひとりほくそえむ。

俺の胸部から腹部にかけてを覆った“鎧”に、正直テンション上がるよー。見たか、この鉄壁のぼうぎょ！

俺の胸元に揺れる、ジャ○プを紐でくくり付けぶら下げた即製の“

鎧”！

これでOK完璧さ！

「・・・いやあ、死ぬかなあ」

セルフツツコミで冷静に。ていうか無意味にテンション上げてても悪影響しかでねえよ。

ないよりはマシだろうが、相手は何しろ槍である。紙の護りなど、そう大きな効果があるとも思えない。

まあ、その辺りのことは、鉦真子に会ったら聞いてみればいいだけの話である。

要らなければ捨てることも可能な、嗚呼、なんてスバラシイ即製鎧！

で、そうなるとお次は武器である。

これに関してはもう決めてある、人形を相手にしたとき有効だったバールを一本。

今回の相手は人型をしていると言うし、きっと叩けば効くだろう。

とはいえ、叩けるとどこまでいけるかどうかは、微妙なところだと思っただけだ。

「・・・よし、こんなもんだろ」

呟いて、リュックを背負う。

の中には、以前俺が用意したとおきの秘密兵器が入っている・
・・。

「ククク、こいつをみらのちゃんに持たせて武装させれば・・・」

・・・えーと。させれば、どうだろう？

流石にこの秘密兵器だけでは勝てる気がしなかったので、俺は考えるのを止めた。

必要以上にテンションが高いのも困りものだけれど、必要最低限のテンションは維持しなければマズいのである。

これ以上テンションが変動しないうちに、さっさと合流した方が良さそうだ。

幸い、時間もいい頃合いである。

俺は音を立てないように静かに部屋から出ると、聞こえない程度の小さな声で、カナ姉にいつも通りの挨拶をする。

「いってきます、カナ姉」

もちろん聞こえるハズもないけれど、それでも一応言うておく。

またこの場所に帰ってこれるようにと、願いを込めて。

集合場所は近衛橋^{このえ}。京都にも同じ名前の橋があるそうだけど、もちろんそっちとは何の関係もない、紙津町の近衛橋である。

集合場所に着いた俺は、心細そうに一人きりで立っていたみらのちゃんに声を掛ける。

「よっ、みらのちゃん」

「ひゃっ！」

で、声を掛けた途端怯えられる俺。

・・・俺が何をした・・・？

落ち込みかけた俺だったが、みらのちゃんが慌てて取り成してくれる。

「あっ、そのっ！ご、ごめんなさい先輩、ちよっとビックリしちゃってっ」

「あー、そっか。ビックリしちゃったのか。うん、そりゃあ仕方ないなあ、夜中にこんな橋に一人きりで待たされてちゃそりゃ怖くなるよなあ」

うん、それには心から納得なのである。何しろ以前この橋まで、夜の襲撃者は足を伸ばしているのである。危険がゼロとは到底思えない。

いつから待っているのか聞いてみれば、なんと既に十五分近く待つ

ていたという。そりゃ怖くもなるだろう。

「……んで、そっちはどう？ 家族とか、うまく誤魔化せた？」

俺のその問い掛けに、みらのちゃんは少し困ったような顔をする。
・
・
・
どうも芳しくないらしい。

「えっと、はい。一応誤魔化せたとはいえんですけど——わたし
が天体観測なんて、初めて言い出したので——ちよつと、訝^{いぶか}しん
でる様子でしたけど、まあ、大丈夫かと」

つまり次からどうなるかは判らない、と。

まあそれが普通の反応だろうし、おまけに最近は何物騒々しくてい
る。
選りにも選ってこんな微妙な時期を選ばずとも良いだろう、とい
うのが一般的な見解だろう。

「や、ごめんねみらのちゃん。鮎真子ってば、決めちまうと強引で
さ。次からはもうちょい出かけやすい時間帯にしてみようから、あ
んまり無理が過ぎるようなら遠慮なく文句を言ってね？」

「い、いえ。別に構いませんっ。麻七菜先輩だって考えがあってこ
んな時間を選んだんでしょし、わたしだけの都合で其処までして
いただくわけには——」

「ナニ言ってるんだよ。可愛い後輩ちゃんの都合を無視なんかできる
ハズねえじゃん。鮎真子には俺から言っとくからさ、マズいことは
マズいって言うんだぜ？」

何しろ俺は言えないからね。みらのちゃんが相手ならば、鮎真子も

そう無体なことは言いますまい。

せめてもの希望をみらのちゃんに託して、俺は溜息混じりに時間を確認する。

既に、指定の集合時間より五分近く経過している。感じる不審。ふと湧き起こる不安。

・・・鈷真子は割と時間に正確な性質タチだから、五分の超過というのも割合珍しい事態に入るワケなのだが――、

「あ、奈雅座先輩。麻七菜先輩です、ほら、あそこ！」

そんな俺の不安を打ち消すように、鈷真子はきっちり現れた。

山の方角から。

「――――、」

呼吸が停止しそうになる。心臓の鼓動が一瞬で倍ぐらいに加速する。耳の奥がキンとして、どんな音さえも拾えない。

そう、鈷真子は確かに現れた。山の中から、むき出しの手足や、柔らかな頬にたくさんの掻き傷をこしらえて。

「な、に―――してんだ、鈷真子」

辛うじて搾り出したようなその声に、隣のみらのちゃんが息を呑むのが判る。

でも、そんなの気にしている場合じゃない。鈷真子は一体、ナニを・
・・！？

「・・・ふう、ちょっと疲れてしまったのだ。みらのちゃん、ごは
んちょーだいなのだ」

「は、はい・・・」

狼狽しまくる俺を無視するように、鈷真子は全身細かい傷だらけの
まま、みらのちゃんに近付いて、なんとカロリーメイトを受け取っ
て徐にむっしやらむっしやらと喰い始める。なんだコレ。説明しよ
うよ、鈷真子さん！

そんな俺の悲痛な心の叫びが聞こえたのか、鈷真子さんは少し困っ
たような顔でこちらを向いて、面倒くさそうな声で呟く。

「ユータは絶対に止めるだろうと思ったから、ユータが居なくなっ
てから二人で決めたことなのだ。どの道、鈷真子が一旦山に入る必
要があったのだから」

その言葉に慌ててみらのちゃんに振り返る俺。そして気まずそうに
目を伏せるみらのさん。

なるほどそういうことか・・・！最初にみらのちゃんが挙動不審だ
ったのは、そういう理由もあったワケですねコンチクショウ。一杯
喰わされたよ万歳！

「え、と・・・すみません奈雅座先輩っ！口止めされてて、その・
・」

「ああ・・・うん、それは仕方ないから、怒ってないから。ね？気にしないよ？みらのさん？ね？ね？・・・ふう」

とりあえず後輩を凹ましていては先輩の名折れなので、フォローするつもりでそう言ったのだけれども、何故か余計に萎れるみらのちゃん。

それを見ていた鉦真子さん、にやりと愉しそうに笑って、

「おやおやこれはこれは。ユータは優しくていらっしやるのだー。鉦真子は絶対怒ると思ってたのにゃー。みらのちゃんカワイイからなのかにゃー。羨ましいにゃー。」

なんて、実に無責任に囃し立ててきやがるのである、コレが。

「うるせえ鉦真子。ていうか理由ぐらい聞かせろ、おたんこなす。なんで一人で山の中に入ってて、そんな掻き傷こさえて帰ってきてやがるんだ、ばか」

思わず口調が雑くなる俺に、愉しそうな顔をした鉦真子が小馬鹿にするような挑発的な口調で言う。

「おやおやん。みらのちゃんは怒らなかったのに鉦真子は怒られちゃったのだ！えこひいきは良くないのだー、えこひいきはんたーいなのだー」

其処まで聞いて、漸く察する。コイツ、俺を怒らせて有耶無耶にしようとしてやがる。

だから、俺は努めて冷静に。もう一度、大事なことを聞いておく。

「・・・で、なんで山ン中入ってたんだよ、鈷真子」

その言葉が終わらない内に、鈷真子の顔が微かに歪む。・・・あれは自分の失態を嘆く表情だな、多分。どうやら自分の態度が逆効果だったことに今更気付いたらしい。

ていうか鈷真子・・・今日のおまえ、なんか無防備すぎ。怖いおっちゃん見たからってまだ調子狂ってんじゃねえだろうな、オイ？

しかしながら、ソコはやっぱり鈷真子さん。どうやらきっちりしっかり潔く、観念するときは一きっぱり観念するらしい。

珍しくもちよっただけアンニユイな顔をして、溜息混じりに一言。

「・・・もう。今日のユータ、なんだか妙に鋭いのだ」

「馬鹿言うな。今日のおまえが鈍くさいだけだっつ」

「ふん。ユータの癖に言ってくれるものなのだ。・・・ま、とりあえず先の質問には答えておくのだ。みらのちゃん！」

「は、はいっ!？」

緊迫した空気の中、突如として名前を呼ばれたみらのちゃんは、がちがちに緊張した体をびびっと跳ね上がらせて、裏返った声で返事をした。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

顔を見合わせる俺と鉦真子。

いや、だって・・・・・・・・ねえ？

「・・・・・・・・・・。さて、それじゃあみらのちゃん！さっき打ち合わせた内容を、ばばーんっとユータに大公開なのだー！」

鉦真子はとりあえず見て見ぬフリと決めた様子だったので、俺もそれに倣うとしよう。

ひとまずワケも判らず拍手なぞしてみるけれど、どうだろう？

真っ暗な、夜もいいとこの川べりの橋の袂たもとに響く拍手の音・・・シユールだ。

しかしながら、その間抜けな拍手の音は幾分みらのちゃんの緊張感をほぐしてくれた様子で、みらのちゃんはなんだか微妙に挙動不審ながらも、ちゃんと説明を開始してくれる。

「あ、あの、えつとですね。麻七菜先輩がどうして山の中に行っていたかというと、それは――聖水、だそうです」

「聖水・・・？」

「そ、そうです。聖水。今日、神父様からいただいたてきた、36リットルの聖水です」

いや、それは判るんだけど。みらのちゃん、どうもまだテンパって

る様子で、イマイチ説明が要領を得ない。

「あの、その。あれだけの量の聖水は、到底担いで走れないそうで一足先に、修復しなければならぬ臭跡ライシに沿って、幾つかに分けて配置する必要があったとか」

其処まで聞いて、やっと理解。

理解はしたけれど当然納得していない俺は、みらのちゃんの頭を軽く撫でてから、鈷真子に向かってガンを飛ばす。いや、ガンを飛ばしているワケではないのだが。

「おい鈷真子……。そういう力仕事なら、なんで俺に任せなかった」

その言葉に対して、鈷真子はなにも答えない。ただ、自分の頬についた掻き傷を、軽く指先で触れているだけ。

ちよっぴり逸った俺が、もう一度同じコトを問い掛けようと、口を開きかけた刹那、

「この傷、山に生えてる木々を掻き分けて走ったときについたものなのだ、ユータ」

と、妙に静かな口調でそう言った。

「あん？そりゃ、見ればなんとなく判るけど――」

「どうして走ったかというと、それはもちろん逃……げるためなのだ」

「―――！」

逃げるため。ナニから？そんなの決まってる。あいつから。あいつらから。俺たちの聞いた、夜に徘徊する名もなきモノども。夜の襲撃者から。

「つまり、ユータに任せることに不安があったというワケなのだ。もちろんみらのちゃんにも。だからこそ、鉦真子は自分で行ったのだ」

俺ではきつと逃げられないだろうと。

みらのちゃんでは配置すら難しかろうと。

そう判断したから、鉦真子が行った。

理屈は判った。理屈は判ったけど、正直なところ―――ショックだったと、言ってもいい。

信頼されてなかったってコトか。俺じゃあ力不足だと思ったってコトか、鉦真子。

胸の内側がずきりと痛む。結局俺って、最初るときから変わってないってコトかよ・・・。

なんだか泣きそうになってきた。がんばれ俺。なかないで！。

加速度的に落ち込む俺。しかし、不意に後ろから、頭を優しく撫でられた。

振り向かなくても判った。みらのちゃんが落ち込む俺を慰めに来てくれたのである。

呆然と立ち尽くす俺の後ろに立って、ふんいつと背伸びをしてなんとか俺の頭を撫でている後輩ちゃん。やべえ、状況を忘れて萌えてしまいそうだ。

「そのですね、せんぱい？落ち込むことはないと思いますよ・・・」

落ち込みゲーと萌えゲーの綱渡りをしていた俺を、そんな言葉が引き戻す。

鉦真子は何故か、少し恥ずかしそうな顔で、俺の後ろで背伸びしているみらのちゃんを黙って凝視している。

俺は少し（というか結構）混乱しつつも、ふらふらと俺の頭を撫でている可憐な後輩ちゃんに向き直る。

「えっと、落ち込むことはないって・・・ナニ？」

そんな俺の姿が余程間抜けに見えたのだろう、みらのちゃんにくすり笑って、鉦真子の方を指し示す。

「だって要するに、麻七菜先輩はわたしたちを心配してくれてたんですよ？」

みらのちゃんのその言葉に、俺は慌てて鉦真子を見る。

「・・・・・・・・言われなきゃ判らない程度にしか、鉦真子のこと判

ってなかったのかにや、ユータ？」

不機嫌を装った顔で照れながら、鈷真子はそんなことを呟いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ッ！」

キューンときた！キューンって！これはあれです、恋！いやむしろ愛！鈷真子マジ可愛い。

ああ・・・もう鈷真子に一生ついていくとか思っちゃうよ？ねえ。いいんだろう？

「・・・・・・・・ごめんね鈷真子さん。大好き」

ぼろりとこぼれた本音を聞いて、俺の後ろでみらのちゃんがんばるか、ほうええ！？だかはうええ！？だか奇声を上げたけれど、正直気にならないぐらいLOVEゲージが急上昇。明日から、いやさ今からでも愛の戦士と名乗ってもいいほんです。

鈷真子はいえ、俺の態度がコロッと変わったことに呆れたのか、またまた珍しくも苦笑している。

・・・いやあ、なんかやっぱ今日の鈷真子、微妙に変。

後からこれが死亡フラグでした、とかそういう不吉なと言わないでくれよ、神様・・・。

信じてもない神様にそう願って、俺はリュックをがしやりと背負いなおす。

あととはとにかく生きて帰ろう。声には出さずに呟いて、俺は空を仰ぎ見る。

・・・やれやれ。天体観測の暇なんぞありやしねえってのさ。

・・・で、結局のところ。

「はい、却下」

声と同時に、ぽいっと無情に投げ捨てられる俺のジャンプ・ガード鎧。

「これも、却下」

声と同時に、がしんとけたたましく落下する俺のマイウエポンのバール。

「うーん、これは・・・まあ、使ってみるのもいいかもしれないのだ」

・・・というワケで、俺の装備は結局のところ、背中に背負ったりユックサックひとつになっちゃったのである。

ジャンプ
鎧、用ナシ。

鉦真子曰く、「その程度の厚さの本なら、たぶん受けた瞬間貫通してお陀仏なのだ。それを覚悟でいってみるかにや？」とのこと。鉦真子さんヒデエ。

武器、^{パール}用ナシ。

鈷真子曰く、「叩く暇があったら逃げる。相手の攻撃を弾くのも無理なのだ。見えないものに対処できるなら話は別なのだけれど」とのこと。一言多いよ鈷真子さん。

そういうワケで、さっきよりは幾分か身軽になった俺は、みらのちゃんと一緒に山の中へ分け入ったのだが。

ちなみに俺たち三人とも、ちゃんと学院指定のジャージに着替えは済ませている。

鈷真子め、飯だけでなくジャージの確保までみらのちゃんに任せていようとは。やるな。

しかしながら、それでもこの山は結構急勾配な上に、樹木も多く割合密集しているうえ、月明かりが明るいとはいえ夜なので、如何な運動性能の向上効果を秘めた魔性のジャージ（誇張表現アリ）といえども、歩きづらいことこの上もないワケで。

あの運動神経抜群の鈷真子でさえ、あれだけボロボロになった理由も判ろうというものだ。

「っと、大丈夫？みらのちゃん」

「は、はいっ、だいじょうぶ、ですっ」

早くも息が切れ始めた後輩ちゃんの手を取って引きながら、俺はどんどん先へと進む。

目標地点だとかそういうのは聞いていない。あくまで進行方向の目安となる方角のみ。

なにしろ、「どの道境界ラインに近付けば誘蛾灯に惹かれる虫みたいに群がってくるのだ」だそうである。

先ほど鈷真子が聖水を設置しながら逃げ回ったときでさえ、なんと三体もの襲撃者に遭遇したのだと言うのだから、いやはや・・・。

・・・鈷真子の作戦指示はこうである。

先ほど呼び寄せてしまった襲撃者三体を牽制しつつも後退し、修復箇所からひたすら遠ざける。その一点に尽きる。

いやあ、実にぎつくばらんというか、なんというか。曖昧すぎてちよっぴり困るというか。

まあ、難しく考える必要がない分、ある意味いつもよりは気楽なのだけれど――。

しかし問題は、今も危なっかしい足取りで俺の後ろを歩いている後輩ちゃんである。

どうもみらのちゃん、ぽにゃにゃんとした、実に少女らしく可愛らしい容姿に見合っただけの体力しか持っていないらしく、鈷真子ほどの性能を期待するのは難しい。

さて、この娘を庇かばいつつ後退とか、正直無理なんじゃね？とか思わなくもないのだが。

でもまあ、いつも通りにやるしかない。

みらのちゃんを置いて、とか、みらのちゃんは隠れてて、とか、そういうことはできない。

鉛真子はちゃんと考えて指示したはずだからだ。みらのちゃんは俺のバックアップとして、と。

・・・いや、案外みらのちゃんの身体能力を考慮してなかっただけかもしれないけど・・・。

とりあえず自分の想像はかなり怖くて、ぶっちゃけ助けてハヌマーン！って気分なので、まあ、そういう怖いことは考えないようにしよう。だって怖いのがやだよー？

・・・でも、実際問題心配である。

みらのちゃんは今もお、俺の後ろをはぐれないよう必死についてきているけれども、その呼吸はかなり荒い。はあはあってレベル。ちよいエロくて興奮しちゃうレベル。

・・・いやまあ、流石にそれに興奮するほど状況弁えてないわけではナイのですが。

とにかく、重要なのはみらのちゃんの息が早くも上がりかけているということ。

まだ戦闘速度でもないというのにこんな状態では、逃走自体が覚束おぼつかない。

もちろん、いざというときの手は考えてあるし、恐らく俺なら実行可能だろう。

が、それだと今度は俺の体力が持つかどうか。

いずれ、後のことを考えるのならば、早めに備えておいた方が良さそうだな……。

「……みらのちゃん。ちょっとこのリュック、持って」

「っ、えっ、は、はいっ」

はあはあと荒い息を吐きながら、みらのちゃんは俺の差し出したりユックサックを両手で受け取った。

「っ、こっ、これっ、結構重たいですねっ」

なんとか平時の呼吸に戻そうと努めているのだろうが、依然浅く早い呼吸のままのみらのちゃんはそう言って、僅かに興味を惹かれたように首を傾げる。

「えとっ、このリュックっ、なにが入ってっ、るんですかっ？」

「ああ、それねえ。みらのちゃんに武装させようと思ってさ、ちよっとした飛び道具を」

あと中華鍋も入ってます。

それは言わずにリュックを開き、中から取り出して見せることで示す俺。

重たいのは、基本としてこの中華鍋だけなので、残されたリュックはすっかりしぼみ、その重量も大したことはない程度。まあ、少しは重いんだけどさ。

で、中華鍋を取り出すついでに、リュックのサイドポケットからハンカチを取り出して、

「はい、みらのちゃん。汗だくだと風邪ひくぞう？」

とまあ、ちよつとクールに渡してみたりする。

いやだって、さっきからみらのちゃんほっぺ真っ赤で汗だくだし、顎から汗が垂れてるぐらいなんだぜ？

気になるってば。気になっちゃいますってば。

みらのちゃんは、きょとんと一瞬驚いたような顔をして、それから嬉しそうにぽにゅと微笑んだ。

「っ、ありがとうございますっ。せんぱいつ、優しいですねっ」

「うーん。優しいかどうかはさておいて、みらのちゃんが困ってるのはいただけないからね」

だって可愛い後輩ちゃんですよ？みらのちゃんは俺の、そして鉛真子の初めての後輩ちゃんなんですよ？

そうして立ち止まっている内に少しは楽になったのか、みらのちゃんは額や首筋の汗をハンカチで拭いながら、リュックを俺に差し出

した。

一瞬、このままみらのちゃんに持ってもらっての方が安心かなあ、
とか思ったのだけれど、みらのちゃんの体力を考えれば、少しでも
重量は減らしてあげた方がいいだろう。

俺は両手で抱えていた中華鍋を右手に持ち替えると、左手にリュックを受け取った。

「さて、それじゃあ行きましょう。早くしねえと鮎真子が来たところで鉢合わせになっちまう」

「そうですね、急ぎましようっ」

しかしながら、当然のことだけれど、ことは予定通りに運ばないものである。

この予定違いはある意味救いであると同時に、それは致命的な失敗である可能性も充分に考えられる。

つまりどういふことなのかと言うと――。

俺とみらのちゃんは夜の襲撃者とエンカウント接敵した。ただし、……一体のみと。

……月明かりに照らされた、僅かに開けた広場のようなその場所に、ソレは佇んでいた。

見た目は確かに人間だ。噂の通り、槍を掲げて甲冑を着込み、フルフェイス式の兜を被ったソレは、確かに人間にしか見えなかった。

でも、違う。

教会でレイニー・ブルー神父に感じたのとは全く異なる違和感が、背筋を伝って全身に広がり、厭な予感が胸の鼓動を早くする。

不覚にも足が震えそうだった。面白いことに歯の根が合わなくなりそうだった。そして悔しいことに、今声を上げたら、その声はきくと笑えるぐらいにみつともなく震えているだろうことを確信できてしまった。

そして運の悪いことに、ソレはとつくのとうに、俺たちの接近に気が付いていた。

掲げていた槍をがしやりと胸の前で構え、ソレはまっすぐに俺たちを直視する。

幸い、みらのちゃんの姿はソレの視界からでは直接確認はできないハズではあったが、それだって気休め程度の意味合いしか持つまい。

なるほどねえ・・・蘇芳会長の言っていたこと、こうして対峙してみて初めて身に沁みて実感する。

ありゃ、人間には見えないねえ。

人形と同じ感覚かなあとか考えていた自分をブン殴りたいほどの、それは違和感。

そう、一言で言うならば、正しく格が違うというヤツだ。

コイツに比べれば、俺たちが今まで退治してきた化け物どもは、とんでもなく下等な連中だったということがよく判る。

ソレはまだ動かない。槍を構えたまま、何事かを見定めるかのよう
に、暗い兜の奥から視線を注いだまま微動だにしない。

（・・・みらのちゃん）

（なんですか、先輩）

小声で話しかけても、幸いにしてソレはやはり微動だになかった。
いや、ありがたい。

（とりあえず、リュック・・・用意しといて。きつとすぐ、始まるから）

俺のその態度で、みらのちゃんの緊張は一気に高まった様子だった。
しかし、困った。コイツ一体で、俺たちの負担が減る分には嬉しい
が・・・。

最低三体、この近辺に潜んでいるのは確実なのだ。一体だけを引き
つけたところで、残り二体が鉦真子の方へ流れていってしまったのは
元も子もないというヤツだ。

てことは、もう少し境界に近付かないとマズいってことだよなあ。
まだコイツ、俺を敵かどうか判定し兼ねている風情だし。

確実に敵だと認識させて、それできちんと呼び寄せないと。ああ、全く苦勞する。

そうして、発見されているのを理解しながら繁みに身を隠すこと数分。きつと鈷真子は、今頃設置した聖水に向かって進んでいることだろう。そうなると、いよいよ急がなくてはマズい。

みらのちゃんの呼吸もだいぶ落ち着いてきたことだし、相手の方から動かれる前に、こっちで行動起こしておく致しましょう。

俺は背後のみらのちゃんに軽く目配せして、右手に持っていた中華鍋を両手に持ち直す。

そして、繁みから勢いよく、ソイツに向かって疾走する！

「・・・・・・・・・・！」

声は出さない。きっと情けなく震えまくっていることだろうし、なにより。

コイツ相手に、そんな行為は無意味だということが判り切っている・
・・！

三步ほどソイツに向かって近付いた瞬間、ソイツの構えが一瞬で変化する。そう、確実に攻撃できる態勢へと。

槍が閃く。槍の穂先はまるで見えず、ソイツの手の動きさえも霞んで見えたけれど、でも。確実に心臓を狙ってきたその一撃、間違えたりなどするものか――！！

咄嗟に両手で構えた中華鍋を、盾の代わりに差し出そうとして、

ふ、と。

厭^{いや}な予感に襲われて、中華鍋がふう、と胴から離れ、両手を前へと突き出した瞬間――、

スコオオオオooooooooooooン！

素晴らしく軽妙で軽快な、金属音。

同時に、俺の両手の中から、中華鍋が真っ二つに裂け割れて、空しく地面に転がり落ちた。

「じよ、」

背筋が凍る。ソレは一閃で中華鍋を紙のように切り裂いた穂先をすりりと引いて、コンマ1秒にも満たないほどの速度で二撃目の態勢を整える。

「冗談じゃ――」

肺腑が痙攣する。今にも悲鳴を上げそうな喉の奥、まるで嘔みみたいな速度で繰り出される、鋭い銀の穂先の残光を、俺の眼球が捉えかけ、

「冗談じゃねえ————ッ!!!!!!!!!!?」

絶叫と同時に、筋肉や骨格のことをまるで考えないほどにデタラメに強引に、全身全霊の力を振り絞って、地面に体当たりするみたいに倒れ込む。

ざくり、と頬の肉が、穂先に掠めて切り裂かれるのを自覚する。

頬が冷たい。熱い。痛みは不思議と感しない。ただ怖い。

躲した。なんとか一撃だけは回避した。でも後はない。倒れてしまった今、俺には一切の後がない——!!

倒れた位置からでは脚甲の先しか確認できないソイツの影が、まるで悪夢のような速度で翻り、倒れた俺に突き降ろされ、

「駄目え——————っ!!!!!!!!!!」

悲鳴のようなその声と同時に、狙いが僅かにそれて、俺の首の皮一枚を薄く削ぎ落とすだけの位置に突き降ろされる。

ざくりと裂かれる皮膚の痛みなど感しない。ただ最速で転がって、コイツの追撃から逃れなくては——!!

ごろごろと、まるで自分が鈍くさ這いずる芋虫になったみたいなき

分で、それでも必死に転がって、何とかソレの射程から転がり出る。

其処で漸く立ち上がり、呆然とした顔のみらのちゃんの腕を取り、振り向きもせずに走り出す。

ヤバイ。ヤバイ。ヤバイヤバイヤバイヤバイ。ヤベえヤベえヤベえヤベえヤベえ。

逃げなきゃ。逃げないと。今すぐ。もうすぐ。何処までも。何処へでも。アイツから。アイツらから。アイツらから――！

・・・アイツら、から？

その瞬間、頭から水を被ったみたいに冷静になる。死の恐怖でぐちゃぐちゃだった脳髓が、漸く常の思考を取り戻す。

アイツから逃げるのはいい。きっとアイツはもう俺を追いかけることに夢中になる。

でも、他の二体はまだ、俺たちと出会ってすらいない――！！

だから、そう。残りのヤツらが鉈真子に近付く前に、ちゃんと俺たちでおびき寄せないと。

そうして俺は、闇雲に走っていた足の方を変えて走り続ける。

幸い、混乱の中でさえ俺の方向感覚は正確で、進むべき方向は決まっている。

そうして更に数歩走ったところで、ようやく思考がみらのちゃんへと追いついた。

あ、と思って掴んでいた手を見ると、あまりに強い力で掴んでいたためだろう、みらのちゃんの細くて華奢な手の甲から指先まで、すっかり真っ白になっている。

そして、その真っ白になった指先に握られているモノを見て、漸く先ほどの奇跡の生還がナニに支えられていたものかを理解した。

「——みらのちゃん！悪い、ちよっとパニックってた！俺えー！」

ざざざ、と繁みを掻き分け進みながら、振り返らずに声を張り上げる。

後ろから声は返ってこないけれど、力を幾分弱めた掌に、軽く抵抗が返ってきた。ちゃんと届いてる証拠。

「ありがとみらのちゃん！みらのちゃんの御蔭おかげで命拾いしたぜー！」

その叫びの後、一拍置いてからおずおずと、袋を握り込んだままの、白魚しらうおみたいに優しいみらのちゃんの手が、俺の手首を握り返してきた。

どういう反応なのかまでは判別しがたいが、とりあえず怒ってはいないみたい。よかった。

で、そんなことを考えていた俺の背後で、がさがさと繁みを突っ切る固い音。

もちろんそんな音を発生させるようなヤツにはひとつしか心当たりがないので、背筋が凍って小便が漏れそうなほどの恐怖が全身をくまなく網羅していくワケなのだけれど、音はまだそれなりに離れているし、何よりその速度は俺たちよりも僅かに遅い。

一度だけ僅かに視軸をずらして背後を確認してみれば、泣きそうな顔で俺の後ろを転びそうになりながらも追走するみらのちゃんの姿と、更にその後ろ数十メートルを走ってくる、身の毛もよだつ襲撃者。マジ怖^{こえ}え。

でもまあ、直接的に襲われた俺もさることながら、それを客観的に見る羽目になったみらのちゃんはもつと怖いだろうし、なにより彼女の背後をこそ襲撃者は追っているのだ。

俺の怖さなど、どうということもない。

今にも転びそうになって、苦しそうに息を乱して走るみらのちゃんを、無理矢理走らせるなんていいワケねえだろうが・・・！

「みらのちゃん、ちょい失礼！しっかり掴まれー！」

言って、背負い投げをするような要領で、みらのちゃんの体を持ち上げる俺。そしてもちろん悲鳴を上げるみらのちゃん。

でもまあ、別に投げ捨てるワケでなし。みらのちゃんの華奢で軽い体を持ち上げて、俺は自分の背中にその体重を担ぎこむ。

途端に足にかかる負担は倍増するけれど、この程度ならまだ暫くは速度を維持して走っていられる。鈷真子の地獄のトレーニングにつ

いていった俺をなめんなよー。

「せつ、せつ、せんぱいっ!? 一体ナニをするんですかつ、今すぐ降ろしてくださいっ!!」

で、やっぱり当然当たり前だけれど、突然のことにテンパった声を上げるうしろのみらのちゃん。でもさ、ほら、今更降ろしても速度落ちるだけだし。ね?

「いいから! 俺前しか見れねえから、周囲の警戒任せたッ!」

正確には前と足元、それに加えて頭上である。

前は当然見なけりゃマズいし、足元見ないと三步と保たない。頭上忘れりゃ枝が打つ、とまあ、山の中を激走するのはそれなりに神経を遣うのである。それも、追いかっこの最中となればなおさらね。

そうして俺と襲撃者が恐怖の追いかっこに興じて(断じて楽しくはない)いると、背中にしっかりとしがみついたみらのちゃんが、か細い声で訊ねてきた。

「先輩・・・傷、大丈夫ですか・・・?」

傷? と一瞬だけ思いかけて、不意に頬と首筋から、忘れていた痛みが流れ出す。

「あいた! そ、そうだ、そーいや怪我してたっけ、俺! うわあ、みらのちゃんから見てどうよ!? たぶん平気じゃないかなとか俺は思っただけど!」

「あ、と、その。暗くて正直あんまり判らないですけど、出血も少ないみたいですから、きっと大丈夫です！」

それを聞いて安心する俺。で、悪いことに気が緩んだ所為なのか、忘れていたかったもうひとつのことを思い出す。というか、否^{いや}が応でも思い出させられたというか。

ずきずきと、全身至るところの肉と骨が疼^{うず}き始めたのである。

原因はハッキリしている。さっきの無理な回避が全身にキているのだ。

痛みは軽く無視できる程度のものだけけど、このまま全力疾走していたら悪化する怖れはまあ、充分にある。ありすぎて困る。

で、そんなところにタイミングがいいのか悪いのか、背後からの音の他に、もうひとつの音がいつの間にもやら増えているのに気が付く俺。

やべえ、増援来たよこれ。

「み、みらのちゃんっ！増援来てねえ！？ねえ、増えてねーっすか！？」

「は、はい！いつの間にかもう一体・・・先輩から見て左後方です！」

わお。やっぱり増えてた襲撃者。一匹だけでも俺の蚤^{ノミ}の心臓ははちきれそうだったのに、もう一匹増えたとなると、もう・・・なんていうか、いつそ笑いたくなってくる。無論、こんな状況で笑えるほ

どに神経太くないんだけどね。

しかし、一応俺から見て後方に位置するならば、これは非常な幸運だったと言うべきか。

少なくとも、挟み撃ちだとかそういう最悪の状況にはなっていない。

で、もう一匹をホイホイしたところを見れば、鉦真子の仮説はやはり正しかったってコトだよな。

だって今の俺は、その境界とやらに向かつて全力疾走しているのだから。

「あ、せんぱ——きゃあっ!!」

と、不意にみらのちゃんが悲鳴を上げて、俺の首っ玉に全力でがみつてきたものだから堪らない。首、首絞まってる。呼吸停止で俺死亡。

しかし流石はみらのちゃん、自分の行為がどういう意味を持つものか、一瞬で認識したらしい。

慌ててしがみついた腕の力を緩め、今にも泣きそうな声で叫ぶ。

「せんぱいいっ! どうしよう! す、すぐ隣からいきなりもう一体ツ・・!」

背中に抱えたみらのちゃんが、今にも死にそうな声でそんなことを言うところをみれば、その距離は余程に近いに違いない。なにしろ、耳を澄ませずともざくざくと地面を蹴る音が俺の耳にも届くほどのな

のだから。

距離は近く、おまけに速度も向こうがやや速い。実際にはたぶん、こちらの速度が先ほどよりも少しばかり落ちているのだろう。流石にみらのちゃんを抱えたままでは、そう長い時間、走行速度を維持できるとも思えない。

実際、少しばかり息は上がり始めていたし、体の各部の痛みは激しくなあって、体中が熱を持って軋んでいる。足だって、一度動きを止めたら最後、もう二度と走れないと思える程度には疲弊ひげいしていた。

「……！みらのちゃん、攻撃して！もう一度だっ！」

俺のその叫びで漸く思い出したのか、みらのちゃんは未だに握り締めていた袋を俺の背中で振りかぶる。

……この袋こそ、俺が以前から用意していた秘密兵器。

マンガを読んで思い付いたという、微妙に情けない来歴を持つその武器は、薄手のビニール袋の中に大量のタバスコを注入して作られた、一種の催涙弾である。

尤も、実験したことはなかったから効果のほどは判らなかったのだけれど、先ほど俺の命を救ってくれたのがこの武器である以上、まあ一定の効果はあったらしい。幸運なことに。

一応予備として、コショウを大量に充填したガシャポンのカプセルも用意してあるが、そちらも効くかどうかは神のみぞ知る、といったところ。

とにかく、そんな人間が喰らったらまず間違いなくのた打ち回るこ

とになるだろう危険兵器を振りかぶったみらのちゃんは、えいっという可愛い声と同時に投げ付ける。

その結果どうなったのか、俺には見る事ができなかったのだけれど、背後に迫っていた襲撃者の気配が瞬時に遠のいたことで、その結果は知れたのだった。

「や、やりましたせんばい！当たりましたっ！」

「偉いぞみらのちゃん！俺はもう君に惚れてしまいそうだッ！！」

と、いつも通りの馬鹿な切り返しを口にした瞬間、

ピロロロロロロロロ！

とかいう電子音が異常に音高く背中では鳴り響いて、俺の蚤の心臓は停止した。と思った。

要するに死ぬほどビビった。

「せ、せんばいっ！撤退の指示です！迅速に山から脱出せよ、だそうですっ！」

「鉦真子かチクショウ！ビックリしたぞコノヤロウ！それに簡単に無茶苦茶言ってくれやがって、山から出るにはあの忌々しい襲撃者どもにコンニチハしねえといけねーっつの！」

ひたすら悪態を吐きながらも、もちろん俺は内心ホッとしているワケで。

だって、少なくとも俺たちの陽動が失敗して、鉦真子に危険が及んだりしてはいないというコトが確認できたのだから。

「あーもうチクショウみらのちゃん！突破は無理だから迂回するけど、さっきと同じで、警戒と攻撃よろしく！」

「・・・とまあ、こういうワケで」

あれから十分ほどで、俺とみらのちゃんは命からがら山の中から抜け出したワケで。

結局あの後、タバスコ弾を二発に、コショウ弾を三発も使用して追撃から辛くも逃れることになった俺たちである。ちなみに、タバスコ弾よりもコショウ弾の方が効果は高かったらしい。

ともかくにも、二人とも一応は五体満足のまま帰還することができたのであった。

あと、途中で俺の心臓を停止させたあの電子音の正体は、みらのちゃんの持ってきた携帯電話のメール受信音だったらしい。鉦真子め、相変わらず周到な女狐である。

ちなみにもちろん、鉦真子もどうやら無事だったらしい。

境界を修復している間は結局、一体の襲撃者とも遭遇せずに済んだ
ライン
そうで、それを聞いた俺たちは大満足である。

そんな俺たちを眺めつつ、あちこちの掻き傷に絆創膏を貼った鈺真子が目を細めた。

「なるほど、想像以上に大変だったみたいなのだよ、ユータたちは」

「いやまあねえ。実際、俺死ぬかと思ったし」

ていうかみらのちゃんが咄嗟に反応して援護してくれなかったら、たぶん俺たち二人とも死んでたし。やっぱり神風特攻だったのである。ていうか頑丈な中華鍋を一撃で切り裂くとか、あいつらはもう少し常識というものを勉強するべきじゃねえのか。いやマジで。

とりあえず、だ。今こうして生還してから改めて考えてみれば、最初は隙あらばあんなものに対して攻撃しようとか考えていたのだから、やはり無知とは怖いモノである。

「とりあえず、境界は残っていた部分同士を、欠損部分を迂回して繋ぎ合わせたから、恐らくこれであの番人どもが彷徨い出ることはなくなると思うのだ。・・・うん、二人とも、本当にご苦労様なのだ。ユータは怪我までしちゃって、エラいエラいのだ。」

そう言いつつ、俺の頭をにっこり笑いながら撫でくるプリティガール。俺を殺す気か。

「みらのちゃんもありがとうなのだ。みらのちゃんがついていなかったら、きつとユータは死んじゃってたのだ」

今更ながらにゾツとするようなことを言う鈺真子さん。マジ勘弁。小便チビるぞ。

「いえ、その・・・奈雅座先輩には、今回迷惑を掛けっぱなしでしたので。走るのが辛くなったわたしを、先輩ったら担いで走ってくれたんですよ？」

「うん。それはまあ、見れば判るのだ。・・・っていうか、さっきから思っていたのだけれどにゃ・・・？いつになったら、降りるのかにゃん？」

そう言って、くふふふつと意地悪そうに笑う鉦真子さん。ていうか待って待って。あれ、そうそうそういえば・・・！？

どくんどくんという鼓動が、どうしてか背中を通して伝わってくる。というか、なんかあれだね、かなり壊滅的な^{やわらか}感触が、うん、なんていうか。なんていうか・・・！

「！！！！！！！」

俺ビックリ。みらのちゃんビックリ。今まで気付いていなかったという事実^にビックリ。

なんと、山を脱出してから今の今まで、みらのちゃんをずうっと背負いっぱなしでしたー！

慌てて降りるみらのちゃん。慌てて降ろす俺。そして笑う鉦真子さん。

あばー。鉦真子さん、気付いてたならすぐ言ってー。いやまあ、背中に残る感触は生涯の宝物クラスではあるのだけれど。

なんていうか、精神的疲労が二割増し。なんだコノヤロウである。

「ま、とりあえず無事に戻ってきて本当によかったのだ。・・・正直、今回は結構マズいかも、と思っていたのだから」

「うわ、やっぱり不味かったんスカ鈷真子さん。いやまあ、確かに比較にならないレベルでマズかったんですけどね？」

青くなってそう言う俺に向けて、鈷真子はまるで天使のように無垢な笑顔を向けて、

「そうなのだ。三体もの番人に追いかけられたときは、正直鈷真子でさえ生きた心地がなかったのだ」

「それを出発前に言わなかったのは善意なのか悪意なのか図りかねるが、どっちにしても性格悪ィぞ部長どの」

「あは。ユータはそんなことぐらいよく知っているハズなのだ。今更ナニを言うのやら」

くすくす笑う鈷真子さん。ブスッと膨れる俺。まだちよっぴり赤い顔のまま、困ったように苦笑するみらのちゃん。

時間にしてみれば三十分ほどの時間だったのだが、まるで一ヶ月ぐらい掛かったような気分である。

それは要するに、それだけ大変な思いをしたということなのだろうけれど。

とりあえず、今はひとつだけ確実に言えることがある。

それは――

「家帰って寝てえ。死にそう」

どうやらその思いは俺たち三人共通のものだったらしく、明るく笑って頷きあい、その場で即座に解散する。のだが。

鉛真子は工業地帯（要は街の東側）に住んでいるので、名残惜しいが本当に即座に解散である。

みらのちゃんは途中まで方向が一緒だという話だし、それに今日は色々あったワケで。

俺と違ってこういう事態に首を突っ込むのは初めてなハズの可愛い後輩ちゃんを、しっかり無事に家まで送り返して差し上げようと、俺は決めた。

その帰り道。みらのちゃんは、何故か俺のジャージの裾をしっかりと握り締めたまま歩いている。

いや、何故かなどとは言うまい。俺だって流石にそれぐらいは判っている。

だって、ジャージの裾を掴むみらのちゃんの手は、隠しようもなく震えていたのだから。

「・・・あは。ごめんなさい、先輩。今になって、やっと怖くなっちゃいました・・・。」

そう囁く声も、涙交じりの震えた声。

みらのちゃんは気丈に頑張っていたけれど、やはり本質的なところで鈷真子とは違うのだ。

鈷真子はなんだかんだとしっかり魔法使いやってるけれど、みらのちゃんはそんなことはない、本当に全く普通の女の子なのだ。

今日のアレが、怖くないハズがなかった。

「・・・いーって。ありゃろくすっぱ怖がりもしねえ鈷真子が異常なんだっての。俺もさ、みらのちゃんが居てくれたからなんとかあったけどさ・・・」

と、其処で一旦言葉を切って、振り返りみらのちゃんの顔を覗き込む。

「・・・ホントは、小便チビるかと思うほど怖かったんだよ。いやむしろ、槍でガツツンされたとき、ちよっぴり漏れてたかも」

気分を軽くしようと、敢えて恥ずかしいことを軽い調子で言ってみるが、みらのちゃんはぶるりと身震いをしてから、

「そう・・・ですよ。やっぱり先輩って凄いです。わたしならきつと、悲鳴も上げられず震えていることしか、できなかったと思いますから」

そんな風に、尊敬の混じった声で言ったものだから、俺はもうひとたまりもない。爆死。

「うあ。恥ずかしいからあんまり褒めないで。やべえ恥ずかしい」

自分でも顔が真っ赤になっているのが判ったので、慌ててみらのちゃんに背を向ける。

その様子だけで全部判ったのだろう、やっとみらのちゃんはくすくす^すと声を立てて笑ってくれた。ううむ、笑ってくれたのはいいけど、^{すげ}凄え情けない気分。

「うん、本当に、・・・せんぱい、格好よかったですよ」

「何処が格好よかったのか根掘り葉掘り聞きたい気分だけど、聞いたら逆に落ち込みそうだから聞かないでおくけどさ・・・ひとつだけ。・・・マジ？マジで格好よかった？」

情けない部分しか見せられなかったと思う俺としては、かなり疑わしい言葉なのだが・・・。

みらのちゃんのことだから、俺に気を遣ってんじやあるまいな、とか思っていると、みらのちゃんは俺の前にくると回り込んできて、ぽにゃっと柔らかい笑顔を浮かべ、言った。

「マジです。格好よくって痺れちゃいました。——わたし、もう先輩に惚れちゃいそうです」

その上手い切り返しに、俺は大いに笑って。

結局、みらのちゃんを家に送り届けて帰宅したあとも、ニヤニヤと無意識にニヤける顔面筋肉はそのままだったりしたのであった。ちゃんちゃん。

で、次の日。

久しぶりにカナ姉も朝の時間に起床していて、美味しい朝ごはんにありつける至高の朝。

全身細かい傷だらけになって帰ってきた俺を見ても、カナ姉はなんにも言わずに手当てをしてくれた。

もちろん、なにも聞かれることもなかった。

ただ一言、

「アンタ、ほどほどにしとかないと、今に痛い目見るわよ」

そう言われたときには、ちよっぴり肝が冷えるような思いをしたのだけれども。

で、全身の擦り傷切り傷打撲傷、更には無理な運動による筋肉や関節の痛みでフラフラだった俺は、学校に来るなりCクラスの恐るべき黒猫少女、野沢菜摘のざわ なつみに絡まれて大変だったのである。曰く「あたしのこまにゃんが傷だらけなの、アンタの仕業でしょう!？」とのことで、どうやら邪気眼、もとい性欲を抑えきれなくなった俺が、鉦真子に狼藉を働いたものと勘違いしたらしい。あほくさ。

自慢じゃねえが俺なんぞは鈷真子に襲い掛かったところで返り討ちだつての。

で、他にも色々あったのだが、それも一段落ついて漸く昼休み、というところで、復歸してきた蘇芳^{すおう}会長に呼び出されて、屋上まで出頭してきた次第なのであります、まる。

屋上の扉を開けると、蘇芳会長と鈷真子とみらのちゃん、あとついでに金魚のフン副会長も揃っていて、どうやら俺が最後の様子だった。

「来たか、奈雅座君」

言って振り返った蘇芳会長は、軽く驚いたような色を浮かべ、次いで悔しそうな、哀しそうな、なんというか絶妙に感情がブレンドされたような、凄い顔をした。

これは後になってから副会長の垂れ込みで知るのだが、この会長がそんな表情を浮かべたのを見たのは、実は主従関係を築いていた彼ですら初めてのことだったという。無駄にレア顔を拝んでしまった俺が、後日うっかり口を滑らしてしまつて一騒動起きるのだが、それは無論別の話である。

まあとにかく、会長はすぐに立ち直つたらしく、平静な表情に戻ると、ゆっくりと口を開いた。

「・・・麻七菜君から大体のあらましは聞いた。大変な苦勞を、君たちにはかけてしまったようだな・・・」

悔いるようなその声音に、俺は思わず心にもないことを言ってしまう。

「別に苦勞なんかじゃなかったツスよ？は、あんなトロくさい連中、百匹束になってこようがらくしょーらくしょーツス」

その言葉でにやりと笑う部長どの。ぽにゅと微笑むみらのさん。ビキリと青筋を立てる金魚のフン。そして、何故か酷く感極まったような表情を一瞬だけ閃かせる蘇芳会長。

「……。そうか、それならば、よかった。いずれ、非常にささやかではあるが、今回の一件についてはきちんと謝礼させてもらおう」

そう言って、左腕に持っていた重箱らしきものを軽く持ち上げる蘇芳会長。

「君たちの口に合うかどうかは判らないが、それでも料理は得意な方だな。この弁当を貰ってくれ」

そんなことを言いながら、持っていた重箱を広げ始める蘇芳会長。でも少し待って欲しい。

「かいちよー。自分で作ったんスカ？・・・腕は？平気なんスカ？」

この会長のことだから、なんか無理してたりしねえだろうなという思いと共にそう訊ねると、会長は少し冗談めかして肩をすくめ、

「なに、傷はまだ残っているが、料理ぐらいならば問題ない。腕もこの通り、自由に動かせるようになったのだし、な」

冗談めかした口調でそう言って、包帯が巻かれたままだけれど吊ってはいない右腕をひらひらと振って見せた。

「はあ。それなら結構で、いただくッスけど――」

安心してそう答えると、蘇芳会長は何故か僅かに頬を染めて、重箱の上三段をひよいと持ち上げて、俺に渡してきた。

「では、これを」

「は、はあ。ありがたく頂戴するッスけど、……すっげえ多いッスね」

「む。君は見たところ育ち盛りだからな、量が多めにしておいたのだが……」

「ああ、いや。マジありがたいッス。感謝感激豆もやし。いただくッス」

言いつつ恭しく押し頂くと、会長はうむ、と頷いて、鉦真子やみらのちゃんにも弁当を配り始める。

鉦真子とみらのちゃんは、それぞれ一段ずつだった。

……あれえ？俺だけ無性に多いよ……？

育ち盛りだからといっても、物事には限度というモノが。

まあ、重箱の中に詰まっているのは、どれも目が眩みそうなほど美味そうなものばかりだったので、当然文句のひとつも出ようハズも

ないのだけでも。

で、喰い始めるとマジでうめえよこいつぁ。

「な、なんだと・・・口の中からビームが出そうな美味さではないですか・・・?!」

「わおう！ホントなのだ、ビックリしちゃうぐらい美味しい料理なのだー！」

「わあ！本当ですね、流石は蘇芳会長です・・・料理もこんなに上手だったなんて」

口々に褒め称える俺たちを見て、蘇芳会長はほんの少しだけ嬉しそうな色を浮かべる。

「そ、そうか・・・君たちさえ良いのならば、毎日でも作ってくるのだが」

「え。いや、そりゃあ流石に悪いッスよ。なあ鈷真子」

そうやって同意を求めてみたものの、鈷真子は何故か反応しない。

「なに、この程度はどうということもない。君たちは、その程度は許されるほどに大変な仕事をこなしてくれたのだからな」

ふうむ、と、鈷真子が不意に唸り声を上げて、

「よっし、判ったのだ。では、その話ゼヒとも受けるのだ」

と、よく通る可愛い声でそんなステキに図々しいことを言っていた。

「ちょ、鈷真子。流石にそりゃ図々しいってもんだろうが」

当然起こった俺の反論に、鈷真子は軽く人差し指を立てて、それを左右に振る。

「ちっちっちー。まだ続きがあるのだ。そりゃあ流石に鈷真子だって、其処まで図々しいことは言ったりしない、のだ」

くすくすと楽しそうに笑って、鈷真子はその続きの言葉を口にした。

「お弁当はお願いするのだ。ただし、それは今回の謝礼に限らず、次回からの蘇芳会長を通した依頼の報酬、その前払い分ということをお願いしとくのだ」

「ふむ。それでは釣り合わないように思えるが――君たちがそれで納得できるのなら、その条件を呑もう」

納得できるっていうか、むしろそれでもまだ図々しいぐらいの条件なんですけど。

でもまあ、鈷真子が決定しちゃった以上、俺がナニを言っても無駄無意味だし。

俺もそれでいいと頷いた。

みらのちゃんも当然頷いた。

鉛真子は笑って、残った弁当をもつきゅむつきゅと幸せそうに食べる。
始める。

俺は肩をすくめて、みらのちゃんほにゃんちと微笑んで。

三人仲良く食べる昼ごはんは、いつにも増して格別に美味しいものだ、
と。

そんな幸せなことを考えて、俺たちは残った弁当を残らず平らげる
のだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8659f/>

学園まろんズ

2010年10月20日20時08分発行